

熊谷館跡他発掘調査報告書

— 区画整理事業に伴う中世城館跡の調査 —

平成13年3月

宮城県富谷町教育委員会
大和・富谷町南富吉土地区画整理組合

熊谷館跡他

— 区画整理事業に伴う中世城館跡の調査 —

序 文

富谷町には旧石器時代から近世にいたるまでのおよそ60ヶ所にわたる埋蔵文化財の存在が知られています。これらの遺跡には、先人の築いた歴史が刻み込まれています。このような人間活動の歴史は貴重な文化遺産であり、後世に伝えることは私達にとって重要な責務であると考えます。

しかしながら、道路建設、大規模な土地区画整理や住宅建築など、生活関連の各種開発事業が年を追うごとに激化しており、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊・消滅の危機にさらされることが多くなってきています。

昔の人々の生活痕跡が具体的な形で残されている埋蔵文化財は、地域の歴史を解明する貴重な歴史資料であり、地域の伝統文化の根源をなすものです。当教育委員会としても、文化財が長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であることを深く認識し、開発関係機関との協議・調整を重ね、できる限り貴重な文化財を地域で保存・活用し、後世に伝えることに努めているところです。

本報告書は、町内熊谷地区の土地区画整理事業に伴う熊谷館跡の発掘調査報告書です。開発関係機関との協議・調整に基づき、当町教育委員会が平成8年度に実施した熊谷館跡他の確認調査と、平成9・10年度に実施した事前調査との成果を収録したものです。これらの調査成果が、地域の歴史的解明と文化財保護の理解に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、及び発掘作業にあたられた皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成13年3月

富谷町教育委員会

教育長 佐々木国雄

例 言

1. 本報告書は、平成8年度から10年度にかけて発掘調査した熊谷館跡他の報告書である。今回の報告はこれら4次の調査成果をあわせて収録するものである。
2. 発掘調査は富谷町教育委員会が主体となり生涯学習課(旧社会教育課)文化財保護係が担当した。
3. この発掘調査にあたり宮城県教育庁文化財保護課からご指導とご協力を賜ったので、記して謝意を表するものである。
4. 本書の作製は、富谷町教育委員会生涯学習課文化財保護係が担当し、整理・執筆・編集は大和幸生(現多賀城市立高崎中学校)・佐藤道子が行った。なお、担当した教育委員会事務局職員は次のとおりである。

教 育 長	佐々木国雄
社会教育課長	永山 伸樹 (平成8年4月1日～平成9年3月31日)
生涯学習課長	永山 伸樹 (平成9年4月1日～平成11年3月31日)
生涯学習課長	村山 令記 (平成11年4月1日～)
社会教育課長補佐	堀籠 和弘 (平成8年4月1日～平成9年3月31日)
生涯学習課長補佐	小松 巖 (平成9年4月1日～平成12年3月31日)
文化財保護係長	大和 幸生 (平成8年4月1日～平成12年3月31日)
文化財保護係主事	佐藤 道子 (平成9年4月1日～)
文化財保護係主事	織田 利彦 (平成8年4月1日～平成10年3月31日)
文化財保護係主事	佐藤 淳 (平成10年4月1日～平成12年3月31日)

5. 発掘調査及び整理、報告書の作製には次の方々及び機関から指導・助言を賜った。(以下敬称略)

宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館

阿部博志	井口祐二	伊藤 裕	梶原 洋	加藤道男	後藤秀一	斎藤吉弘
佐藤則之	佐久間光平	白鳥良一	進藤秋輝	菅原弘樹	須田良平	田中則和
千葉景一	藤井祐二	藤沼邦彦	原川英二	古川一明	真山 悟	山田晃弘

吉井 宏

6. 本館跡の調査成果については、現地説明会資料、宮城県遺跡調査成果発表会、熊谷館跡—平成8年度発掘調査概報—(1997)において一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
7. 発掘調査の記録や整理した資料および出土遺物については、すべて富谷町教育委員会が保存・活用をはかることとする。

凡 例

1. 本書の遺構番号は、平成8年度のものを一桁、平成9年度のもの100番台、平成10年度のものを200番台で番号を付している。
2. 本遺跡は範囲が広いので、便宜上A～Hの調査区を設定した。北側丘陵をA区、東西丘陵頂部をB区、南側丘陵をC区、東西丘陵北斜面をD区、東西丘陵南斜面をE区、E区の沢向かいの北斜面をF区（熊谷A遺跡）、D区の沢向かいの南斜面をG区（熊谷B遺跡）、南側丘陵南端部をH区とした。
3. 本書における土色についての記述は、「新版標準土色帖」（1997年版）を使用した。
4. 本書の地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。また、館跡の現況測量図は、株式会社オオバが作成したものを使用した。本文中第3図及び付図の熊谷館跡検出遺構と周辺の地形図はアジア航測(株)が作成したものを使用した。
5. 本書に掲載した航空写真は、建設省国土地理院発行の1964年撮影の航空写真を複製して使用した。
6. 本書での掘立柱建物跡の建物総長及び柱間寸法、柱穴列跡の総長及び柱間寸法の記載については、柱痕跡が確認できたものは柱痕跡の中心を基準にした芯々距離で、柱痕跡を確認できなかったものは柱穴の中心を基準に計測した。また、柱穴の中心を基準に計測したものは（ ）書きで示した。
7. 本書での遺構の重複の記載については、直接の重複関係にあるものは新旧を記載し、重複関係にあっても新旧関係が不明なものについては新旧関係不明として記載した。また、直接重複関係になくとも平面的に同時に存在しえない遺構についても新旧関係不明と記載した。
8. 本書で使用した航空写真はアジア航測(株)に委託し撮影した。
9. 各遺構の水準高は、標高である。
10. 出土遺構中のスクリーントーン部分は、整地の範囲を示す。
出土遺物中のスクリーントーン部分は、磨面の範囲を示す。

目 次

序 文	富谷町教育委員会教育長 佐々木 国雄
例 言	
凡 例	
目 次	
調査要項	
I. はじめに	1
① 遺跡の位置と自然環境	1
② 周辺の遺跡と歴史的環境	1
II. 調査にいたる経過	4
III. 遺跡の現況	4
IV. 調査の概要	5
V. 発見された遺構と遺物	9
① 東西丘陵頂部 (B区)	9
主郭	9
副郭	29
② 北側丘陵 (A区)	38
③ 南側丘陵 (C区)	52
④ 東西丘陵北斜面 (D区)	69
⑤ 東西丘陵南斜面 (E区)	69
⑥ 南側丘陵南端部 (H区)	71
⑦ 土壇跡	71
⑧ 焼土遺構	88
⑨ 発見された遺物	110
VI. 考察	125
VII. 中世の歴史的環境と文献資料	132
① 中世の歴史的環境	132
② 文献資料	133
VIII. まとめ	135
引用・参考文献	136
写真図版	137
報告書抄録	177

調 査 要 項

遺 跡 名：熊 谷 館 跡（宮城県遺跡登録番号25001）

熊谷A遺跡（宮城県遺跡登録番号25053）

熊谷B遺跡（宮城県遺跡登録番号25054）

所 在 地：宮城県黒川郡富谷町富谷字熊谷及び大和町小野字新道地内

調査原因：区画整理事業

調査目的：記録保存のための事前調査

調査期間：1次調査 平成8年5月7日～8月31日（確認調査）

2次調査 平成8年9月1日～12月6日（事前調査）C区・H区

3次調査 平成9年4月14日～12月18日（事前調査）

B区（主郭）・C区・E区・F区（熊谷A遺跡）

4次調査 平成10年4月14日～12月2日（事前調査）

A区・B区（副郭）・D区・G区（熊谷B遺跡）

室内整理 平成11年4月1日～平成13年3月30日

調査面積：約87,000㎡

調査主体：富谷町教育委員会

調査担当：富谷町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、大和・富谷町南富吉土地区画整理組合

株式会社松村組東北支店、株式会社オオバ、(株)三朋ビルド

調 査 員：平成8年度 大和幸生 織田利彦 齋藤吉弘（県文化財保護課）

平成9年度 大和幸生 佐藤道子 織田利彦 伊藤 裕（県文化財保護課）

平成10年度 大和幸生 佐藤道子

発掘調査参加者：

相澤正信	青野節子	阿部セツ	阿部みつ	阿部陽子	石川 卓
石船清隆	伊藤高代	伊東裕輔	植田 創	内海満喜子	遠藤章太
遠藤喜八	大沢郁子	岡野勝美	加藤明日香	片山敬栄	菅野久美子
河端由子	木下洋子	木村陽子	熊崎伸子	工藤洋子	郡司光之助
後藤まさこ	今野幸子	齋藤一夫	榊原悦子	佐竹優子	佐藤典雄
佐藤まり子	塩野佳津子	塩野憲太郎	清水義次	白鳥たか子	菅原昭男
善波朋子	高嶋襲雄	高橋 敏	高橋 姫	田中つや子	千田勝子
千田智江	鶴田朋子	中村祐子	名越由美子	平田雄裕	深沢美奈
藤原英子	細川幸子	宮本由紀子	丸森淑弘	八木千春	若生涼枝
渡邊 洋					

整理参加者： 河端由子 佐藤まり子 相澤正信 鶴田朋子 早坂明美

I. はじめに

富谷町教育委員会では、大和・富谷町南富吉土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成8年度から平成10年度までの4次にわたって熊谷館跡の発掘調査を実施してきた。これらの調査成果については、既に概要の一部を報告している（大和：1997）。

4次にわたって行われた発掘調査は、館跡全域と新たに発見された熊谷A・B遺跡とをあわせた約87,000㎡の広大な発掘面積となり、平成10年12月2日に終了した。そこで、本報告はこれまで公にしている1・2次調査の成果と3次から4次調査までの内容をあわせまとめ、熊谷館跡他発掘調査の最終報告とする。

① 遺跡の位置と自然環境（第1図）

熊谷館跡は、宮城県黒川郡富谷字熊谷と大和町小野字新道にまたがって所在する遺跡で、富谷町西部に位置し、地下鉄泉中央駅から北に約7km、富谷町役場から南西に約2km、国道4号線から西側に約0.4kmの所に位置している。

東北地方には南北を縦断する奥羽山脈が連なり、富谷町の西北に宮城県の名峰の一つである標高約1,500mの船形山がそびえている。その船形山の東側には、陸前丘陵の一つである大松沢丘陵（北部）と富谷丘陵（南部）がのびている。また、黒川地方のもっとも著名な山々として、富谷町の北西部には七ツ森がそれぞれ独立して連なっている。大松沢丘陵と富谷丘陵の間には吉田川とその支流である善川、竹林川、西川等が流れ、その流域には吉田川低地を形成している。

富谷町の地形を概観してみると、大部分を富谷丘陵が占めており、町中心部は吉田川水系の低位の河岸段丘上に立地している。富谷丘陵は、関川・西川によって形成された沖積地によって南北に二分され、北部は標高50～70mの小丘陵が東西にのび、南部は標高60～80mの小丘陵が南北に枝状にのびている。

本遺跡は富谷町西部に位置する南北に延びる丘陵中央部に位置し、地域内ではもっとも高い山稜となっている。また、この丘陵は西川と竹林川の分水嶺となり、大和町と富谷町との町境になっている。

② 周辺の遺跡と歴史的環境（第1図）

現在、富谷町には59ヶ所の遺跡が確認されており、本遺跡の周辺には多くの遺跡が点在している。時代別に概観して、歴史的環境について述べてみる。

<旧石器時代>

旧石器時代の遺跡では、富谷町には本遺跡より北東に約2kmの丘陵上にチョッパー、チョッピングツール、尖頭スクレイパーなどが採集されている宮の沢遺跡や、本遺跡の0.5km東側には、エンドスクレイパーや石刃が採集されている平沢遺跡など7遺跡が知られているが、大半が断面採取によるものでその概要は不明なところが多い。大和町を見てみると、区画整理地内に小野C遺跡が、本遺跡西側の丘陵末端に小野A・B遺跡がそれぞれ知られている。また、昭和59年に発掘された中峯C遺跡が本遺跡の約8km北に位置し、後期旧石器から前期旧石器までの5枚の文化層がみとめられ、日本でも最古級の遺跡として知られている（小川・菊池：1985）。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	熊谷館跡	中世	20	小国館跡	中世	39	宮の沢遺跡	旧石器
2	熊谷A遺跡	縄文・中世・近世	21	原前南遺跡	縄文早・前、古代	40	三ヶ森遺跡	奈良・平安
3	熊谷B遺跡	縄文・中世・近世	22	菅ノ沢遺跡	平安	41	上中田遺跡	古代
4	源内遺跡	平安	23	兵六館跡	中世	42	荒田沢溜池前遺跡	縄文晩
5	大童館跡	中世	24	日吉神社前遺跡	縄文晩、弥生	43	段ノ沢遺跡	縄文晩
6	鹿鼻館跡	中世	25	湯舟沢遺跡	縄文早・前	44	荒田沢遺跡	縄文晩
7	奈良木城跡	中世	26	平沢遺跡	旧石器	45	東沢A遺跡	縄文早・前・晩、弥生
8	小谷館跡	中世	27	落合遺跡	平安	46	東沢B遺跡	旧石器、縄文早・前・晩
9	馳取城跡	中世	28	大清水遺跡	縄文早～中・晩	47	仏所遺跡	旧石器、縄文早・前・晩
10	小野目館跡	中世	29	寺前下遺跡	縄文	48	根崎沢遺跡	旧石器
11	南桶城跡	中世	30	鳥屋又館跡	中世	49	郷田塚	中世、近世
12	堂屋館跡	中世	31	寺前遺跡	平安	50	白鳥遺跡	縄文、奈良
13	門前城跡	中世	32	亀水作遺跡	縄文中・晩、弥生、古代	51	亀水作B遺跡	縄文中・晩、弥生、古代
14	熊野館跡	中世	33	鳥屋又遺跡	旧石器	52	亀水作C遺跡	古代
15	館山経塚	室町	34	熊野遺跡	旧石器・縄文中	53	鶴巣館跡	中世
16	穀田十三塚	近世	35	大清水上遺跡	平安	54	下草古城跡	古代、中世
17	穀田経塚	中世	36	栃木沢遺跡	縄文早・前	55	鳥屋八幡古墳	古墳後
18	下桜木製鉄遺跡	平安?	37	太子堂下遺跡	縄文早・前	56	鳥屋窯跡	古代
19	上桜木製鉄遺跡	平安?	38	奈良木沢遺跡	平安			

第1図 遺跡の位置と歴史的環境

<縄文時代・弥生時代>

縄文時代の遺跡では、富谷町には湯船沢遺跡（早・前期）や、今はほとんど壊滅状態である亀水作遺跡（早・晩期）など20遺跡が知られているが、その詳細は不明な点が多い。大和町を見てみると、本遺跡の北東5kmほどに勝負沢遺跡（中期）が位置し、東北自動車道関連で調査・報告がなされている（丹羽ほか：1982）。

弥生時代の遺跡では、富谷町には天王山式の土器やアメリカ式石鏃が採集された日吉神社前遺跡や東沢A遺跡など4遺跡が知られているが、その詳細については不明な点が多い。

<古墳時代>

古墳時代の遺跡では、富谷町に今のところその存在を知られているものはない。大和町を見てみると横穴式石室のある鳥屋八幡古墳（後期）、別所横穴墓群などが知られ、特に鳥屋八幡古墳は昭和41・42年に発掘調査され、県の史跡に指定されている（大和町教委：1966・1972）。

<奈良・平安時代>

奈良・平安時代の遺跡では、富谷町の原前南遺跡が東北自動車道関連で調査され、集落の一部が発見された。調査成果では、関東系の遺物が出土していることから律令体制初期の移民との関連が示唆されている（千葉：1982、今泉：1989）。また、本遺跡から北に約4.8kmのところに三ヶ森遺跡が位置し、区画溝や遺物が発見された（大和：1999）。大和町を見てみると、本遺跡から6.1kmほど北に一里塚遺跡（吉岡東官衙遺跡）が立地し、環濠に囲まれた集落と材木堀に囲まれた正倉院等の遺構が発見され、古代の黒川郡の郡衙などにあたると考えられている（手塚・加藤：1990、藤井ほか：1996）。また、前述の中峯遺跡では平安時代の集落が発見されている（小川・菊地：1985）。

<中世>

中世の遺跡では、丘陵上を利用した城館跡が多く見られ、黒川郡内には60ヶ所の城館跡の存在が知られている。そのうち、富谷町内には14ヶ所の城館跡が知られており、本遺跡の東4km範囲内には館跡8ヶ所が密集している。富谷町では、永和2年（1376年）の銘を持つ青銅製経筒が出土している館山経塚があり、本遺跡から約3.4km北に位置し、同じ丘陵上の門前城の頂部平場に位置する。また、本遺跡から約4.8km北の馳取城の西側には、弘安の古碑（弘安3年＝1280年）があり、黒川郡内でも最も古い金石文資料である。大和町では21ヶ所の城館跡の存在が知られており、本遺跡から北北東に約4.5kmのところに黒川安芸守晴氏の居城鶴巣館跡が知られている。また、東北自動車道関連で調査された御所館跡、八谷館跡は、14～16世紀代の館跡と報告されている（斎藤：1983）。本遺跡から南東に約10.4kmのところには岩切城跡がある。

<近世>

近世の遺跡については、富谷町では4遺跡知られているが詳細は不明である。大和町を見てみると、本遺跡の5kmほど北北東に近世初頭の下草古城跡があり、圃場整備関連で調査が継続して行われ、近世初頭の城郭及び城下町の構造を知る上で貴重な遺跡である（須田：1993他）。また、本遺跡の3.6kmほど北西の宮床には近世磁器を焼成した宮床窯跡があり、近年報告がなされている（藤井：1998）。

II. 調査にいたる経過

富谷南部の丘陵地帯は仙台に隣接する北部丘陵地として森林の生い茂る自然豊かな丘陵である。近年、宅地開発に伴い周辺環境は急激に変貌を遂げている。本遺跡の立地する丘陵も例にもれず宅地化が進み、本遺跡の南側には「パルタウン大富」団地がすでに完成している。

平成4年10月に大和・富谷町南富吉土地区画整理組合設立準備委員会が結成され、大富団地の北に住宅団地を造成するため区画整理する計画が持ち上がった。同年11月に文化財に関わる事前協議書が宮城県教育委員会文化財保護課・大和町教育委員会・富谷町教育委員会に提出され、平成7～13年まで区画整理事業を行い宅地造成を行う計画であった。

当事業計画地内には、周知の遺跡として、熊谷館跡（中世）、源内遺跡（平安）、小野C遺跡（旧石器）があり、協議及び現地踏査を重ねた結果、①熊谷館跡の1/500の現況測量図を作成し、今後の保存協議の資料にすること。②非常に良く残っている館跡であるから保存を前提とした協議を進めていくこと。③源内遺跡は当該工事が遺跡の主体部分には及ばないことから工事時の立ち会い調査をすること。④小野C遺跡は、遺構・遺物が確認できないので慎重に工事すること。以上4点の相互の確認を行った。なお、熊谷館跡は富谷町と大和町にわたって立地しているが、その大部分が富谷町にあることから富谷町が対応することとなった。

県文化財保護課・町教育委員会と組合との間で熊谷館跡の保存に向けての協議を何度も重ねてきたが、都市計画道路と造成工法などの問題で、現状のままでの保存が難しい状況になった。県文化財保護課との再三にわたる保存協議にもかかわらず、発掘調査による記録保存の方向で事前調査を実施することとなった。

その間に館跡の裾廻りに切り出し道路が造られ、竖堀や通路などの遺構を破壊し、後日の調査にも多大な影響を及ぼした。これに対して大和・富谷町南富吉土地区画整理組合は県文化財保護課に理事長名で始末書を提出し、今後の取り扱いに細心の注意をもって対処する旨を約束した。平成8年度に富谷町の文化財保護行政も新たに社会教育課内に文化財保護係を設け、文化財保護の一事業として5月から調査範囲確定のための確認調査を実施した。それに基づき熊谷館跡の発掘調査に関して組合と富谷町との間で委託契約が結ばれ、記録保存を目的とし、一つの館跡を全面事前調査するという希少な調査を実施するに至った。

III. 遺跡の現況

遺跡の位置する丘陵は東西方向の丘陵（標高約99m）とその東西方向の丘陵の西側から一段下に北に延びる丘陵と南に延びる丘陵とに分かれる。切り通し道路による破壊のため不明な部分が随所に見られるが、全体としてT字状の丘陵を利用して遺構を配置した中世の館跡である（第2図）。

東西丘陵（B区）には、南東方向に延びる長方形の上段平場（主郭平場）、北東方向に延びる下段平場（副郭平場）がある。上段平場の周囲には幅が1～6mの狭い腰郭が2段あり、北東隅には下の腰

郭に通じ、更に下段平場に通じる最大幅約2mの切り通し状の通路が認められる。上段平場の南西隅には腰郭と南・北の丘陵に通じる最大幅約4mの切り通し状の通路が認められる。下段平場の北・南側には幅の狭い2段の腰郭があり、東側には尾根を利用した切り通し状の通路が裾まで延びる。また、下段平場の南側斜面には腰郭1段、通路等が認められる。

北側丘陵（A区）は主郭から北西に延び、中央付近から北東方向に湾曲している。東・西の斜面には堀切が2ヶ所、東側斜面には腰郭が3段、通路が3ヶ所認められる。西側斜面には腰郭が1段、通路が2ヶ所認められる。

南側丘陵（C区）は、主郭付近から南西方向に延び、中央付近で南に湾曲している。東・西の斜面には土塁状の高まりを伴う縦堀が3ヶ所、東側斜面には腰郭1～3段、中央付近には幅の狭い通路が1ヶ所認められる。また、西側斜面の中央付近には幅の狭い通路が1ヶ所認められる。

IV. 調査の概要

1次調査から4次調査までの調査区域は第2図に示した。調査期間や主要な遺構についての詳細は後述するが、概略を表1にまとめた。

調査	調査期間	面積	調査区	調査形態	主要検出遺構
1次	'96. 5 / 7～8 / 26	3,000㎡		確認調査	平場、腰郭、通路
2次	'96. 9 / 1～12 / 6	9,000㎡	C・H	確認・事前調査	腰郭、土壇跡、炭窯、溝跡、掘立柱建物跡、縦堀
3次	'97. 4 / 14～12 / 18	44,000㎡	B・C・E・F	事前調査	平場、腰郭、通路、掘立柱建物跡、柱穴列跡、橋脚跡、縦堀、堀切、土壇跡、炭窯、整地
4次	'98. 4 / 14～12 / 2	40,000㎡	A・B・D・E G	事前調査	平場、腰郭、通路、掘立柱建物跡、柱穴列跡、堀切、土壇跡、炭窯

表1 調査区一覧表

第1次調査：この調査は、館跡全域に対して遺構の密度や遺存状況及び館跡の範囲を確認し今後の調査の仕事を積算するために、調査対象全域に15本のトレンチを入れ、併せて本館跡の主体部分となる東西丘陵の主郭と副郭の表土剥ぎも実施した。トレンチの配置は、北側丘陵のA区に3本（①～③トレンチ）、東西丘陵北斜面D区の西～東に7本（④～⑩トレンチ）、南側丘陵のC区に3本（⑬～⑮トレンチ）、東西丘陵南斜面E区の沢向かいにある北斜面F区の東側に2本（⑪・⑫トレンチ）とした（第2図）。トレンチの総面積は約3,000㎡であった。

確認調査の結果、現況では確認できなかった腰郭、通路、縦堀、整地地業などが丘陵斜面にみられた。このことから、本館跡は東西丘陵・北側丘陵・南側丘陵とこれらの丘陵を囲む沢の部分も含めた約73,500㎡の範囲と考えられる。また、館跡の東西丘陵部分を南の沢をはさんで位置する丘陵の北斜面（熊谷A遺跡）と、北の沢をはさんで位置する丘陵の南斜面（熊谷B遺跡）でも、焼土遺構や土壇跡、炭窯を確認し、館跡と様相が違う両地区を新たに遺跡として登録した。発掘調査では熊谷A遺跡をF区、熊谷B遺跡をG区とした。調査対象範囲は、館跡部分（A・B・C・D・E・H区）と熊谷

A・B遺跡（F・G区）をあわせた約87,000㎡で、確認調査は8月26日をもって終了した。

第2次調査：第1次調査に継続して南側丘陵（C区）から事前調査を実施したところ、組合から造成工事の関係上、南側丘陵先端部分（H区）を早めに着工したいとの申し出があった。組合・町教育委員会で調整を図り、対象となるH区の約3,000㎡を事前調査終了後に引き渡すことで合意し、H区から調査を開始した。調査は9月中旬に終了し、引き続き南側丘陵（C区）の表土剥ぎ、遺構確認、精査を実施した。また、併せて主郭上段平場（B区）の遺構確認、精査も行い12月6日をもって平成8年度の調査は終了した。

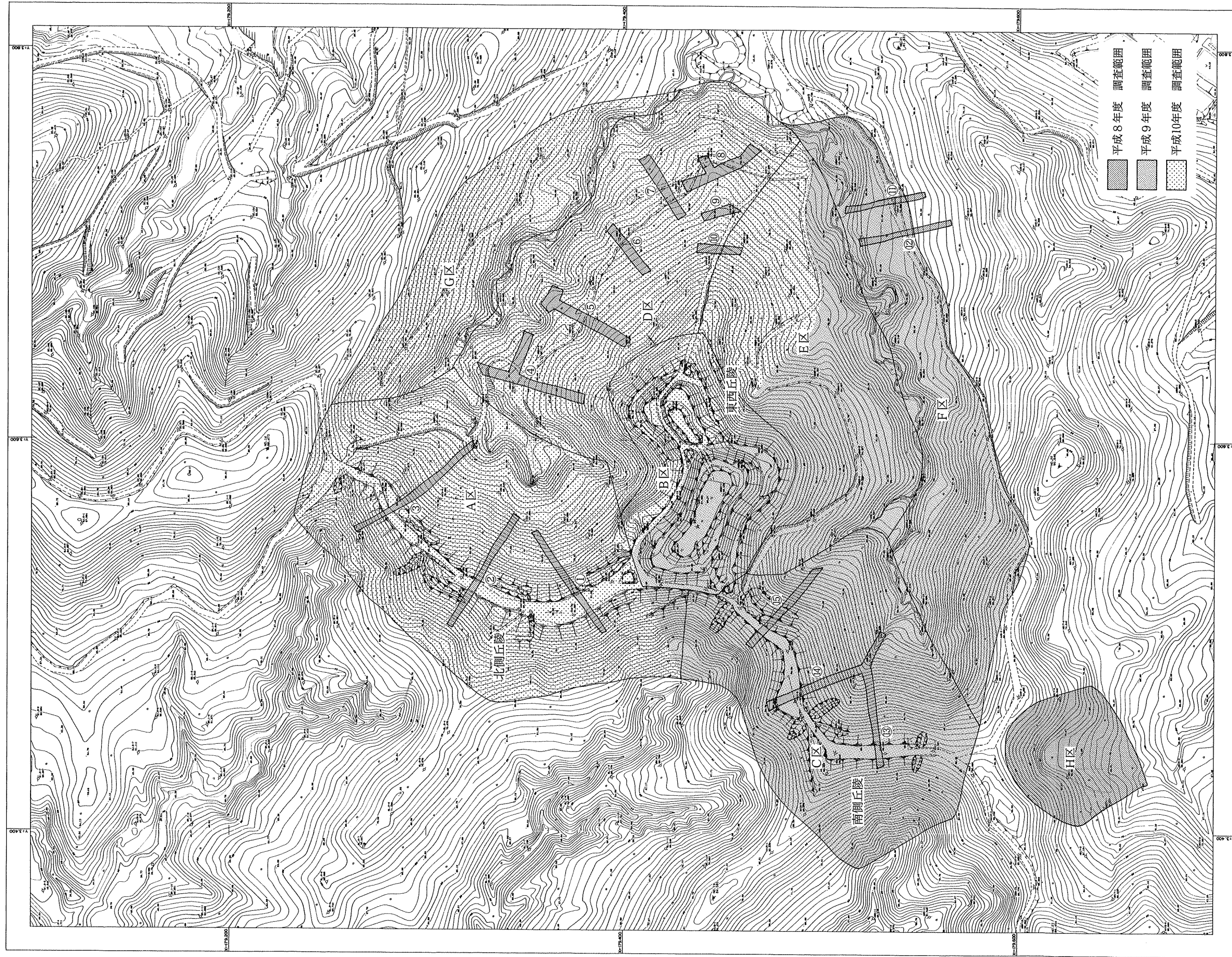
本遺跡は範囲が広いので、便宜上A～Hの調査区を設定した（第2図）。北側丘陵をA区、東西丘陵頂部をB区、南側丘陵をC区、東西丘陵北斜面をD区、東西丘陵南斜面をE区、E区の沢向かいの北斜面をF区、D区の沢向かいの南斜面をG区、南側丘陵南端部をH区とした。各調査区の遺構は、上段平場上の3等水準点（ $X = -179,437.362$ 、 $Y = 3,556.020$ 、 $H = 98.689$ m）を基準にして作成したNo.1杭（ $X = -179,550.000$ 、 $Y = 3,450.000$ ）の平面直角座標によって位置関係を記録した。

調査区・遺構についてはその状況にあわせて縮尺1/20、1/100の平面図・断面図を作成し、併せて35mmの白黒及びカラースライドによる記録写真を撮影した。

第3次調査：第2次調査に継続して平成9年4月14日から、東西丘陵主郭（B区）、南側丘陵（C区）、東西丘陵南斜面（E区）、E区の沢向かいの北斜面（F区）の事前調査を実施した。調査は、サブトレンチを掘り、土層を参考に重機によって調査区の表土や崩落土の除去を行い、その後遺構の精査を行った。検出された遺構は、縮尺1/20、1/50の平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。株式会社オオバによる縮尺1/100の現況測量図も作成した。また、35mmの白黒及びカラースライドによる写真撮影も行った。

調査区については、調査が終了したところから随時引き渡しをしてほしいとの申し出が組合からあり、9月6日の一回目の航空写真撮影の終了後、F区を引き渡した。また、10月1日にはC区南半部を引き渡した。10月16日、11月12日には二回目、三回目の航空写真撮影を行い、10月13日からは測量を開始した。10月18日には地域住民を対象に現地説明会を行った。平成9年度の調査は12月18日に終了した。

第4次調査：第3次調査に継続して平成10年4月14日から開始し、北側丘陵（A区）、東西丘陵副郭（B区）、東西丘陵北斜面（D区）、東西丘陵南斜面（E区）、D区の沢向かいの南斜面（G区）の事前調査を実施した。調査は前回と同様にサブトレンチを随所に掘り、土層を参考に重機で調査区の表土や崩落土の除去を行い、その後遺構の精査を行った。検出された遺構は、縮尺1/20、1/50の平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。また、35mmと6×7の白黒及びカラースライドによる写真撮影、11月10日、25日に航空写真撮影を行った。平成10年度も平成8・9年度と同様に分割引き渡しの申し出が組合側からあったが、発掘調査の安全性と効率性から一括引き渡しを行った。



第2図 熊谷館跡現況と調査区配置図

V. 発見された遺構と遺物

遺跡の位置する丘陵はB区東西丘陵と、その東西丘陵西側の一段下から北へ延びる丘陵A区と南に延びる丘陵C区とに分かれる。切り通し道路による破壊のため不明な部分が随所にみられるが、全体としてT字状の丘陵を利用して遺構を配置した中世の館跡である。B区東西丘陵には、北西から南東方向に延びる長方形の上段平場（主郭平場）、北東から南西方向に延びる下段平場（副郭平場）があり、掘立柱建物跡や柱穴列跡が確認された。上段平場の周囲には幅が1～8mの腰郭が4段あり、南東角や南西角には下の腰郭に通じる幅約1～4mの切り通し状の通路が認められる。下段平場の周囲には数段の腰郭が認められる。周囲の斜面には切岸が認められた。

A区北側丘陵は主郭から北西に延び、中央付近から北東方向に湾曲している。東・西の斜面には堀切が2ヶ所、東側斜面には通路が数ヶ所認められる。中央部平場には柵跡、南部平場には掘立柱建物跡が確認された。C区南側丘陵は、主郭付近から南西方向に延び、中央付近で南に湾曲している。東・西の斜面には橋脚跡や堀切が1ヶ所、土塁状の高まりを伴う堅堀が3ヶ所、東側斜面には腰郭1～3段、中央付近には幅の狭い通路が認められる。また、西側斜面の中央付近には土塁状の高まりをもつ犬走りが1ヶ所認められる。中央平場には掘立柱建物跡や柱穴列跡が確認された（第3図）。

東西丘陵北斜面D区や南斜面E区、E区沢向かいの北斜面F区、D区沢向かいの南斜面G区では多数の土壇跡が確認された。

以下、出土遺構が多いことから調査区ごとに発見された遺構について説明し、土壇跡と焼土遺構、また遺物については後にまとめて説明を加えることとする。

① 東西丘陵頂部（B区）

東西丘陵では頂部にある2つの平場（上段平場・下段平場）と腰郭の遺構確認をし、主郭上段平場、副郭下段平場の柱穴の実測を行った。主郭・副郭は尾根頂部を削平し、周囲の斜面に土を盛り整地地業を行い、平場をつくり出している。

「主郭」

南東方向に長方形をした上段平場とその廻りを巡る腰郭で構成されている。主郭で発見した遺構は腰郭4、通路4、土壇跡1、掘立柱建物跡27、柱穴列跡17である。主郭の上段平場は東西丘陵の頂部を削平してつくられており、約54m×10mの範囲である。

腰郭101（第4図）

B区主郭斜面の西半分周囲を巡り、標高94.0～95.0m付近に位置する。主郭の上段平場から約3.0m下の斜面に巡り、斜面を削りだして平坦面としている。腰郭南東端で通路106に接続している。腰郭101は逆コ字状を呈し、総長107.00m、北側43.20m、西側28.50m、南側35.30m、幅1.40～7.80mである。北西側は幅広く柱穴列跡117～121が並び、また南側には柱穴列跡123が並ぶ。

腰郭102（第4図）

B区主郭の東から南東周囲を巡り、標高87.0～90.0m付近に位置する。斜面を削りだして平坦面と

し、通路106の登り口に接続している。腰郭102は逆L字状を呈し、総長64.60m、東側34.70m、南側29.90m、幅1.50～8.20mである。東側に柱穴列跡122が南北に並び、南東隅は幅広くなっている。

腰郭103 (第4図)

B区主郭南西斜面、標高88.0m付近、腰郭104の北上に位置する。通路103の登り口に接続し、腰郭103の南下に土壇跡110や腰郭104がある。長さ37.00m、幅1.20～6.50mで東西にのび、西端は壊されている。東側は幅が狭く、中央より少し西側でもっとも幅が広がる。斜面を削りだし、さらに中央部から西側は肩の部分を盛り土整地し平坦面を作り出している。整地の範囲は幅0.50～5.30m、長さ24.70m、層厚は最大で42cmで東西に延びる。整地は黄褐色～暗褐色のシルト質砂で、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。

腰郭104 (第14図)

B区主郭南西斜面、標高83.9～85.6m付近、腰郭103の南下に位置する。腰郭103に平行して東西方向にのび、西側は壊されている。残存長22.30m、幅1.50～3.70mで東西方向に延びる。腰郭内は、長さ12.80m、段差30cmの段状になっており、東端・西端では段差がなくなる。斜面を削りだし、さらに中央部肩の部分を盛り土整地し平坦面を作り出している。整地の範囲は長さ13.20m、幅0.70～3.50mで東西に延びる。

通路103 (第4図)

B区主郭南西角、標高90.3～98.0m付近に位置する。主郭上段平場から腰郭101を通り、腰郭103に接続する。総長18.10mで、北東から南西方向に延びる。平場から腰郭101まで8.50m、腰郭101から腰郭103まで9.60m、幅2.80～3.40m、地山を削りだし平坦面としている。

通路104 (第4図)

B区主郭東側、標高90.0～93.0m付近に位置する。副郭南西部から腰郭102の北側に接続し、長さ9.80m、幅1.00mで南北方向にのび、地山を削りだし平坦面としている。

通路105 (第4図)

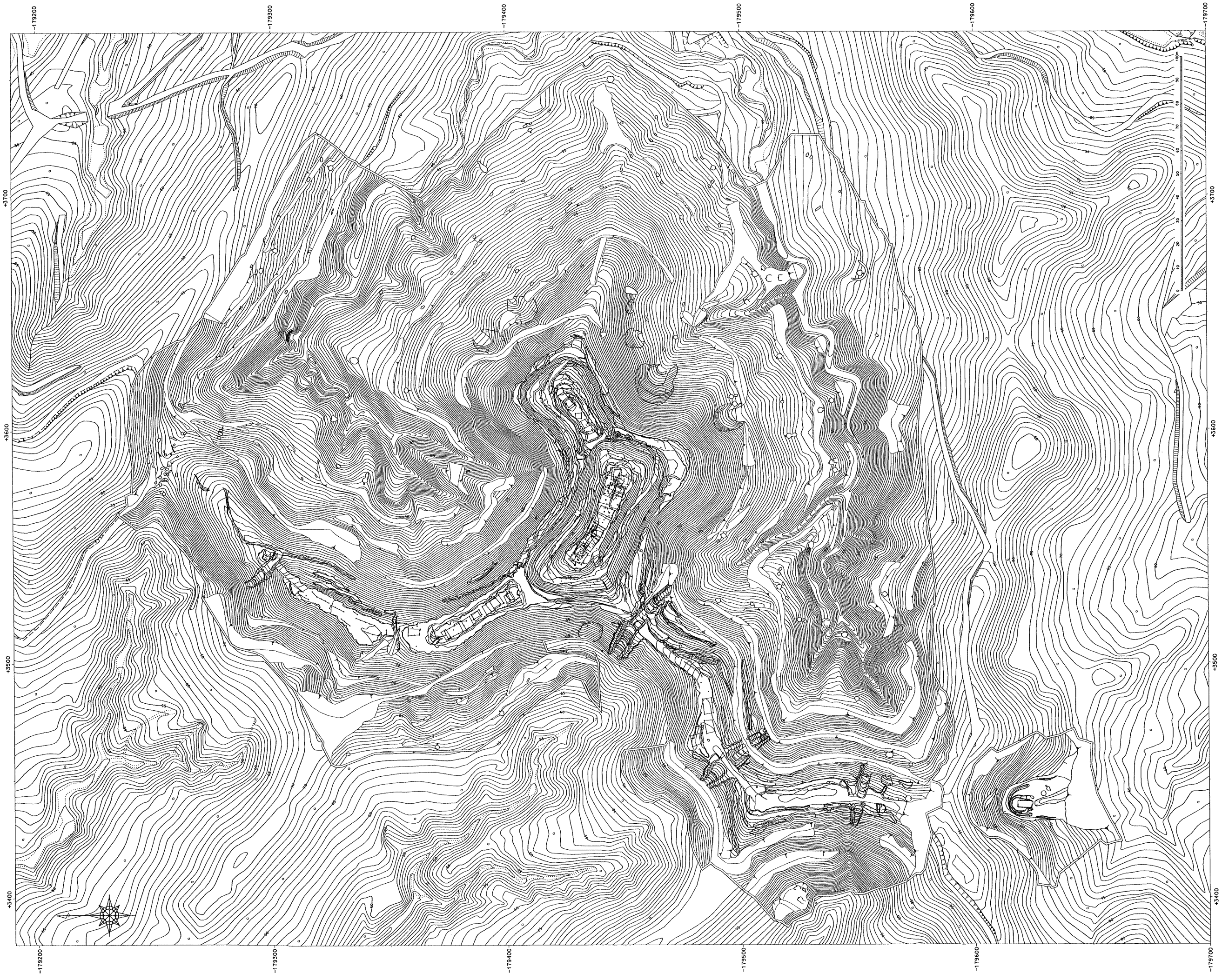
B区主郭西側、標高90.7m付近、腰郭101よりも約4m西下に位置する。北端で長さ30.00m、幅1.00～2.70mで腰郭208から通路103付近に南北方向にのび、北側へ延びると幅が広がる。地山を削りだし平坦面としている。

通路106 (第4図)

B区主郭南東、標高89.5～97.3m付近に位置する。上段平場から南西に17.00mまわりこみながら腰郭101に接続し、東に折り返して23.50mのび腰郭102へ接続する。幅0.80～4.30mで、地山を削りだし平坦面としている。

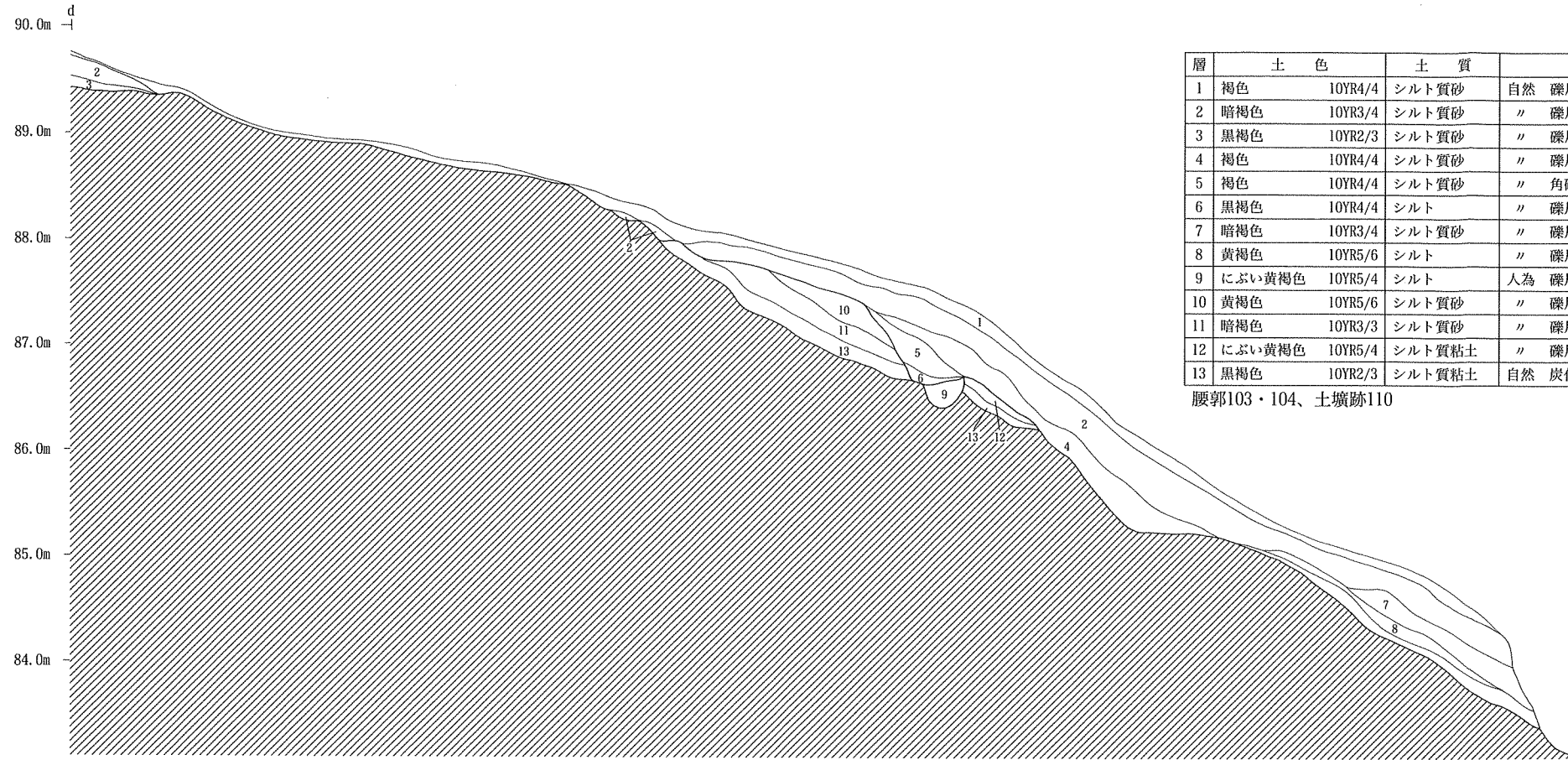
掘立柱建物跡104 (第4図)

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡108、掘立柱建物跡105・106・107、土壇跡101と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で5.66m、柱間寸法は西から1.92m・1.85m・1.90mである。梁行が東妻で3.67m、西妻で3.62mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸27～33cm、短軸23～29cmの隅丸長方形のもの、



第3図 熊谷館跡検出遺構と周辺の地形図 S=1/1,500

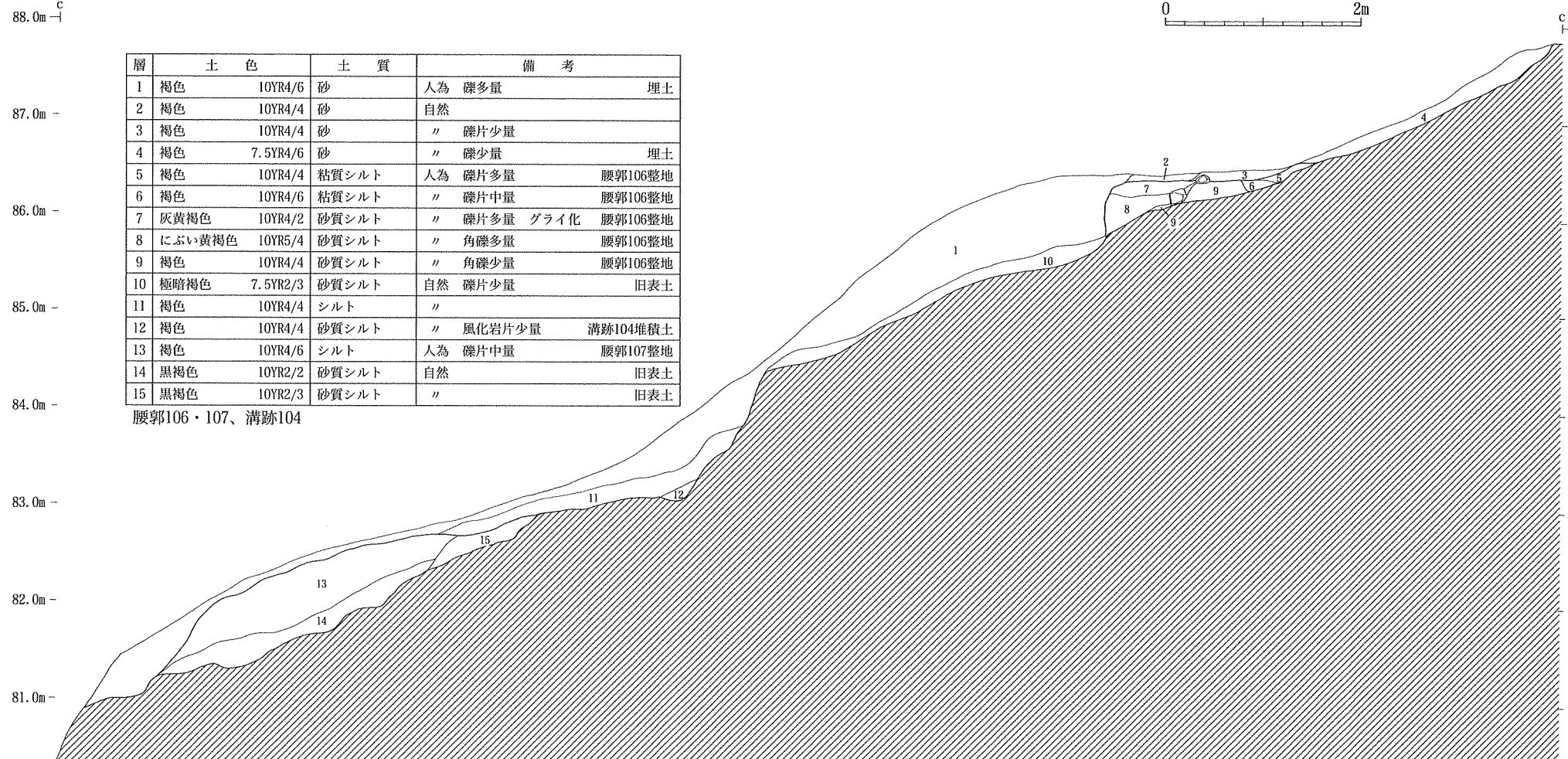
腰郭103・104・土壇跡110



層	土色	土質	備考
1	褐色 10YR4/4	シルト質砂	自然 礫片微量 表土
2	暗褐色 10YR3/4	シルト質砂	〃 礫片少量 崩落土
3	黒褐色 10YR2/3	シルト質砂	〃 礫片少量 崩落土
4	褐色 10YR4/4	シルト質砂	〃 礫片中量 崩落土
5	褐色 10YR4/4	シルト質砂	〃 角礫中量 崩落土
6	黒褐色 10YR4/4	シルト	〃 礫片少量 崩落土
7	暗褐色 10YR3/4	シルト質砂	〃 礫片中量 崩落土
8	黄褐色 10YR5/6	シルト	〃 礫片中量 崩落土
9	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	人為 礫片中量 溝110堆積土
10	黄褐色 10YR5/6	シルト質砂	〃 礫片中量 腰郭103整地
11	暗褐色 10YR3/3	シルト質砂	〃 礫片少量 腰郭103整地
12	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト質粘土	〃 礫片少量 整地
13	黒褐色 10YR2/3	シルト質粘土	自然 炭化物少量 旧表土

腰郭103・104、土壇跡110

腰郭106・107・溝跡104



層	土色	土質	備考
1	褐色 10YR4/6	砂	人為 礫多量 埋土
2	褐色 10YR4/4	砂	自然
3	褐色 10YR4/4	砂	〃 礫片少量
4	褐色 7.5YR4/6	砂	〃 礫少量 埋土
5	褐色 10YR4/4	粘質シルト	人為 礫片多量 腰郭106整地
6	褐色 10YR4/6	粘質シルト	〃 礫片中量 腰郭106整地
7	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	〃 礫片多量 グライ化 腰郭106整地
8	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	〃 角礫多量 腰郭106整地
9	褐色 10YR4/4	砂質シルト	〃 角礫少量 腰郭106整地
10	極暗褐色 7.5YR2/3	砂質シルト	自然 礫片少量 旧表土
11	褐色 10YR4/4	シルト	〃
12	褐色 10YR4/4	砂質シルト	〃 風化岩片少量 溝跡104堆積土
13	褐色 10YR4/6	シルト	人為 礫片中量 腰郭107整地
14	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	自然 旧表土
15	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	〃 旧表土

腰郭106・107、溝跡104

第5図 腰郭103・104・106・107、土壇跡110、溝跡104土層断面図

径25～39cmの不整な円形のもの、径29cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは18～40cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が微量、風化岩片が少量入る明黄褐色～オリーブ黄褐色のシルト質砂である。柱痕跡は7ヶ所で確認され、長径18cm、短径14cmの楕円形のもの、径12～19cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片が微量、風化岩片が中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質砂である。

掘立柱建物跡105（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡116、掘立柱建物跡104・106・107、土壇跡101と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で（4.09m）、柱間寸法は西から（1.83m）・（2.26m）である。梁行が東妻で（3.92m）、西妻で（4.09m）である。柱穴掘り方の平面形は、長径23～39cm、短径10～31cmの楕円形を呈する。柱穴の深さは22～40cmで、堆積土は炭化物が微量、風化岩片が微量～少量入る明黄褐色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径20cm、短径15cmの楕円形のもの、径15～23cmの円形を呈するものがある。堆積土は黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡106（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡116、掘立柱建物跡104・105・107・108・109、土壇跡101と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で（5.41m）である。梁行が東妻で（3.76m）、西妻で（3.95m）である。柱穴掘り方の平面形は、長径27～33cm、短径23～30cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは40cmで、堆積土は凝灰岩片・風化岩片が入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径9～16cmの円形を呈する。堆積土は風化岩片が入る黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡107（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡116、掘立柱建物跡104・105・106・108・109、土壇跡101と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で（4.21m）、柱間寸法は西から（2.17m）・2.05mである。梁行が東妻で3.12m、西妻で（3.32m）である。柱穴掘り方の平面形は、長径38cm、短径32cmの不整な楕円形のもの、長径22～32cm、短径19～26cmの楕円形のもの、径21～26cmのほぼ円形を呈するものがある。柱穴の深さは16～34cmで、堆積土は炭化物・風化岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、長径21cm、短径18cmの楕円形のもの、径11～14cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡108（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡110・111、掘立柱建物跡106・107・109・110・111・129と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で（6.03m）、柱間寸法は西から（1.87m）・（2.40m）・1.77mである。梁行が東妻で3.90m、西妻で（3.82m）である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22～28cm、短軸19～25cmの隅丸長方形のもの、長径30cm、短径21cmの不整な楕円形のもの、長径20～22cm、短径16～20cmの

楕円形のもの、径28cmのほぼ円形のもの、径19cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは32～55cmで、堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片・風化岩片が少量入る黄褐色～暗褐色の砂～シルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径14～16cm、短径11～14cmの楕円形のもの、径14cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が中量、凝灰岩片少量、風化岩片が入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡109（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡109・110・111・116、掘立柱建物跡106・107・108・110・111・129と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で5.80m、柱間寸法は西から2.01m・1.90m・1.90mである。梁行が東妻で(3.87m)、西妻で3.69mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸39cm、短軸37cmの隅丸長方形のもの、長径30～43cm、短径27～32cmの楕円形のもの、径24～32cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは33～67cmで、堆積土は炭化物が微量、風化岩片が少量～多量、凝灰岩片が少量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は6ヶ所で確認され、径12～20cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が微量から少量、凝灰岩片少量、風化岩片が中量入る黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡110（第4図）

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。柱穴列跡111、掘立柱建物跡108・109・111・129と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(5.02m)、柱間寸法は北から(2.39m)・2.64mである。梁行が北妻で(2.98m)、南妻で(2.90m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺23cmの隅丸長方形のもの、長径30～35cm、短径22～27cmの楕円形のもの、径25～26cmのほぼ円形を呈するものがある。柱穴の深さは18～26cmで、堆積土は炭化物が微量、風化岩片が入る黄褐色～褐色の砂～シルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径9～13cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が少量入る褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡111（第4図）

B区の主郭上段平場中央西よりに位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡129と重複するが、これより新しく、掘立柱建物跡108・109・110・112・113・114・130と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(4.03m)である。梁行が北妻で(3.34m)、南妻で(3.58m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸27cm、短軸18cmの隅丸長方形のもの、長径40cm、短径35cmの不整な楕円形のもの、長径22～30cm、短径19～23cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは22cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が少量入る褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡112（第4図）

B区の主郭上段平場中央西よりに位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡111・113・114・129・130と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が西側柱列で(4.38m)、柱間寸法は北から(2.25m)・2.13mである。梁行が北妻で(3.45m)、南妻

で3.46mである。柱穴掘り方の平面形は、一辺32cmの隅丸方形のもの、長径24～27cm、短径20～24cmの不整な楕円形のもの、径25～34cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは32～34cmで、堆積土は凝灰岩片が少量～中量、風化岩片が入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径12～17cmの円形を呈する。堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡113（第4図）

B区の主郭上段平場中央西よりに位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行2間の南北棟である。掘立柱建物跡111・112・114・115・129・130と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で5.26mである。梁行が南妻で(4.21m)、柱間寸法は西から(1.85m)・(2.37m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸21～28cm、短軸19～23cmの隅丸長方形のもの、長径43cm、短径32cmの不整な楕円形のもの、径17～18cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは15～68cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量～少量、風化岩片が中量入る黄褐色～暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径22cm、短径19cmの楕円形のもの、径10～13cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量、風化岩片が少量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質砂である。

掘立柱建物跡114（第4図）

B区の主郭上段平場中央北側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡109・112、掘立柱建物跡111・112・113・115・129・130と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(4.67m)、柱間寸法は西から(2.33m)・(2.34m)である。梁行が東妻で(3.23m)、西妻で(2.99m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸30cm、短軸22cmの隅丸長方形のもの、一辺16cmの隅丸方形のもの、長径18～30cm、短径16～25cmの楕円形のもの、径21cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が少量～中量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

掘立柱建物跡115（第4図）

B区の主郭上段平場中央に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行2間の南北棟である。掘立柱建物跡113・114と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(6.27m)、柱間寸法は北から(2.06m)・2.10m・2.13mである。梁行が北妻で(4.12m)、柱間寸法は西から(1.77m)・(2.36m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸32cm、短軸22～27cmの隅丸長方形のもの、長径21～34cm、短径20～29cmの楕円形のもの、径34～35cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは22～52cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量、風化岩片が入るにぶい黄褐色～褐色の砂～シルト質土である。柱痕跡は6ヶ所で確認され、長径20cm、短径14cmの楕円形のもの、径13～16cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量、風化岩片が入る黄褐色～褐色の砂～シルト質土である。

掘立柱建物跡116（第4図）

B区の主郭上段平場中央に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の南北棟である。建物総長は、桁行が西側柱列で(6.33m)、柱間寸法は北から(2.10m)・(2.04m)・(2.21m)である。

梁行が北妻で(3.02m)、南妻で(3.80m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸25~32cm、短軸21~24cmの隅丸長方形のもの、長径25~32cm、短径22~30cmの楕円形のもの、径22cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは23~50cmで、堆積土は凝灰岩片が少量~中量、凝灰岩ブロック・風化岩片が多量入るにぶい黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径9~15cmの円形を呈する。堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡117 (第4図)

B区の主郭上段平場東側北よりに位置し、地山面で確認された。桁行6間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡114、掘立柱建物跡119・120・121・124・125・127・128と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で12.34m、柱間寸法は西から2.13m・1.97m・2.11m・1.97m・2.06m・2.09mである。梁行が東妻で(3.97m)、西妻で4.29mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸28~35cm、短軸23~29cmの隅丸長方形のもの、一辺25~31cmの隅丸方形のもの、長径26~33cm、短径22~27cmの不整な楕円形のもの、長径32~35cm、短径29cmの楕円形のもの、径15cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは19~46cmで、堆積土は炭化物が微量~多量、凝灰岩片が微量~中量、風化岩片が少量~多量入る明黄褐色~黄褐色の砂~シルト質土である。柱痕跡は13ヶ所で確認され、長軸13~19cm、短軸11~15cmの隅丸長方形のもの、長径15~17cm、短径11~14cmの楕円形のもの、径10~15cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量~多量、凝灰岩片が少量、風化岩片が入る明黄褐色~暗褐色の砂~シルト質土である。

掘立柱建物跡118 (第4図)

B区の主郭上段平場東側南よりに位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡120・121・122と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(6.79m)、柱間寸法は西から(2.16m)・(2.23m)・2.40mである。梁行が東妻で3.91m、西妻で(3.74m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸25~35cm、短軸21~34cmの隅丸長方形のもの、長径23cm、短径20cmの不整な楕円形のもの、長径30~32cm、短径21~27cmの楕円形のもの、径35cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは34~45cmで、堆積土は炭化物が微量~少量、凝灰岩片が少量~中量入る明黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、長径16~20cm、短径12~17cmの楕円形のもの、径9~11cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~暗褐色の砂~シルト質土である。

掘立柱建物跡119 (第4図)

B区の主郭上段平場東側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。柱穴列跡114、掘立柱建物跡117・120・121・122と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(4.15m)である。梁行が北妻で(3.34m)、南妻で(3.48m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸28~32cm、短軸23~30cmの隅丸長方形のもの、径21cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは28cmで、堆積土は炭化物や風化岩片が入る明黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、長径14cm、短径11cmの楕円形を呈する。堆積土は黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡120 (第4図)

B区の主郭上段平場東側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡117・118・119・121・122・123・124と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で(5.73m)である。梁行が東妻で(2.84m)、西妻で(2.75m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径21~40cm、短径19~31cmの楕円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。

掘立柱建物跡121 (第4図)

B区の主郭上段平場東側に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡122と重複するが、これより新しく、柱穴列跡114、掘立柱建物跡117・118・119・120・123・124・125と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が西側柱列で5.94m、柱間寸法は北から2.07m・(1.76m)・(2.15m)である。梁行が北妻で(4.06m)、南妻で(4.16m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸18~30cm、短軸15~22cmの隅丸長方形のもの、一辺26cmの隅丸方形のもの、長径30~38cm、短径28~35cmの不整な楕円形のもの、長径34cm、短径26cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは24~35cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径14cm、短径10cmの楕円形のもの、径10cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色~にぶい黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡122 (第4図)

B区の主郭上段平場南東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡121と重複するが、これより古く、掘立柱建物跡123と重複するが、これより新しい。また掘立柱建物跡118・119・120・124・125と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で3.98m、柱間寸法は西から1.89m・2.09mである。梁行が東妻で4.20m、西妻で3.98mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸23~29cm、短軸20~25cmの隅丸長方形のもの、一辺26cmの隅丸方形のもの、長径23~31cm、短径19~26cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは19~23cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が微量~少量入る黄褐色~褐色のシルト質砂である。柱痕跡は5ヶ所で確認され、長軸16cm、短軸14cmの隅丸長方形のもの、長径14~15cm、短径11~13cmの楕円形のもの、径12cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量~少量、凝灰岩片が少量入る黄褐色~暗褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡123 (第4図)

B区の主郭上段平場南東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡122と重複するが、これより古く、掘立柱建物跡120・121・124・125と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(4.00m)、柱間寸法は北から1.95m・(2.05m)である。梁行が北妻で(2.65m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径27cm、短径23cmの不整な楕円形のもの、長径20~30cm、短径18~28cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは20~40cmで、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が少量、地山ブロックが多量入る黄褐色~にぶい黄褐色のシルト質砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、一辺14cmの隅丸方形のもの、長径18cm、短径15cmの楕円形のもの、径10cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量、地山粒が入るにぶい黄褐色~褐色の

シルト質土である。

掘立柱建物跡124 (第4図)

B区の主郭上段平場南東側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡117・120・121・122・123・125・126・127・128と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で3.98mである。梁行が北妻で(3.58m)、南妻で3.62mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸32cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、長径37cm、短径27cmの楕円形のもの、径19～27cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは23～32cmで、堆積土は凝灰岩片が少量、風化岩片が微量入る明黄褐色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径15～17cm、短径11～14cmの楕円形を呈する。堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡125 (第4図)

B区の主郭上段平場南東側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行2間の南北棟である。掘立柱建物跡117・121・122・123・124・126・127・128と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(5.77m)である。梁行が南妻で(4.53m)、柱間寸法は西から(2.25m)・(2.30m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径23～34cm、短径17～29cmの楕円形のもの、径23～27cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは22～32cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径7～16cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が少量～中量、凝灰岩片が少量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡126 (第4図)

B区の主郭上段平場南東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡124・125・127・128と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(4.45m)、柱間寸法は北から2.19m・(2.26m)である。梁行が北妻で(3.44m)、南妻で(3.56m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸38cm、短軸27cmの隅丸長方形のもの、一辺21～22cmの不整な方形のもの、長径28～43cm、短径23～40cmの不整な楕円形のもの、長径28～39cm、短径22～29cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは15～43cmで、堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片が少量～中量入る明黄褐色～にぶい黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径21cm、短径16cmの楕円形のもの、径12～13cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡127 (第4図)

B区の主郭上段平場北東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡117・124・125・126・128と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(5.20m)、柱間寸法は西から(2.49m)・(2.71m)である。梁行が東妻で(3.42m)、西妻で(3.36m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径22cm、短径20cmの不整な楕円形のもの、長径20～21cm、短径16～18cmの楕円形のもの、径21cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは17cmで、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が微量～少量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径10cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る褐色のシルト質砂である。

掘立柱建物跡128 (第4図)

B区の主郭上段平場東端に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡117・124・125・126・127と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(4.26m)で、柱間寸法は西から(2.09m)・2.20mである。梁行が東妻で(3.09m)、西妻で(3.24m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸26cm、短軸23cmの隅丸長方形のもの、長径21~38cm、短径18~34cmの楕円形のもの、径23cmの不整な円形を呈するものがある。柱穴の深さは27~39cmで、堆積土は炭化物微量~少量、凝灰岩片が少量入る黄褐色~暗褐色のシルト質砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径9~15cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が微量~多量、凝灰岩片が少量入る黄褐色~暗褐色のシルト質砂である。

掘立柱建物跡129 (第4図)

B区の主郭上段平場中央西よりに位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡111と重複するが、これより古く、掘立柱建物跡108・109・110・112・113・114・130と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(2.57m)、梁行が東妻で(1.88m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸28cm、短軸16cmの隅丸長方形のもの、長径23~24cm、短径19~20cmの楕円形を呈するものがある。堆積土は風化岩片が入る黄褐色のシルト質砂である。柱痕跡は確認されなかった。

掘立柱建物跡130 (第4図)

B区の主郭上段平場中央に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。柱穴列跡109と重複するが、これより古く、掘立柱建物跡111・112・113・114・129と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で(1.97m)、梁行が北妻で(1.59m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径21~27cm、短径18~24cmの楕円形を呈する。柱穴の深さは36cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量、風化岩片が多量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量入る黄褐色のシルト質砂である。

柱穴列跡107 (第4図)

B区の主郭上段平場西端に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は(3.38m)、柱間寸法は北から(1.65m)・(1.70m)である。柱穴掘り方の平面形は長軸30cm、短軸24cmの隅丸長方形のもの、一辺23cmの隅丸方形のもの、径23cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは22~30cmで、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が入る黄褐色~オリブ褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡108 (第4図)

B区の主郭上段平場北西側に位置し、地山面で確認された。L字形に曲がる東西に長い柱穴列跡で、東西に3間、南北に3間の規模である。掘立柱建物跡104と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(5.63m)、柱間寸法は西から(1.83m)・(2.00m)・(1.81m)である。南北の柱穴列の総長は(5.50m)、柱間寸法は北から(2.08m)・(1.74m)・(1.64m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径20~38cm、短径15~26cmの楕円形のもの、径21~25cmの円形を呈するものがある。柱穴の

深さは14～36cmで、堆積土は炭化物が微量、風化岩片が微量～少量入る明黄褐色～暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡109（第4図）

B区の主郭上段平場西側北端に位置し、地山面で確認された。折れ線状で鈍角に曲がる東西に長い柱穴列跡で、7間の規模である。掘立柱建物跡130と重複し、これより新しく、掘立柱建物跡109・114と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は（13.04m）、柱間寸法は西から（2.18m）・（2.05m）・（2.00m）・（1.55m）・（2.01m）・（1.90m）・（1.36m）である。柱穴掘り方の平面形は、長径30cm、短径28cmの不整な楕円形のもの、長径21～33cm、短径19～28cmの楕円形のもの、径21cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは36～40cmで、堆積土は炭化物が微量～中量、凝灰岩片が少量、風化岩片が微量～多量入る黄褐色～暗褐色のシルト質砂である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、長径13～15cm、短径10～13cmの楕円形のもの、径13cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量～多量、風化岩片が入る褐色～黒褐色のシルト質土である。

柱穴列跡110（第4図）

B区の主郭上段平場西側中央に位置し、柱穴列跡111と並行する。地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。掘立柱建物跡108・109と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は（2.87m）である。柱穴掘り方の平面形は、径15～18cmの円形を呈する。柱穴の深さは28cmで、堆積土は風化岩片が中量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は風化岩片が入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡111（第4図）

B区の主郭上段平場西側中央に位置し、柱穴列跡110と並行する。地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。掘立柱建物跡108・109・110と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は（3.03m）である。柱穴掘り方の平面形は、径20～28cmの円形を呈する。堆積土は風化岩片が入る明黄褐色のシルト質砂である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡112（第4図）

B区の主郭上段平場中央北端から東側北端にかけて位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、5間の規模である。掘立柱建物跡114と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は（18.27m）、柱間寸法は西から（4.00m）・（3.60m）・（3.46m）・（3.61m）・（3.63m）である。柱穴掘り方の平面形は、長軸29cm、短軸23cmの隅丸長方形のもの、一辺19cmの隅丸方形のもの、長径25～42cm、短径18～33cmの楕円形のもの、径20～27cmの円形を呈するものがある。堆積土は風化岩片が多量入る黄褐色のシルト質砂である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、長径18cm、短径16cmの楕円形を呈する。

柱穴列跡113（第4図）

B区の主郭上段平場中央南端に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、4間の規模である。東西の柱穴列の総長は7.63m、柱間寸法は西から2.05m・（2.12m）・（2.25m）・1.23mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸25～32cm、短軸25～26cmの隅丸長方形のもの、一辺25cmの隅丸方

形のもの、長径25～27cm、短径22cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは30～48cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質砂である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、長径14～19cm、短径10～14cmの楕円形のもの、径14cmの円形を呈するものがある。堆積土は凝灰岩片が微量～少量入るにぶい黄褐色～暗褐色のシルト質土である。

柱穴列跡114 (第4図)

B区の主郭上段平場北東側に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。掘立柱建物跡119・121と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(4.03m)、柱間寸法は西から(1.81m)・(2.22m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸47cm、短軸34cmの隅丸長方形、長径47cm、短径42cmの不整な楕円形のもの、長径30cm、短径25cmの楕円形を呈するものがある。堆積土は明黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡115 (第4図)

B区の主郭上段平場東端に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は(3.40m)、柱間寸法は北から(1.85m)・(1.58m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径17～29cm、短径15～22cmの楕円形のもの、径20cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡116 (第4図)

B区の主郭北西側に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。掘立柱建物跡105・106・107・109と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(4.53m)、柱間寸法は西から(2.25m)・2.28mである。柱穴掘り方の平面形は、長径29～36cm、短径22～33cmの楕円形を呈する。柱穴の深さは12～33cmで、堆積土は風化岩片・地山粒が入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、長径12cm、短径9cmの楕円形のもの、径12cmの円形を呈するものがある。堆積土は風化岩片が中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡117 (第4図)

B区の主郭西側2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。折れ線状で鈍角に曲がる東西に長い柱穴列跡で、4間の規模である。柱穴列跡118と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(7.97m)、柱間寸法は西から(2.01m)・(2.20m)・(1.80m)・(1.98m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸19～24cm、短軸14～19cmの隅丸長方形のもの、一辺17～22cmの隅丸方形のもの、長径17cm、短径13cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは22～26cmで、堆積土は地山岩片が中量、地山ブロックが少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡118 (第4図)

B区の主郭西側2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。柱穴列跡117と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(4.69m)、柱間寸法は西から(2.40m)・(2.29m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸28cm、短軸25cmの隅丸長方形のもの、一辺18～22cmの隅丸方形を呈するものがある。柱穴の深さは9～35cmで、堆積土は炭化

物が中量、地山ブロックが少量～中量入る黄褐色～にぶい黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡119 (第4図)

B区の主郭西側2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。折れ線状で地形に沿って曲がる東西に長い柱穴列跡で、東西に8間、南北に5間の規模である。東西の柱穴列の総長は(17.44m)、柱間寸法は西から(2.29m)・(2.20m)・(2.41m)・(1.41m)・(2.33m)・(2.34m)・(2.33m)・2.17mである。南北の柱穴列の総長は(9.03m)、柱間寸法は北から2.27m・1.89m・1.72m・1.74m・(1.44m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22～33cm、短軸18～28cmの隅丸長方形のもの、一辺22～34cmの隅丸方形のもの、長径17～26cm、短径16～24cmの不整な楕円形のもの、長径25～35cm、短径22～27cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは23～51cmで、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片・地山ブロックが中量～多量入る明黄褐色～暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は8ヶ所で確認され、一辺20cmの不整な方形のもの、長径12cm、短径10cmの楕円形のもの、径10～15cmの円形を呈するものがある。堆積土は炭化物・風化岩片・地山ブロックが少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡120 (第4図)

B区の主郭西側2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。東西の柱穴列の総長は(5.54m)、柱間寸法は西から(3.00m)・(2.54m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸26～30cm、短軸19～24cmの隅丸長方形のもの、長径39cm、短径24cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは32～40cmで、堆積土は炭化物が少量、風化岩片が入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡121 (第4図)

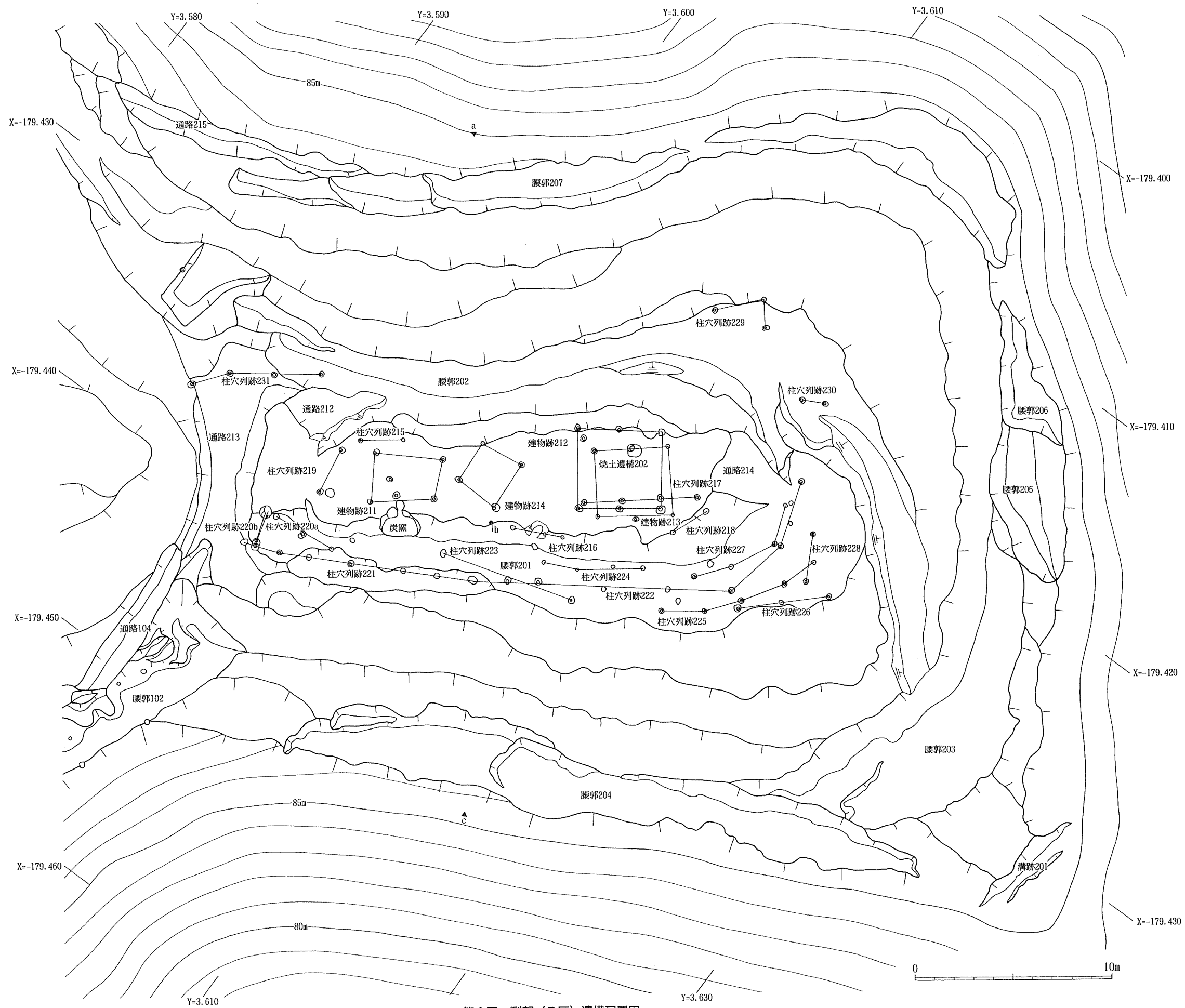
B区の主郭西側2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。東西の柱穴列の総長は(3.95m)、柱間寸法は西から(1.32m)・(1.30m)・(1.33m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22～31cm、短軸17～24cmの隅丸長方形を呈する。柱穴の深さは44cmで、堆積土は凝灰岩片・風化岩片が多量、地山ブロックが少量入る明褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、長径10cm、短径8cmの楕円形を呈する。

柱穴列跡122 (第4図)

B区の主郭東側腰郭102に位置し、地山面で確認された。折れ線状で南北に長い柱穴列跡で、6間の規模である。南北の柱穴列の総長は(19.59m)、柱間寸法は北から(3.78m)・(3.66m)・(2.82m)・(3.35m)・(3.10m)・(2.88m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、一辺26cmの隅丸方形のもの、長径20～30cm、短径17～24cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは13～23cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が微量～少量入る黄褐色～暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径13cmの円形を呈する。堆積土は黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡123 (第4図)

B区の主郭中央南2段目腰郭101に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。東西の柱穴列の総長は(6.93m)、柱間寸法は西から(2.08m)・(2.29m)・(2.56m)で



第6図 副郭(B区)遺構配置図

ある。柱穴掘り方の平面形は、長軸29cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、一辺21～27cmの隅丸方形のもの、長径24cm、短径20cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは33～44cmで、堆積土は炭化物が微量、風化岩片が少量～中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、長径15cm、短径11cmの楕円形を呈する。堆積土は風化岩片が中量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

「副郭」

主郭の上段平場東北隅から北東にのび、上段平場よりも約4.0m標高の低いところに副郭の下段平場が位置する。副郭で発見した遺構は腰郭7、通路6、溝跡1、土壙跡1、焼土遺構1、掘立柱建物跡4、柱穴列跡18である。副郭の下段平場は東西丘陵の東部分の頂部を削平してつくられており、約27m×8mの範囲である。

腰郭201（第6図）

B区副郭下段平場の南東側長辺に沿って、下段平場より約1.0m下、標高92.5～93.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅2.50～6.00m、長さ38.40mである。通路214の曲がり角に接続する。

腰郭202（第6図）

B区副郭下段平場の北西側長辺に沿って、下段平場より約2.0～2.5m下、標高91.0～92.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅0.50～5.00m、長さ41.80mでくの字状を呈し、通路214に接続する。東端は攪乱によって壊されている。

腰郭203（第6図）

B区副郭東隅、腰郭201の5.0m下、腰郭204北東端から腰郭205南東端の間で標高87.5m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅1.80～4.60m、長さ23.50mで弧状を呈する。

腰郭204（第6図）

B区副郭南東斜面、腰郭203の南端から南西にかけて標高86.5m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅1.10～2.90m、長さ32.60mである。

腰郭205（第6図）

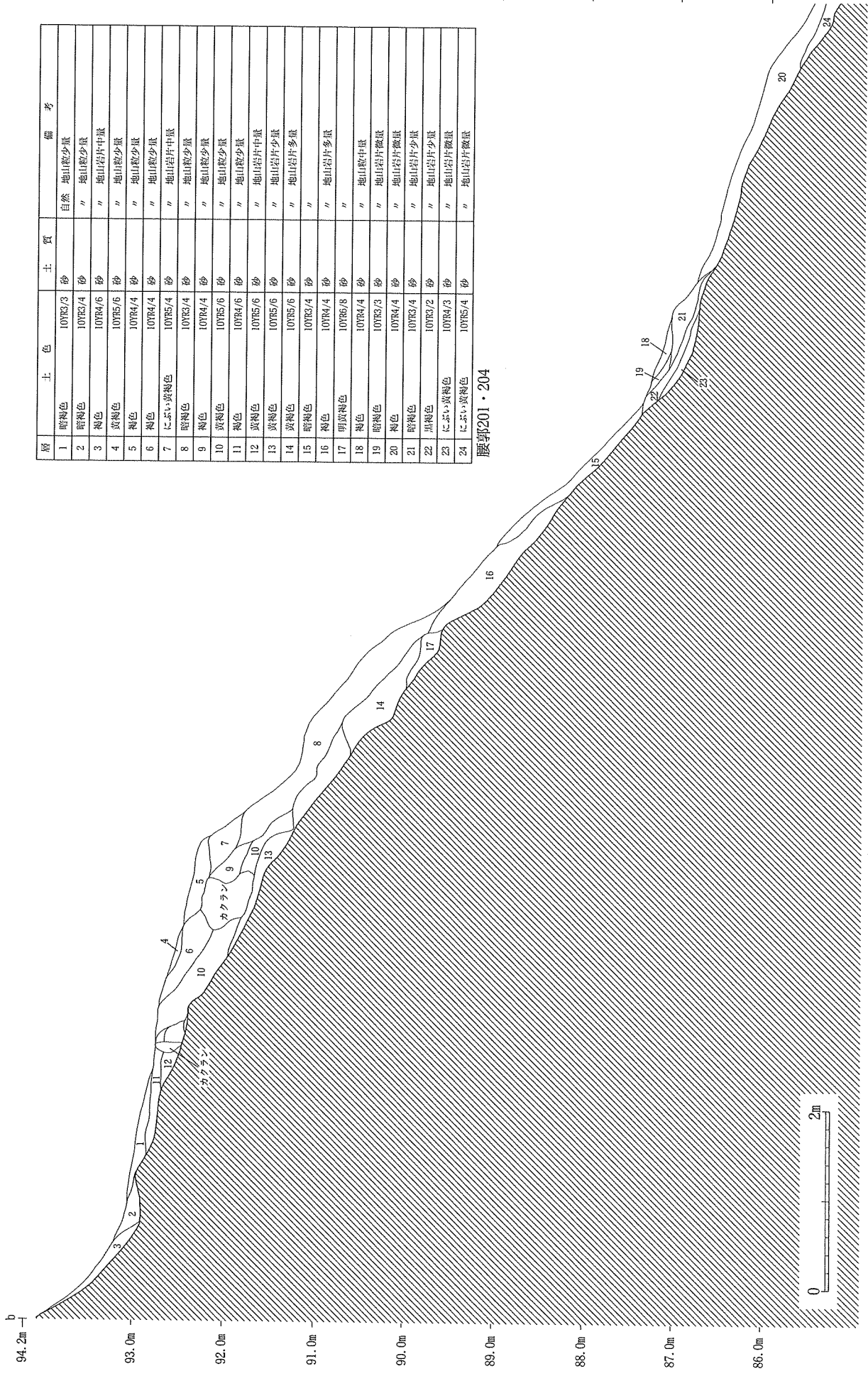
B区副郭北東斜面、腰郭206南東端から腰郭203北西端の間で標高86.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅0.60～1.60m、長さ7.70mである。

腰郭206（第6図）

B区副郭北東斜面、腰郭205の北西端からさらに北西にかけて標高85.5～86.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅0.60～2.20m、長さ7.10mである。

腰郭207（第6図）

B区副郭北西斜面、腰郭202より5.0～6.0m下に並行して北東から南西に延びる。標高86.0m付近に位置し、北東端で腰郭206に、南西端で通路215に接続し、地山を削りだし平坦面としている。幅0.50～2.40m、長さ41.00mである。



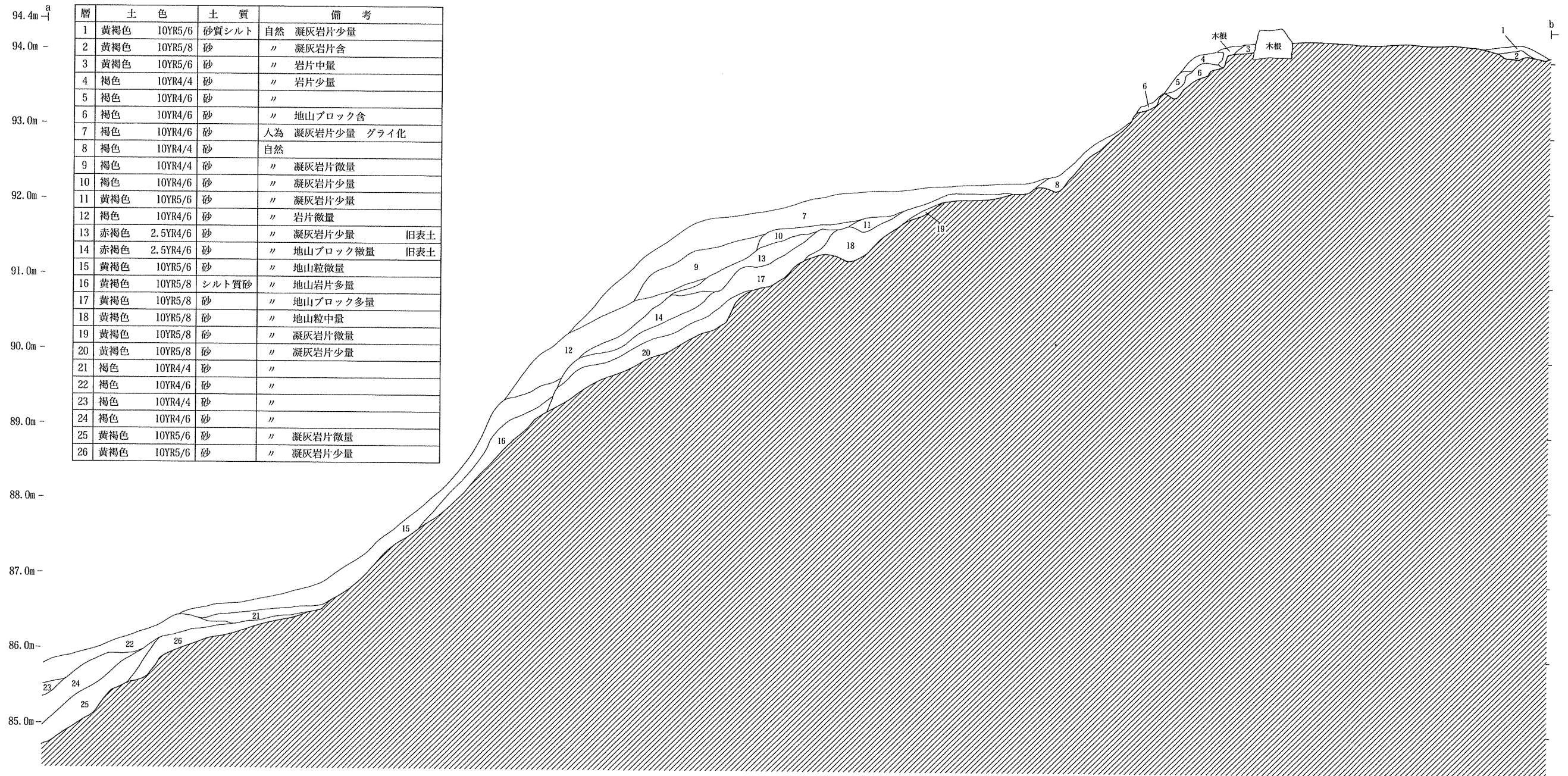
層	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3 砂	自然 地山礫少量
2	暗褐色	10YR3/4 砂	" 地山礫少量
3	褐色	10YR4/6 砂	" 地山岩片中量
4	黄褐色	10YR5/6 砂	" 地山礫少量
5	褐色	10YR4/4 砂	" 地山礫少量
6	褐色	10YR4/4 砂	" 地山礫少量
7	にぶい黄褐色	10YR5/4 砂	" 地山岩片中量
8	暗褐色	10YR3/4 砂	" 地山礫少量
9	褐色	10YR4/4 砂	" 地山礫少量
10	黄褐色	10YR5/6 砂	" 地山礫少量
11	褐色	10YR4/6 砂	" 地山礫少量
12	黄褐色	10YR5/6 砂	" 地山岩片中量
13	黄褐色	10YR5/6 砂	" 地山岩片少量
14	黄褐色	10YR5/6 砂	" 地山岩片多量
15	暗褐色	10YR3/4 砂	" 地山岩片多量
16	褐色	10YR4/4 砂	" 地山岩片多量
17	明黄褐色	10YR6/8 砂	" 地山岩片多量
18	褐色	10YR4/4 砂	" 地山礫中量
19	暗褐色	10YR3/3 砂	" 地山岩片微量
20	褐色	10YR4/4 砂	" 地山岩片微量
21	暗褐色	10YR3/4 砂	" 地山岩片少量
22	黒褐色	10YR3/2 砂	" 地山岩片少量
23	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂	" 地山岩片微量
24	にぶい黄褐色	10YR5/4 砂	" 地山岩片微量

腰郭201・204

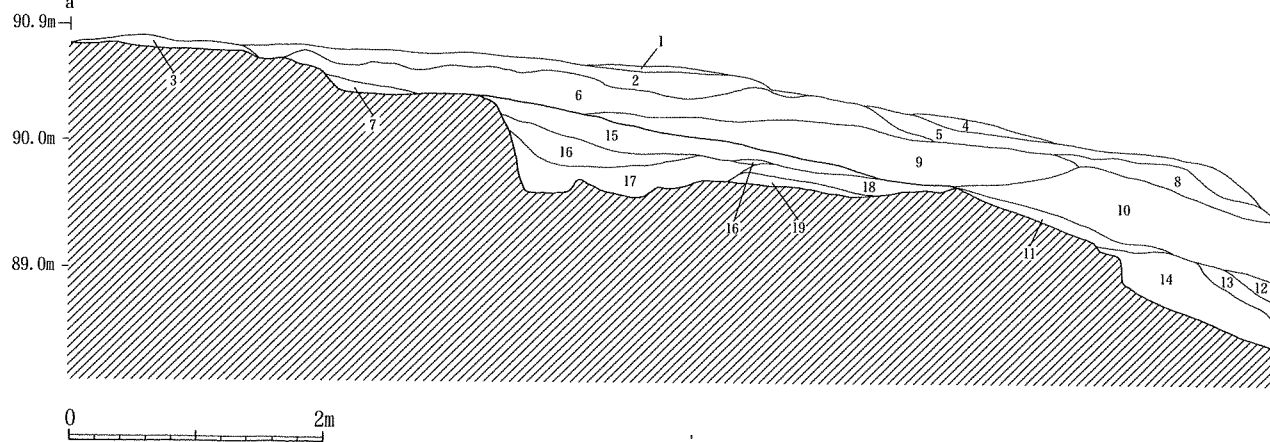
第7図 腰郭201・204土層断面図

腰郭202・207

層	土色	土質	備考
1	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	自然 凝灰岩片少量
2	黄褐色 10YR5/8	砂	凝灰岩片含
3	黄褐色 10YR5/6	砂	岩片中量
4	褐色 10YR4/4	砂	岩片少量
5	褐色 10YR4/6	砂	岩片少量
6	褐色 10YR4/6	砂	地山ブロック含
7	褐色 10YR4/6	砂	人為 凝灰岩片少量 グライ化
8	褐色 10YR4/4	砂	自然
9	褐色 10YR4/4	砂	凝灰岩片微量
10	褐色 10YR4/6	砂	凝灰岩片少量
11	黄褐色 10YR5/6	砂	凝灰岩片少量
12	褐色 10YR4/6	砂	岩片微量
13	赤褐色 2.5YR4/6	砂	凝灰岩片少量 旧表土
14	赤褐色 2.5YR4/6	砂	地山ブロック微量 旧表土
15	黄褐色 10YR5/6	砂	地山粒微量
16	黄褐色 10YR5/8	シルト質砂	地山岩片多量
17	黄褐色 10YR5/8	砂	地山ブロック多量
18	黄褐色 10YR5/8	砂	地山粒中量
19	黄褐色 10YR5/8	砂	凝灰岩片微量
20	黄褐色 10YR5/8	砂	凝灰岩片少量
21	褐色 10YR4/4	砂	岩片微量
22	褐色 10YR4/6	砂	岩片微量
23	褐色 10YR4/4	砂	岩片微量
24	褐色 10YR4/6	砂	岩片微量
25	黄褐色 10YR5/6	砂	凝灰岩片微量
26	黄褐色 10YR5/6	砂	凝灰岩片少量



腰郭208・105



層	土色	土質	備考
1	褐色 10YR4/4	弱砂質	自然 凝灰岩片中量
2	暗褐色 10YR3/3	弱砂質	凝灰岩片少量 下部グライ化
3	明黄褐色 10YR6/8	弱砂質	凝灰岩片少量
4	褐色 10YR4/6	弱砂質	風化岩片中量
5	黒褐色 10YR2/3	弱砂質	風化岩片少量
6	黄褐色 10YR5/6	砂質	風化岩片少量
7	黄褐色 10YR5/6	砂質	風化岩片微量
8	黄褐色 10YR5/6	砂質	風化岩片微量
9	褐色 10YR4/4	砂質	炭化物少量 風化岩片均質に中量
10	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質	風化岩片少量
11	褐色 10YR4/4	砂質	岩含
12	黄褐色 10YR5/6	砂質	風化岩片少量
13	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質	炭化物・風化岩片少量
14	褐色 10YR4/4	砂質	岩含
15	暗褐色 10YR3/4	砂質	炭化物・風化岩片少量
16	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質	風化岩片中量
17	黄褐色 10YR5/6	砂質	風化岩片微量
18	褐色 10YR4/6	砂質	風化岩片少量
19	褐色 10YR4/4	砂質	岩含

腰郭208、通路105

第8図 腰郭202・207・208、通路105土層断面図

通路210 (第4図)

B区主郭北斜面、A区腰郭208の南東端から主郭北斜面を通り、副郭北西端に接続する。標高88.5～90.5m付近に位置し、腰郭101よりも4.0～6.0m下を腰郭101に並行してのび、地山を削りだし平坦面としている。また通路210のすぐ1.0m下には通路211が並行して延びる。幅1.00～3.20m、長さ58.30mで、断面形はL字状を呈する。

通路211 (第4図)

B区主郭北斜面、通路210から分岐し主郭北斜面を通り再び通路210に接続する。標高87.0～89.5m付近に位置し、通路中央から通路端に延びるにつれて高くなり、地山を削りだし平坦面としている。また、通路211のすぐ1.0m上には通路210が並行して延びる。幅0.30～2.10m、長さ41.00mで、断面形はL字状を呈する。

通路212 (第6図)

B区副郭下段平場から腰郭202へ通じる。標高93.0～94.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としている。幅0.90～2.20m、長さ4.40mで、尻のほうは攪乱で壊されている。

通路213 (第6図)

B区主郭と副郭下段平場の間、標高92.5～93.0m付近に位置し、地山を削りだしている。幅1.20～4.50m、長さ12.80mで、北端は腰郭202に、南端は腰郭201に接続する。

通路214 (第6図)

B区副郭下段平場の北東端から腰郭201を経由し、腰郭202に通じるつづら折り状の通路で、標高92.0～94.0m付近に位置し地山を削りだしている。下段平場から腰郭201に通じる通路は幅1.50～3.40m、長さ4.30m、腰郭201から腰郭202に通じる通路は幅0.70～1.50m、長さ5.40mである。

通路215 (第6図)

B区副郭の腰郭207南西端から通路211東端に通じる通路で、標高86.5～89.0m付近に位置する。幅0.30～0.90m、長さ13.20mで、地山を削りだし断面形はL字状を呈する。

溝跡201 (第6図)

B区副郭東側斜面、腰郭203の東端、標高85.5m付近に位置し、地山面で確認された。検出長は約6.50mで南北方向に延びる溝跡である。上幅が0.90～1.60m、下幅は0.35～0.65mで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は確認されなかった。

掘立柱建物跡211 (第6図)

B区の副郭下段平場南西側に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。建物総長は、桁行が北側柱列で3.44mである。梁行が東妻で2.07m、西妻で2.53mである。柱穴掘り方の平面形は、長径32～33cm、短径27cmの楕円形のもの、径26～32cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは28～61cmで、堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径12～18cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡212 (第6図)

B区の副郭下段平場北東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡217、掘立柱建物跡213、焼土遺構202と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で4.18m、柱間寸法は西から2.09m・2.09mである。梁行が東妻で(3.90m)、西妻で4.10mである。柱穴掘り方の平面形は、一辺32~43cmの隅丸方形のもの、長径35~41cm、短径30~32cmの楕円形のもの、径28cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは10~46cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~にぶい黄褐色の砂~シルト質土である。柱痕跡は5ヶ所で確認され、径10~20cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡213 (第6図)

B区の副郭下段平場北東側に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。焼土遺構202と重複するがこれより新しい。また、柱穴列跡217、掘立柱建物跡212と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で3.73m、柱間寸法は西から1.85m・1.88mである。梁行が東妻で(3.52m)、西妻で(3.35m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径25~29cm、短径22~23cmの楕円形のもの、径15~30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは9~32cmで、堆積土は凝灰岩片が入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径9~12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡214 (第6図)

B区の副郭下段平場中央に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。建物総長は、桁行が東側柱列で2.55mである。梁行が北妻で(2.22m)、南妻で2.22mである。柱穴掘り方の平面形は、長径24~40cm、短径19~35cmの楕円形のもの、径28cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは22~52cmで、堆積土は凝灰岩片が少量~多量入るにぶい黄褐色~黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径7~16cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が多量、凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。

柱穴列跡215 (第6図)

B区の副郭下段平場南西側に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。東西の柱穴列の総長は(2.17m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸20cm、短軸16cmの隅丸長方形のもの、一辺20cmの隅丸方形を呈するものがある。柱穴の深さは21~28cmで、堆積土は凝灰岩片が中量入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径10cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡216 (第6図)

B区の副郭下段平場中央の南東よりに位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。東西の柱穴列の総長は(2.52m)である。柱穴掘り方の平面形は、径22~26cmの円形を呈する。柱穴の深さは16~31cmで、堆積土は凝灰岩片が微量入るにぶい黄橙色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡217 (第6図)

B区の副郭下段平場北東側に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。掘立柱建物跡212・213と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は5.70m、柱間寸法は西から1.92m・1.95m・1.84mである。柱穴掘り方の平面形は、長径38cm、短径30cmの楕円形のもの、径30～32cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは26～53cmで、堆積土は凝灰岩片が入るにぶい黄橙色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径12～17cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入るにぶい黄橙色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡218 (第6図)

B区の副郭下段平場北東側の南西際に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(2.00m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺22cmの隅丸方形のもの、長径30cm、短径24cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは15～23cmで、堆積土は凝灰岩片が中量入るにぶい黄橙色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径11cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が多量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡219 (第6図)

B区の副郭下段平場南西側に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。南北の柱穴列の総長は2.42mである。柱穴掘り方の平面形は、長径36cm、短径28cmの楕円形のもの、径34cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは28～45cmで、堆積土は凝灰岩片が少量～中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径14～16cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片が中量～多量入る褐色のシルト質土である。

柱穴列跡220 a (第6図)

B区の副郭腰郭201の南西端に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。柱穴列跡220 bと重複し、これより新しい。柱穴列跡222と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は(1.80m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径55cm、短径35cmの楕円形のもの、径37cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは24～78cmで、堆積土は凝灰岩片が微量入る灰黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡220 b (第6図)

B区の副郭腰郭201の南西端に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。柱穴列跡220 aと重複し、これより古い。また、柱穴列跡222と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は(1.33m)である。柱穴掘り方の平面形は、径33～40cmの円形を呈する。柱穴の深さは35～50cmで、堆積土は凝灰岩片が微量入る灰黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径11cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡221 (第6図)

B区の副郭腰郭201の南西端に位置し地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模で

ある。東西の柱穴列の総長は(3.25m)である。柱間寸法は西から(1.62m)・(1.63m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径34cm、短径26cmの楕円形のもの、径22~30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは9~17cmで、堆積土は凝灰岩片が入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質砂である。

柱穴列跡222 (第6図)

B区の副郭腰郭201の北東から南西にかけて位置し、地山面で確認された。弧状に延びる柱穴列跡で、12間の規模である。柱穴列跡220a・220b・223と重複するが、新旧関係は不明である。弧状の柱穴列の総長は(31.66m)である。柱間寸法は西から(1.89m)・(1.48m)・(2.14m)・(2.68m)・(1.69m)・(1.84m)・(3.33m)・(3.35m)・(3.25m)・(3.18m)・3.42m・3.45mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸25cm、短軸18cmの隅丸長方形のもの、長径29~38cm、短径22~30cmの楕円形のもの、径25~34cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは12~52cmで、堆積土は凝灰岩片が微量~多量入る明黄褐色~暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は6ヶ所で確認され、径9~12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~褐色のシルト質土~砂である。

柱穴列跡223 (第6図)

B区の副郭腰郭201の中央付近に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。柱穴列跡222と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は(6.90m)である。柱間寸法は西から(3.56m)・3.34mである。柱穴掘り方の平面形は、長径36~42cm、短径30cmの楕円形のもの、径35cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは13~37cmで、堆積土は凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径10cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が微量~少量入る褐色のシルト質土である。

柱穴列跡224 (第6図)

B区の副郭腰郭201の中央付近に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。東西の柱穴列の総長は(5.08m)である。柱間寸法は西から(1.73m)・(1.85m)・(1.51m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径25cm、短径18cmの楕円形のもの、径15~21cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは15~25cmで、堆積土は凝灰岩片が少量~多量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡225 (第6図)

B区の副郭腰郭201の北東側に位置し、地山面で確認された。地形に沿って弧状に南北に延びる柱穴列跡で、4間の規模である。柱穴列跡228と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は(8.29m)である。柱間寸法は北から(1.85m)・2.35m・1.94m・2.17mである。柱穴掘り方の平面形は、一辺20cmの隅丸長方形のもの、長径22cm、短径20cmの不整な楕円形のもの、径25~30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは26~47cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色~にぶい黄褐色の砂~シルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径8~12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡226 (第6図)

B区の副郭腰郭201の北東端に位置し、地山面で確認された。地形に沿って南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は4.65mである。柱間寸法は北から(2.45m)・(2.21m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺25cmの隅丸方形のもの、長径27cm、短径21cmの楕円形のもの、径37cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは8～47cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径10～13cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡227 (第6図)

B区の副郭腰郭201の北東端に位置し、地山面で確認された。地形に沿って弧状に南北に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。南北の柱穴列の総長は6.67mである。柱間寸法は北から2.27m・2.50m・1.90mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸22cm、短軸17cmの隅丸長方形のもの、一辺23cmの隅丸方形のもの、径25cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは8～42cmで、堆積土は凝灰岩片が少量～多量入るにぶい黄褐色～褐色の砂～シルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径10～12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が微量～少量入る褐色のシルト質土である。

柱穴列跡228 (第6図)

B区の副郭腰郭201の北東端に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。柱穴列跡225と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は2.47mである。柱穴掘り方の平面形は、径25～27cmの円形を呈する。柱穴の深さは26～28cmで、堆積土は凝灰岩片が中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径7～14cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡229 (第6図)

B区の副郭腰郭202の北東端に位置し、地山面で確認された。L字形の柱穴列跡で、南北に1間、東西に1間の規模である。南北の柱穴列の総長は1.47m、東西の柱穴列の総長は2.52mである。柱穴掘り方の平面形は、長径30～40cm、短径25～27cmの楕円形のもの、径25cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは18～64cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径8～15cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡230 (第6図)

B区の副郭腰郭202の北東端、通路214の登り口のすぐ東に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。南北の柱穴列の総長は1.14mである。柱穴掘り方の平面形は、長径31cm、短径26cmの楕円形のもの、径27cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは23～32cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径12～13cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

柱穴列跡231 (第6図)

B区の副郭通路213の北端に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、3間の規模で

ある。東西の柱穴列の総長は6.64m、柱間寸法は西から2.04m・2.27m・2.33mである。柱穴掘り方の平面形は、長径34cm、短径26cmの楕円形のもの、径27～30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは33～54cmで、堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。南西端の柱穴の底に礎石と見られる一辺10cmの礫がある。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径12～17cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。

② 北側丘陵（A区）

北側丘陵で発見した遺構は腰郭1、堀切2、通路8、土塙跡36、焼土遺構1、掘立柱建物跡10、柱穴列跡14である。

腰郭208（第11図）

A区南部平場の縁辺と主郭北西側、標高89.5～91.0m付近に位置し、地山を削りだし平坦面としていいる。北端で堀切201、南東端で通路208、南南東端で通路210に接続する。幅1.20～11.90m、総長178.60mである。

堀切201（第10図）

A区中央部平場南端の東側・西側斜面、標高86.5～89.0m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根の頂部にほぼ直交する形で堀をつくりだし、土塁状の高まりは伴わない。上幅1.35～2.00m、下幅0.55～1.30m、残存長15.85m、深さ48cmである。断面形は東側では逆台形を呈し緩やかに立ち上がる。また中央ではU字形を呈し、急に立ち上がる。堀底には橋脚跡は確認されなかった。堀切の堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、土質・土色・混入物の違いから細分される。

堀切202（第9図）

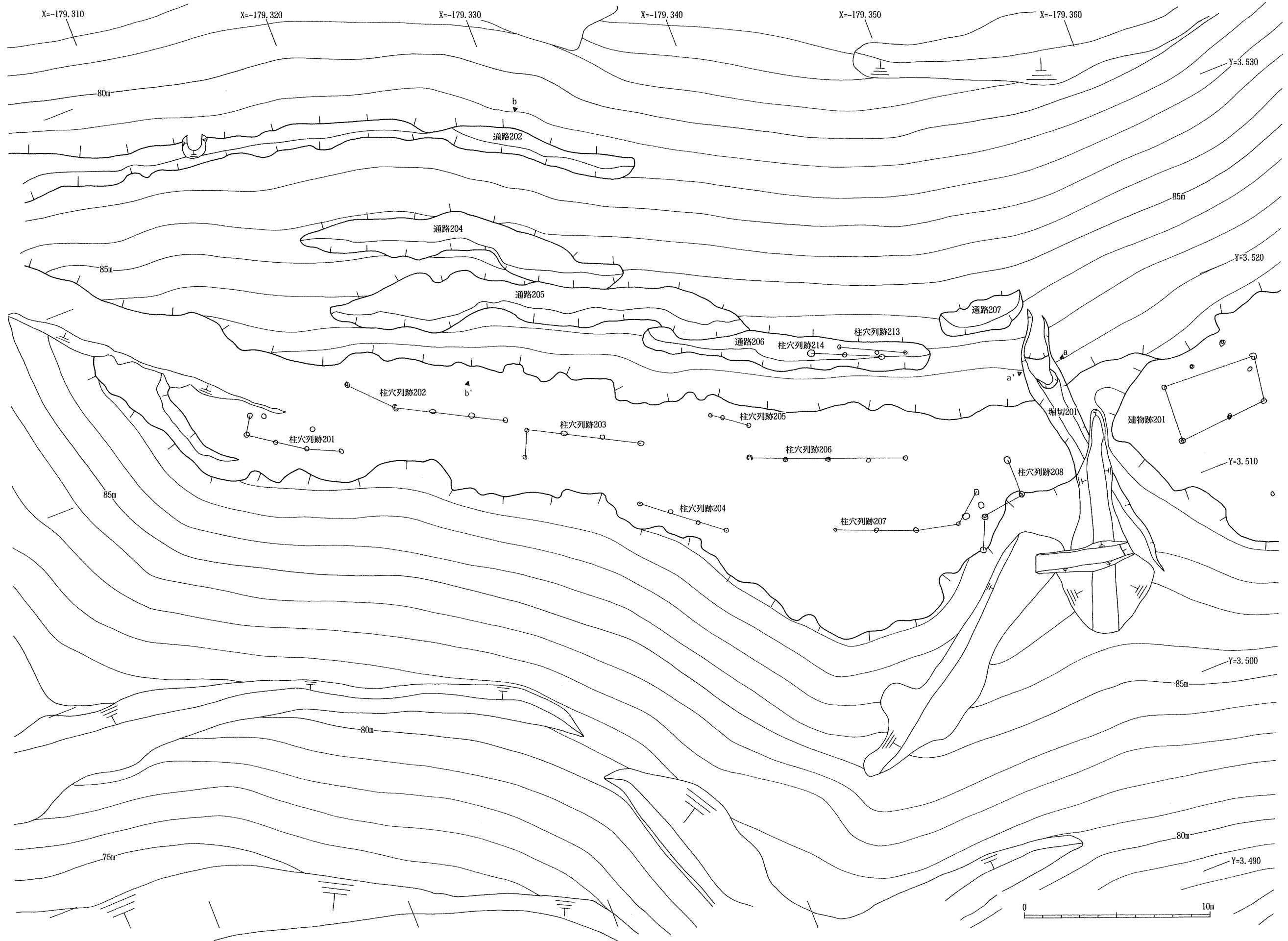
A区中央部平場北端の東側・西側斜面、標高77.0～85.0m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根の頂部にほぼ直交する形で堀をつくりだし、土塁状の高まりは伴わない。東斜面の堀切南東端では通路202に接続している。上幅2.15～5.95m、下幅1.65～3.00m、残存長21.95m、深さ70～120cmである。断面形は箱堀を呈し、急に立ち上がる。堀底には橋脚跡は確認されなかった。西側堀切の両肩にはかきあげ土とみられる黄褐色～褐色のシルト質砂を基調とする凝灰岩片を含むしまりの弱い積み土がある。堀切の堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、土質・土色・混入物の違いから細分される。

通路201（第9図）

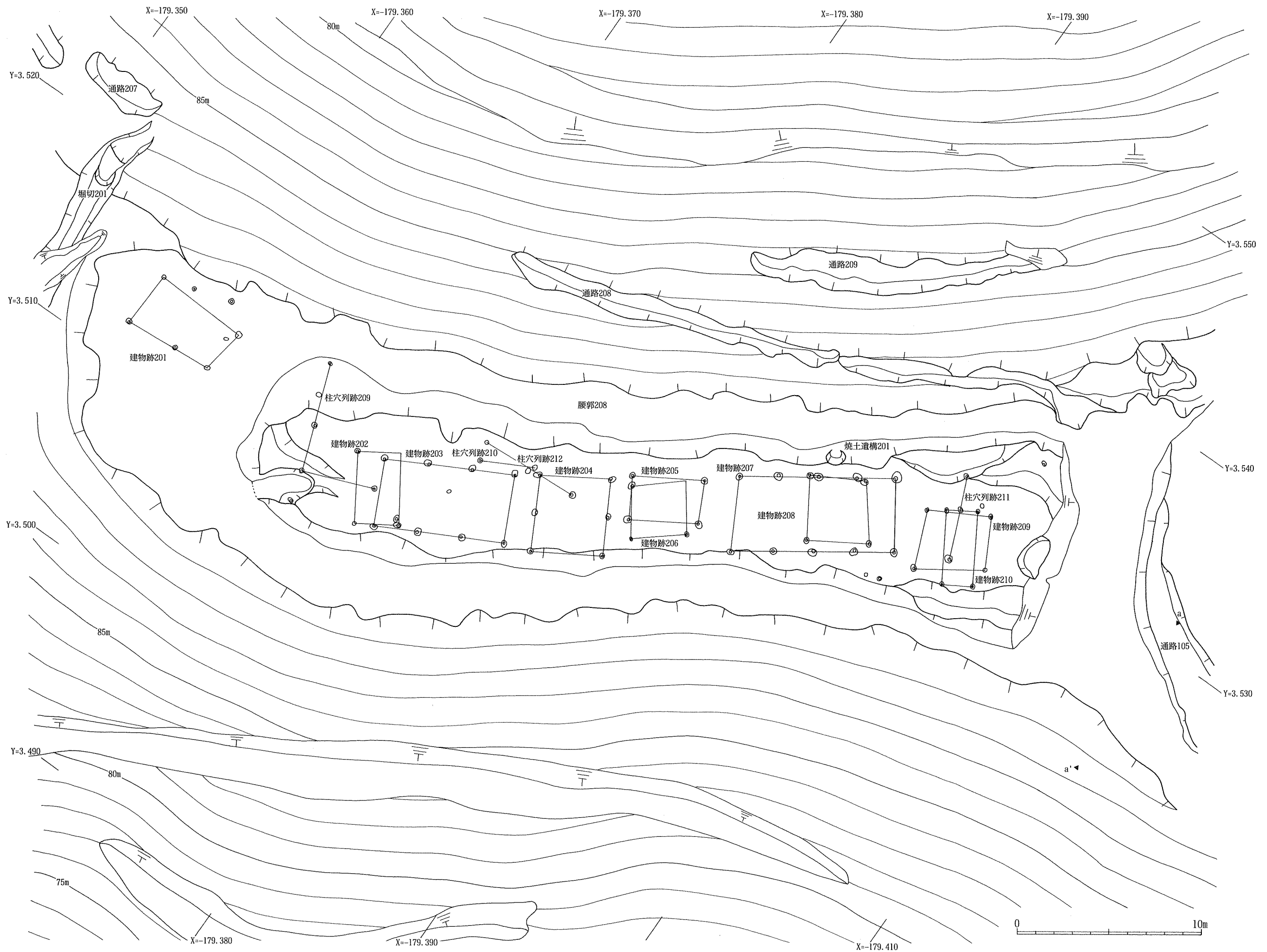
A区北端土塙群より尾根づたいに7.0m南側、標高76.5～78.5m付近に位置し、地山面で確認された。北から南へ登っていく通路で、幅1.00～1.50m、長さ9.40m、断面形は逆台形を呈する。地山岩盤を掘りこんで、湾曲する通路を尾根づたいにつくりだしている。堆積土は暗褐色のシルト質土である。

通路202（第9図）

A区北側から中央にかけて標高79.5～82.5m付近に位置し、地山面で確認された。北から南へ登る通路で、くの字状を呈し、幅が0.90～1.50mである。総長は75.70mで、南西に26.00mのび、そこから南に屈曲して49.70m延びる。尾根頂部の地山岩盤を掘りこんだり、斜面を削りだしたりして通路を

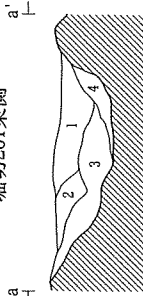


第10图 A区中央部遺構配置図



第11図 A区南部遺構配置図

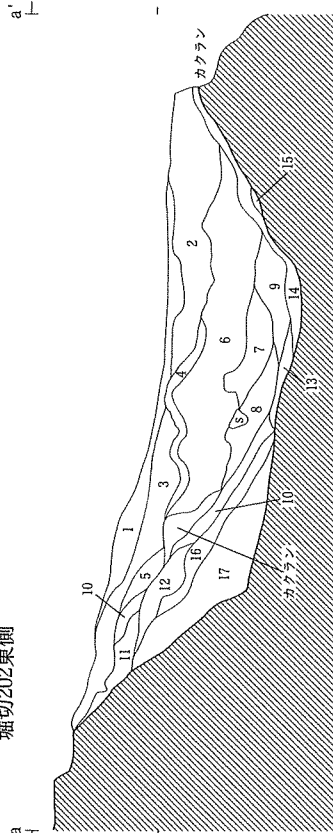
掘切201東側



層	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10R5/4 砂質	自然 風化岩片中量 細切埋積土
2	褐色	10R4/4 砂質	" 風化岩片少量 細切埋積土
3	にぶい黄褐色	10R4/3 砂質	" 風化岩片均質に少量 細切埋積土
4	褐色	10R4/4 砂質	" 風化岩片中量 細切埋積土

掘切201東側

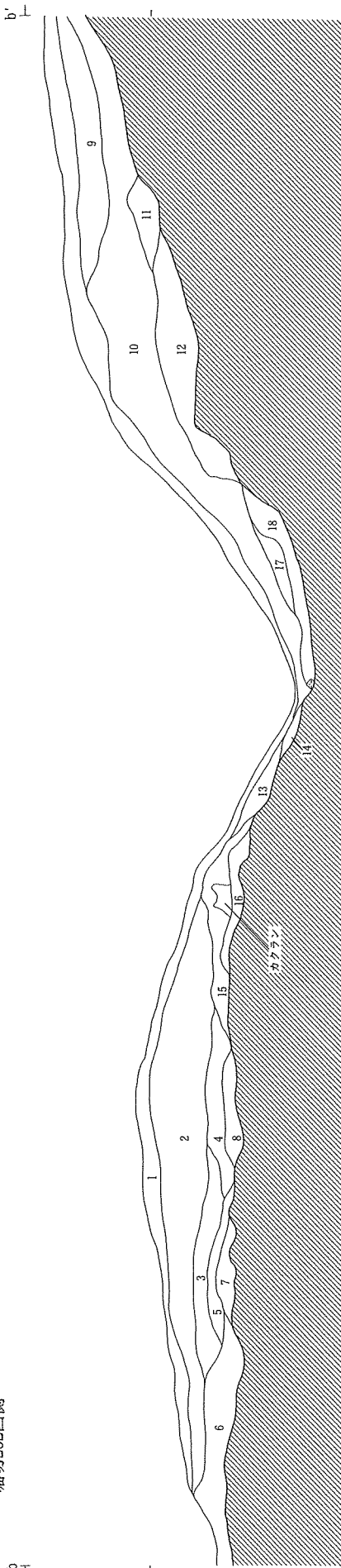
掘切202東側



層	土色	土質	備考
1	褐色	10R4/4 弱砂質	人為 風化岩片中量 埋土
2	にぶい黄褐色	10R5/4 弱砂質	" 礫片~礫中量 埋土
3	暗褐色	10R3/3 弱砂質	" 風化岩片中量 埋土
4	黒褐色	10R2/2 弱砂質	" 炭化物微量 風化岩片少量 埋土
5	黒褐色	10R3/2 弱砂質	" 風化岩片少量 埋土
6	暗褐色	10R3/4 弱砂質	" 風化岩片中量 埋土
7	暗褐色	10R3/4 弱砂質	" 風化岩片少量 埋土
8	黒褐色	10R2/3 弱砂質	" 風化岩片微量 埋土
9	暗褐色	10R3/4 弱砂質	" 風化岩片中量 埋土
10	黒褐色	10R3/2 弱砂質	自然 炭化物・岩片少量 細切埋積土
11	暗褐色	10R3/3 弱砂質	" 炭化物微量 風化岩片少量 細切埋積土
12	暗褐色	10R3/4 弱砂質	" 炭化物微量 風化岩片含 細切埋積土
13	黒褐色	10R2/2 弱砂質	" 風化岩片含 トライ化 細切埋積土
14	黄灰色	2.5R/1 弱砂質	" 岩片均質に少量 細切埋積土
15	褐色	10R4/4 弱シルト	" 岩片微量 細切埋積土
16	にぶい黄褐色	10R4/3 弱砂質	" 岩片少量 細切埋積土
17	暗褐色	10R3/3 弱砂質	" 炭化物微量 風化岩片中量 細切埋積土

掘切202東側

掘切202西側



掘切202西側

掘切202西側

第12図 掘切201・202土層断面図

層	土色	土質	備考
1	褐色	10R4/4 シルト質砂	自然
2	黄褐色	10R5/6 シルト質砂	人為 凝灰岩少量 埋土
3	暗褐色	10R3/4 シルト質砂	自然 凝灰岩片少量
4	褐色	10R4/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量
5	褐色	10R4/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量
6	にぶい黄褐色	10R5/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量
7	にぶい黄褐色	10R5/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量
8	にぶい黄褐色	10R5/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量
9	褐色	10R4/6 砂	人為 凝灰岩少量 埋土

層	土色	土質	備考
10	褐色	10R4/4 砂	自然 凝灰岩少量 埋土
11	黄褐色	10R5/6 シルト質砂	" 凝灰岩片微量
12	黄褐色	10R5/6 シルト質砂	人為 凝灰岩片多量 かきあげ土
13	褐色	10R4/6 シルト質砂	自然 凝灰岩片微量 かきあげ土崩落土
14	にぶい黄褐色	10R5/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量 かきあげ土崩落土
15	にぶい黄褐色	10R5/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量 かきあげ土
16	褐色	10R4/4 シルト質砂	人為 凝灰岩片少量 かきあげ土
17	褐色	10R4/4 シルト質砂	自然 凝灰岩片少量 細切埋積土
18	褐色	10R4/4 シルト質砂	" 凝灰岩片少量 細切埋積土

つくっている。

通路203 (欠番)

通路204 (第10図)

A区中央東斜面、標高84.0～85.0m付近、通路202の3.0m西上に位置し、地山面で確認された。幅1.20～1.70m、長さ17.50mで南北にのび、断面形はL字状を呈する。南端は通路205の中央付近に接続する。

通路205 (第10図)

A区中央東斜面、標高85.5～86.0m付近、地山面で確認された。幅1.00～2.60m、長さ22.00mで南北にのび、断面形はL字状を呈する。通路204の南端、通路206の北側に接続し、斜面を削りだして通路をつくっている。

通路206 (第10図)

A区中央東斜面、標高87.0m付近、通路207の1.0m北上に位置し、地山面で確認された。幅0.50～1.50m、長さ15.00mで南北にのび、断面形はL字状を呈する。通路206上に柱穴列跡213・214が平行して並び、北東端は通路205に接続する。

通路207 (第10図)

A区中央東斜面、標高86.0m付近、堀切201東端の0.5m東下、通路206の1.0m南下に位置し、地山面で確認された。幅1.40m、長さ4.50mで南北にのび、断面形はL字状を呈する。

通路208 (第11図)

A区南部東斜面、標高85.0～89.5m付近に位置し地山面で確認された。幅0.40～1.00m、長さ33.50mで南東方向へ登り、腰郭208の南東隅、通路210の北西端に接続する。断面形はL字状を呈する。

通路209 (第11図)

A区南部東斜面、通路208の東下、標高84.5m付近に位置し地山面で確認された。幅0.50～1.20m、長さ16.80mで、断面形はL字状を呈する。

掘立柱建物跡201 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。建物総長は、桁行が西側柱列で(4.86m)、柱間寸法は北から2.83m・(2.05m)である。梁行が北妻で(3.07m)、南妻で(2.47m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸27～30cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、一辺が31cmの隅丸方形のもの、径25～32cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは20～37cmで、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が少量入るにぶい黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径14～18cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が入る褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡202 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡203、柱穴列跡209と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で(3.96m)である。梁行が西妻で(2.40m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸40cm、短軸30cmの隅丸長方形のもの、一辺が18cmの隅丸方形のもの、長径30cm、短径22cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは

b' 1

89.2m
89.0m

88.0m

87.0m

86.0m

85.0m

84.0m

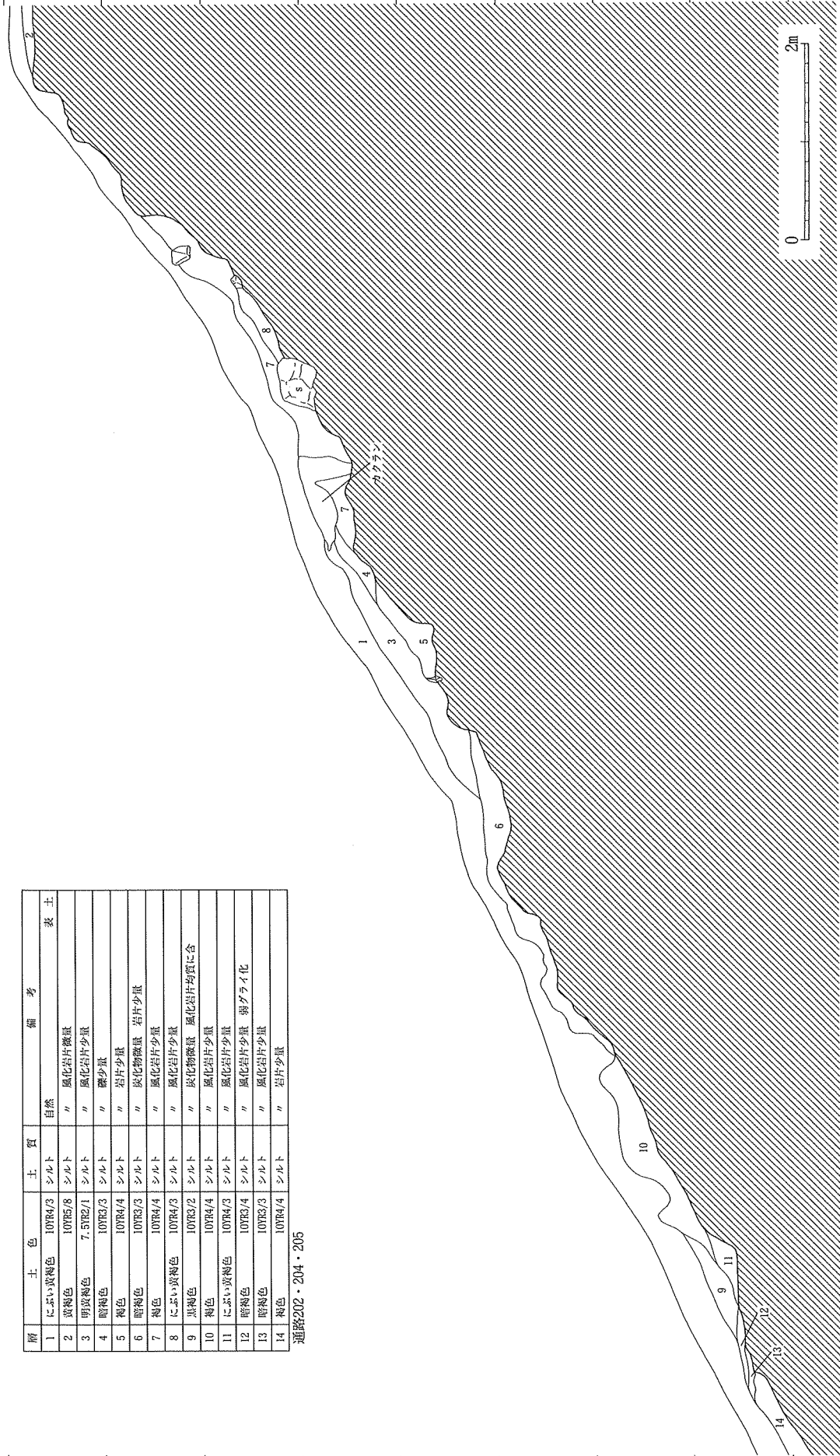
83.0m

82.0m

81.0m

層	土色	土質	備考	表土
1	にぶい黄褐色	シルト	自然	
2	黄褐色	シルト	"	風化岩片微量
3	明黄褐色	シルト	"	風化岩片少量
4	暗褐色	シルト	"	礫少量
5	褐色	シルト	"	岩片少量
6	暗褐色	シルト	"	炭化物微量 岩片少量
7	褐色	シルト	"	風化岩片少量
8	にぶい黄褐色	シルト	"	風化岩片少量
9	黄褐色	シルト	"	炭化物微量 風化岩片均質に含
10	褐色	シルト	"	風化岩片少量
11	にぶい黄褐色	シルト	"	風化岩片少量
12	暗褐色	シルト	"	風化岩片少量 弱グライ化
13	暗褐色	シルト	"	風化岩片少量
14	褐色	シルト	"	岩片少量

通路202・204・205



第13図 通路202・204・205土層断面図

14～16cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る明黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径12～20cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が入る橙色～黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡203（第11図）

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡202と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が西側柱列で7.06m、柱間寸法は北から2.36m・2.34m・2.36mである。梁行が北妻で3.66m、南妻で3.70mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸34～40cm、短軸26～33cmの隅丸長方形のもの、長径34～44cm、短径30～38cmの楕円形のもの、径35cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは27～45cmで、堆積土は凝灰岩片が微量～中量入る明黄褐色～灰黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、長軸16cm、短軸12cmの隅丸長方形のもの、径11～15cmの円形を呈するものがある。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡204（第11図）

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴列跡212と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が南側柱列で4.20m、柱間寸法は西から2.11m・2.10mである。梁行が東妻で3.76m、西妻で3.86mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸33～48cm、短軸22～28cmの隅丸長方形のもの、一辺30cmの隅丸方形のもの、径25～30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは31～40cmで、堆積土は凝灰岩片が微量～中量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径10～15cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が微量～少量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡205（第11図）

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡206と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で3.90mである。梁行が北妻で2.36m、南妻で2.34mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸42～43cm、短軸30～36cmの隅丸長方形のもの、一辺33cmの隅丸方形のもの、径30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは37～47cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径10～18cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡206（第11図）

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡205と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が西側柱列で3.03mである。梁行が北妻で2.85mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸30～36cm、短軸20～28cmの隅丸長方形のもの、長径20cm、短径10cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは15～30cmで、堆積土は凝灰岩片が中量入る明黄褐色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径9～13cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が微量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡207（第11図）

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行4間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡208と

重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が西側柱列で8.84m、柱間寸法は北から2.28m・2.20m・2.26m・2.12mである。梁行が北妻で4.10m、南妻で4.00mである。柱穴掘り方の平面形は、長径36～52cm、短径30～37cmの楕円形のもの、径36～52cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは27～60cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量～中量入る明黄褐色～黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径10～21cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量～中量入る黄褐色～褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡208 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡207と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で3.54mである。梁行が東妻で3.08m、西妻で3.40mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸38cm、短軸28cmの隅丸長方形のもの、一辺31cmの隅丸長方形のもの、長径34cm、短径26～28cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは20～32cmで、堆積土は凝灰岩片が入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径8～14cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が入る黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡209 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の南北棟である。掘立柱建物跡210、柱穴列跡211と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が東側柱列で3.48mである。梁行が北妻で3.25m、南妻で(2.90m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺20～26cmの隅丸長方形のもの、長径36cm、短径30cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは16～36cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径8～14cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡210 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟である。掘立柱建物跡209、柱穴列跡211と重複するが、新旧関係は不明である。建物総長は、桁行が北側柱列で4.02mである。梁行が東妻で1.68m、西妻で1.66mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸24cm、短軸16cmの隅丸長方形のもの、一辺20～24cmの隅丸長方形を呈するものがある。柱穴の深さは17～28cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る明黄褐色～褐色のシルト質土である。柱痕跡は柱穴全部で確認され、径6～10cmの円形を呈する。堆積土は炭化物が微量～少量、凝灰岩片が入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡201 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。L字形に直角に曲がる南北に長い柱穴列跡で、南北に3間、東西に1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(5.11m)、柱間寸法は北から(1.60m)・(1.70m)・(1.81m)である。東西の柱穴列の総長は(1.08m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸20cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、一辺が22cmの隅丸長方形のもの、径22cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは9～44cmで、堆積土は凝灰岩片が微量～少量入る黄褐色～褐色の砂～シルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくり抜いている。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡202 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。折れ線状に延びる南北に長い柱穴列跡で、4間の規模である。南北の柱穴列の総長は(8.76m)、柱間寸法は北から(2.88m)・(1.96m)・(2.06m)・(1.86m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸26cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、長径24~34cm、短径20~30cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは2~21cmで、堆積土は凝灰岩片が微量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径17cmの円形を呈する。堆積土は黄褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。

柱穴列跡203 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。L字形に直角に曲がる南北に長い柱穴列跡で、南北に3間、東西に1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(6.15m)、柱間寸法は北から(2.00m)・(2.06m)・(2.08m)である。東西の柱穴列の総長は(1.47m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺20~22cmの隅丸方形のもの、長径30~34cm、短径20~23cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは7~28cmで、堆積土は凝灰岩片が微量~少量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡204 (第10図)

A区中央部西側に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。南北の柱穴列の総長は(4.81m)、柱間寸法は北から(1.70m)・(1.58m)・(1.56m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺20~25cmの隅丸方形のもの、長径30cm、短径23cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは12~21cmで、堆積土は凝灰岩片が微量~少量入る褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡205 (第10図)

A区中央部東際に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(2.14m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸23cm、短軸18cmの隅丸長方形のもの、長径24cm、短径18cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは6~15cmで、堆積土はにぶい黄褐色~褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡206 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、4間の規模である。南北の柱穴列の総長は(8.37m)、柱間寸法は北から1.92m・(2.29m)・2.17m・2.00mである。柱穴掘り方の平面形は、一辺20cmの隅丸方形のもの、径25~26cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは5~17cmで、堆積土は炭化物が微量~少量、凝灰岩片が微量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径10~12cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が微量入るにぶい黄褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。

柱穴列跡207 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。L字形に曲がる南北に長い柱穴列跡で、南北に3間、

東西に1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(6.57m)、柱間寸法は北から(2.19m)・(2.13m)・(2.27m)である。東西の柱穴列の総長は(1.97m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸26~30cm、短軸17~23cmの隅丸長方形のもの、一辺19cmの方形のもの、長径18cm、短径14cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは4~20cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡208 (第10図)

A区中央部に位置し、地山面で確認された。鍵の手状に曲がる柱穴列跡で、東西に1間、南北に1間、東西に1間の規模である。東西・南北・東西の柱穴列の寸法は、(1.85m)・2.26m・(2.06m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺27~32cmの隅丸方形のもの、長径40cm、短径30cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは17~45cmで、堆積土は炭化物が少量~中量、凝灰岩片が微量~中量入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径15~18cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が微量~中量入る褐色のシルト質土である。柱穴はいずれも地山岩盤をくりぬいている。

柱穴列跡209 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。L字形に曲がる東西に長い柱穴列跡で、東西に3間、南北に1間の規模である。掘立柱建物跡202と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は6.08m、柱間寸法は西から2.61m・(1.68m)・(1.80m)である。南北の柱穴列の総長は4.08mである。掘り方の平面形は、長軸20~30cm、短軸13~22cmの隅丸長方形のもの、長径33cm、短径25cmの楕円形のもの、径33cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは17~38cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径8~20cmの円形を呈し、堆積土は炭化物が微量、凝灰岩片が少~中量入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡210 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。柱穴列跡212と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は3.00mである。柱穴掘り方の平面形は、径27~28cmの円形を呈する。柱穴の深さは16~21cmで、堆積土は凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径10~14cmの円形を呈する。堆積土は凝灰岩片が少~中量入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡211 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。掘立柱建物跡209・210と重複するが、新旧関係は不明である。東西の柱穴列の総長は4.58m、柱間寸法は西から2.75m・1.84mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸28~34cm、短軸24~27cmの隅丸長方形、一辺35cmの隅丸方形を呈するものがある。柱穴の深さは30~63cmで、堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色の砂~シルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径12~15cmの円形を呈する。堆積土は炭化物・凝灰岩片が少量入る黄褐色~褐色のシルト質土である。

柱穴列跡212 (第11図)

A区南部に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。柱穴列跡

210、掘立柱建物跡204と重複するが、新旧関係は不明である。南北の柱穴列の総長は(5.47m)、柱間寸法は北から(2.72m)・2.75mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸20cm、短軸17cmの隅丸長方形のもの、一辺28~32cmの隅丸方形を呈するものがある。柱穴の深さは19~32cmで、堆積土は炭化物が少量、凝灰岩片が少量~中量入る明黄褐色~黄褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径12~16cmの円形を呈する。凝灰岩片が少量~中量入る黄褐色のシルト質土である。

柱穴列跡213 (第10図)

A区中央部東側斜面の通路206上に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は(3.59m)、柱間寸法は北から(2.05m)・(1.55m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22cm、短軸19cmの隅丸長方形のもの、長径23cm、短径18cmの楕円形のもの、径18cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは7~17cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る褐色の砂である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡214 (第10図)

A区中央部東側斜面の通路206上に位置し、地山面で確認された。南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は(3.85m)、柱間寸法は北から(1.81m)・(2.04m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径34~38cm、短径24~35cmの楕円形のもの、径24cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは8~18cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る暗褐色の砂である。柱痕跡は確認されなかった。

③ 南側丘陵 (C区)

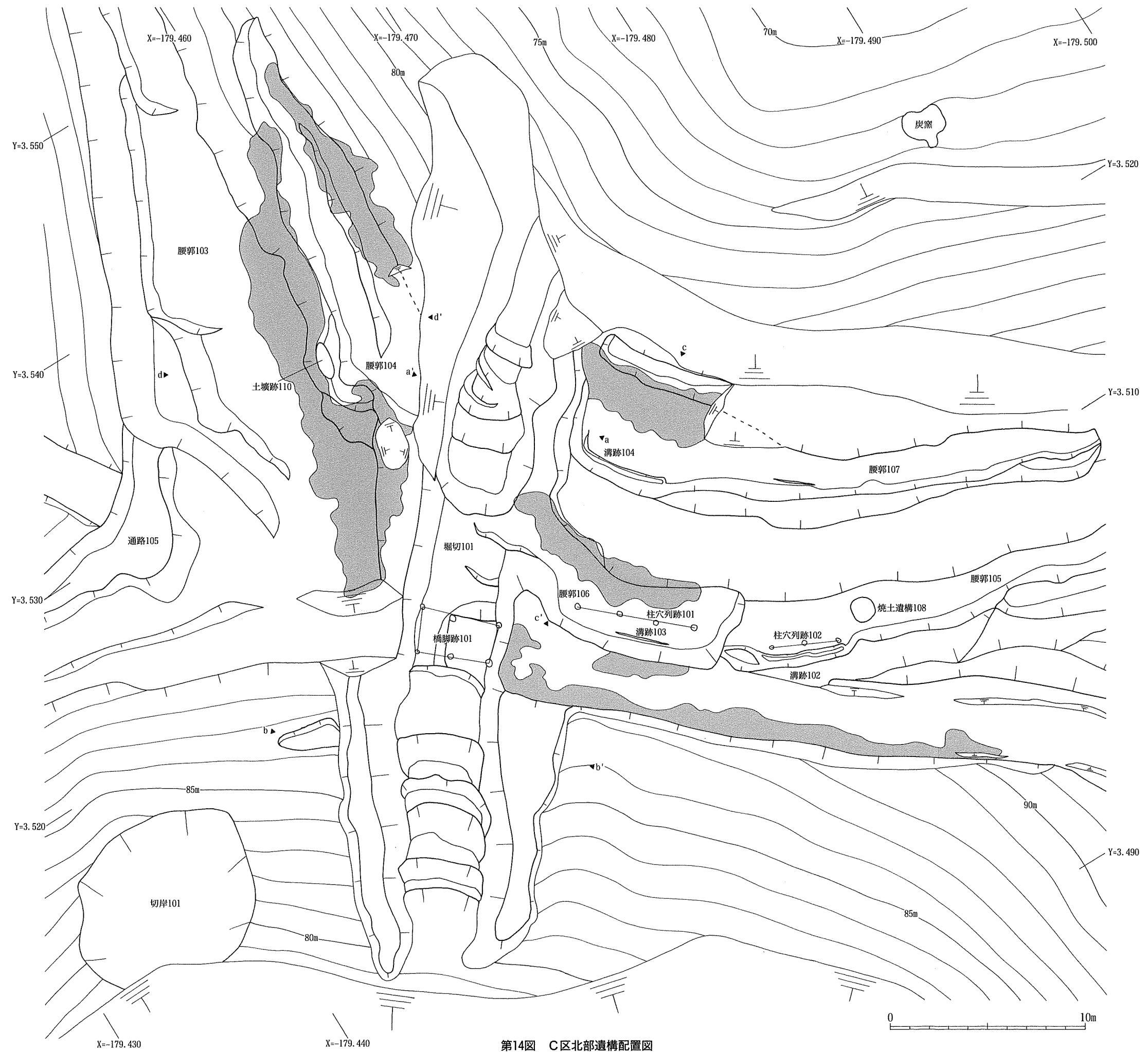
南側丘陵では丘陵上部の遺構確認と平板実測・写真撮影を行った。南側丘陵で発見した遺構は、腰郭11、堀切1、竪堀3、土塁状の高まりをもつ犬走り1、通路2、橋脚跡1、切岸1、土壇跡3、焼土遺構6、溝跡4、掘立柱建物跡3、柱穴列跡6である。

腰郭105 (第15図)

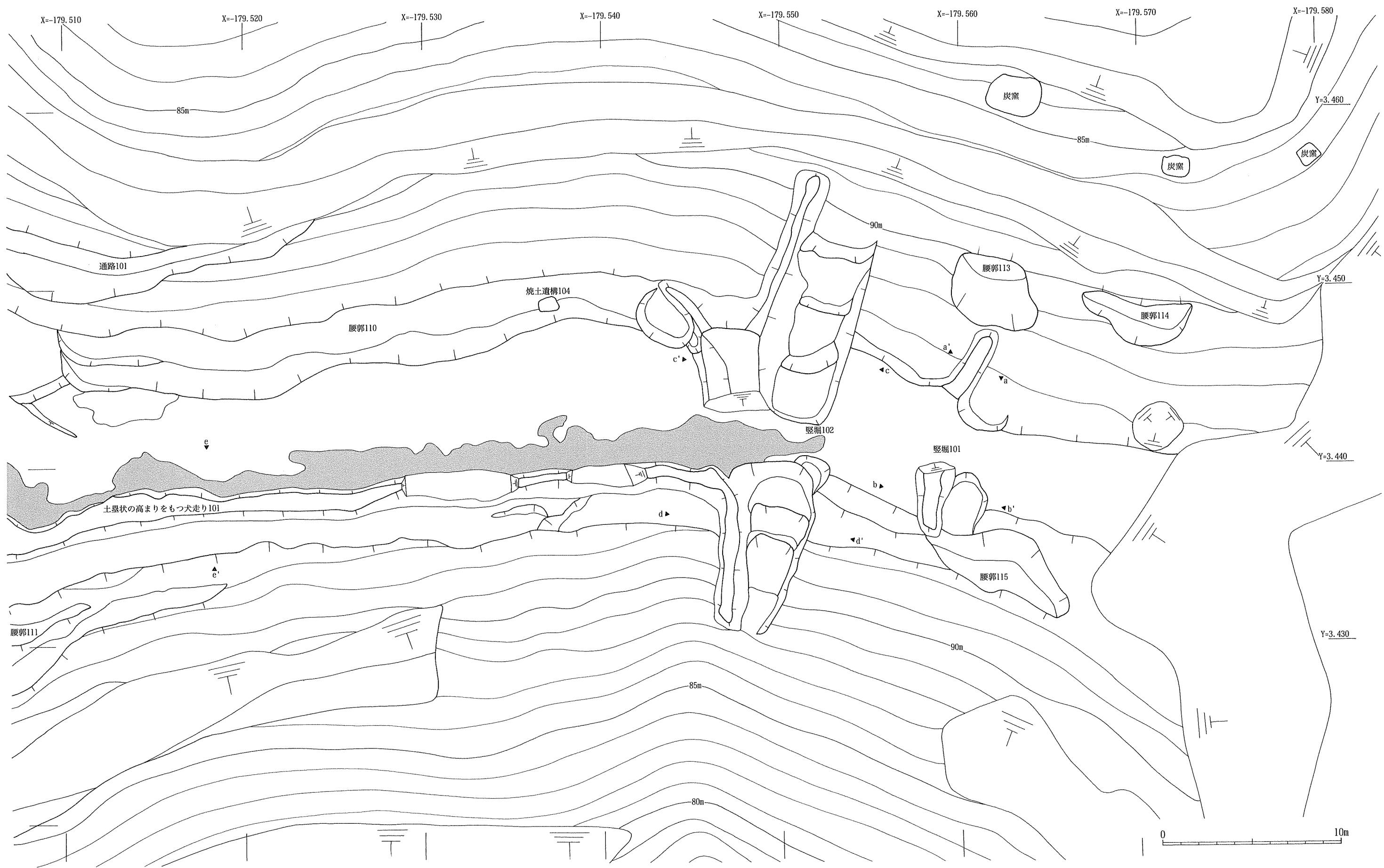
C区北側東斜面、腰郭106の南西端に接続し、腰郭107より4.0m高い北西側、標高87.0~88.0m付近に位置し、地山を削り出し平坦面としている。地形に沿って逆L字状に鈍角に曲がり南北に延びる腰郭である。幅0.65~2.45m、残存長41.15mで、南端は切り出し道路により壊されている。南へ24.75mのび、そこから西に屈曲して16.40m延びる。屈曲する付近、約1.0m西上に長さ10.03m、幅0.58~1.20mの段がある。腰郭105には溝跡102、柱穴列跡102、焼土遺構108を伴う。

腰郭106 (第14図)

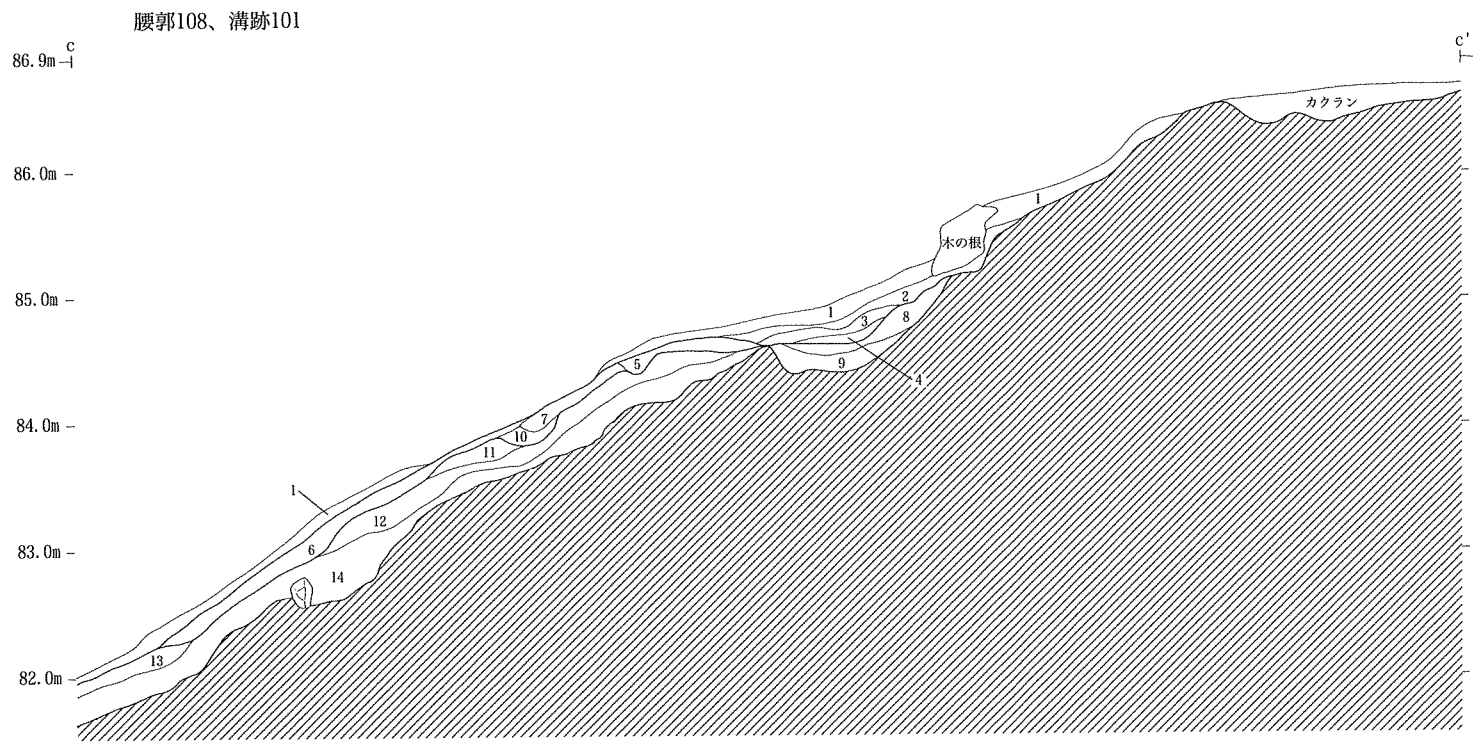
C区北側東斜面、堀切101・腰郭105に接続し、腰郭107より4.0m高い北西側、標高87.0m付近に位置する。幅0.95~3.15m、長さ14.10mで南西に延びる。斜面を削りだし、さらに中央部から南東端にかけて肩の部分盛り土整地し平坦面を作り出している。整地の範囲は長さ10.05m、幅0.90~2.55m、層厚は最大で42cmである。整地は褐色~灰黄褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから5層に分かれる。腰郭106は溝跡103、柱穴列跡101を伴う。



第14図 C区北部遺構配置図



第16図 C区南部遺構配置図

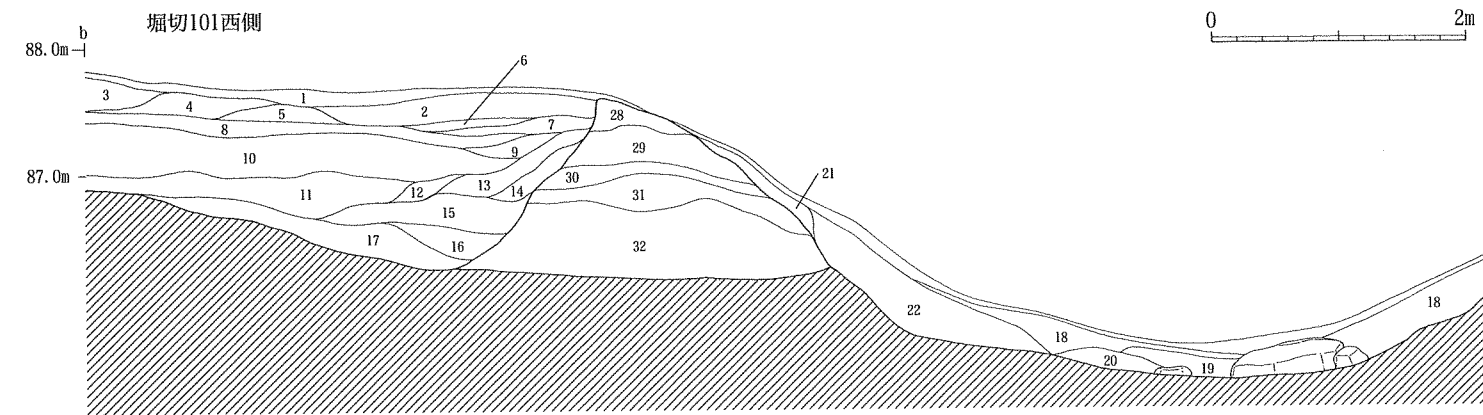
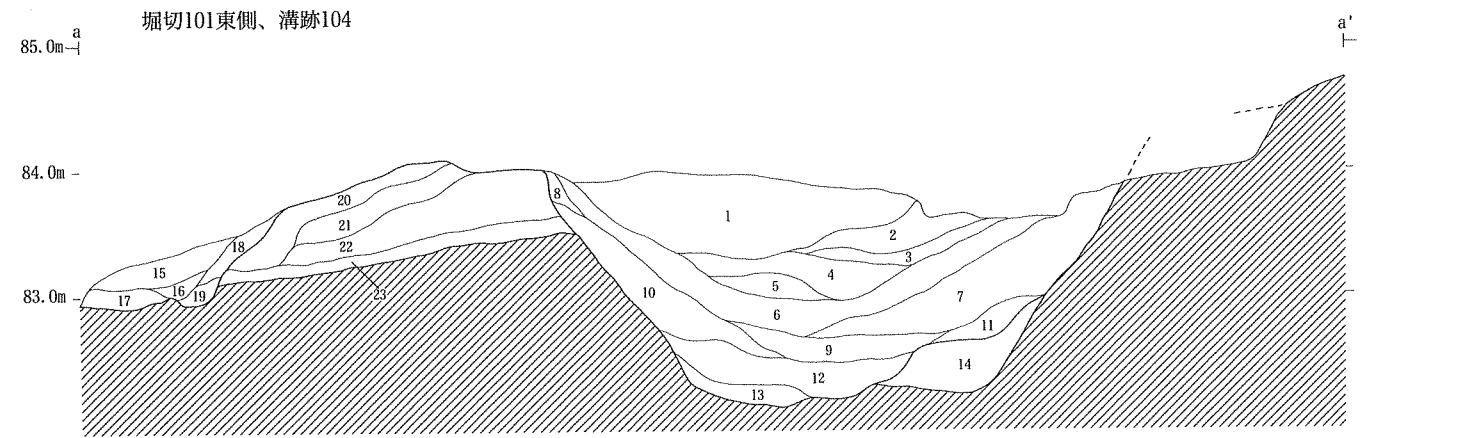


層	土色	土質	備考
1	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	自然 表土
2	褐色 10YR4/3	ローム	炭化物・礫片微量
3	褐色 10YR4/4	ローム	"
4	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	礫片微量
5	褐色 10YR4/4	ローム	人為 礫片中量 古段階腰郭108整地
6	褐色 10YR4/6	ローム	礫片微量 古段階腰郭108整地
7	褐色 10YR4/4	ローム	"
8	褐色 7.5YR4/3	ローム	自然 礫片少量 一部グライ化 溝101堆積土
9	灰黄褐色 7.5YR4/2	ローム	下部に中礫少量 溝101堆積土
10	黒色 10YR1.7/1		腐植土 樹痕
11	にぶい黄褐色 10YR4/3	ローム	人為 小礫中量 新段階腰郭108整地
12	にぶい黄褐色 10YR4/3	ローム	"
13	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	自然 炭化物微量 旧表土
14	褐色 10YR4/6	ローム	小礫・旧表土多量

腰郭108、溝跡101

層	土色	土質	備考
1	褐色 10YR3/3	シルト	人為 凝灰岩片多量 埋土
2	黒褐色 10YR2/3	シルト	岩片少量 埋土
3	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物微量 凝灰岩片中量 埋土
4	黒褐色 10YR3/2	シルト	凝灰岩片少量 埋土
5	褐色 10YR4/4	シルト	凝灰岩片少量 埋土
6	黒褐色 10YR2/2	シルト	自然 炭化物少量 凝灰岩片中量 旧表土
7	褐色 7.5YR4/4	シルト	凝灰岩片少量 崩落土
8	褐色 7.5YR4/4	シルト	凝灰岩片多量 土塁崩落土
9	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物少量 岩片中量 堀切堆積土
10	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	岩片少量 堀切堆積土
11	褐色 7.5YR4/4	シルト	岩片少量 堀切堆積土
12	褐色 7.5YR4/6	シルト	岩片中量 堀切堆積土
13	明褐色 7.5YR5/8	シルト	岩片少量 堀切堆積土
14	褐色 7.5YR4/4	シルト	岩片多量 堀切堆積土
15	褐色 10YR4/4	シルト	凝灰岩片中量 土塁崩落土
16	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	凝灰岩片多量 土塁崩落土
17	暗褐色 10YR3/4	シルト	凝灰岩片少量 土塁崩落土
18	褐色 10YR4/4	シルト	凝灰岩片中量 土塁崩落土
19	暗褐色 10YR3/4	シルト	風化岩片含 溝跡104堆積土
20	褐色 7.5YR4/4	シルト	人為 岩片少量 土塁積土
21	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	岩片少量 土塁積土
22	褐色 10YR4/6	シルト	凝灰岩片含 土塁積土
23	黒褐色 10YR2/3	シルト	自然 岩片少量 旧表土

堀切101東側、溝跡104



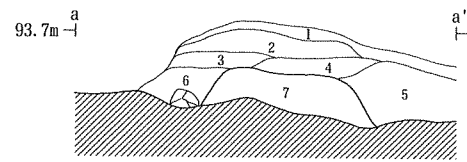
層	土色	土質	備考
1			自然 表土
2	褐色 7.5YR4/4	砂質シルト	"
3	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	"
4	褐色 10YR4/4	砂質シルト	"
5	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	角礫含
6	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	"
7	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	シルトブロック含
8	黄褐色 2.5Y5/3	砂質シルト	礫片微量
9	黄褐色 2.5Y5/4	砂質シルト	13層との境付近に礫片少量 土塁崩落土
10	褐色 10YR4/6	シルト	角礫多量
11	灰褐色 10YR4/2	砂質シルト	角礫少量
12	褐色 10YR4/4	砂質シルト	礫片少量 土塁崩落土
13	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	土塁崩落土
14	褐色 10YR4/4	砂質シルト	礫片含 土塁崩落土
15	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	礫片含 土塁崩落土
16	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	角礫多量

層	土色	土質	備考
17	褐色 10YR4/6	砂質シルト	自然
18	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	堀切堆積土
19	黒褐色 10YR3/2	シルト	堀切堆積土
20	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	堀切堆積土
21	褐色 10YR4/4	砂質シルト	土塁崩落土
22	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	礫少量 土塁崩落土
23	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	礫片少量 土塁崩落土
24	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	土塁崩落土
25	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	土塁崩落土
26	褐色 10YR4/4	砂質シルト	人為 礫含 土塁積土
27	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	礫含 土塁積土
28	褐色 10YR4/4	砂質シルト	土塁積土
29	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	礫片含 土塁積土
30	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	礫含 土塁積土
31	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	礫含 土塁積土
32	褐色 10YR4/6	砂質シルト	礫多量 土塁積土

堀切101西側

第17図 腰郭108、溝跡101・104、堀切101土層断面図

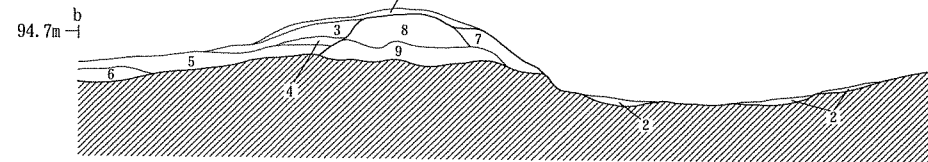
竖堀101東側



層	土色	土質	備考
1			自然 表土
2	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	地山礫片含
3	褐色	10YR4/6シルト	地山礫片含
4	暗褐色	10YR3/4シルト	地山礫片含
5	褐色	10YR4/4シルト	礫片~礫含
6	褐色	10YR4/4シルト	礫片~礫含
7	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	人為 礫片含 土塁積土

竖堀101東側土層断面図

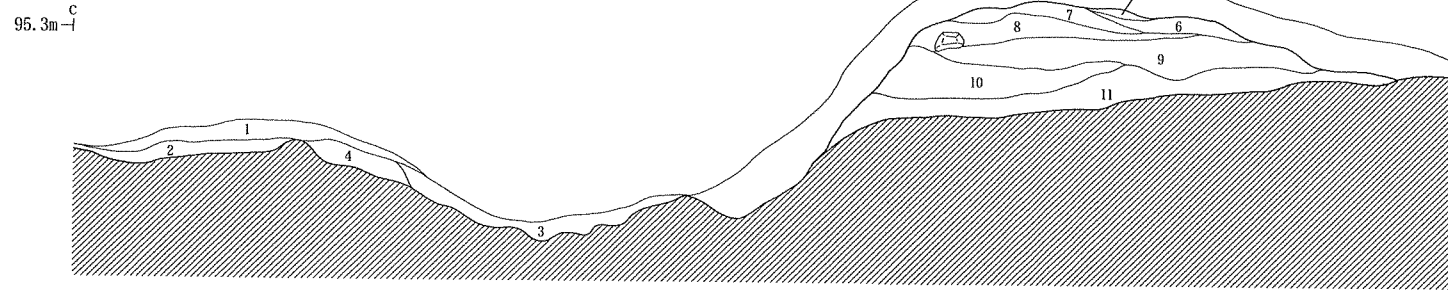
竖堀101西側



層	土色	土質	備考
1			自然 表土
2	にぶい黄褐色	10YR5/4シルト	風化岩片含 土塁積土
3	褐色	10YR4/4シルト	風化岩片含 土塁積土
4	黄褐色	10YR5/6シルト	風化岩片含 土塁積土
5	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	礫片含 炭化物微量
6	褐色	10YR4/6シルト	礫片含
7	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	人為 土塁積土
8	褐色	10YR4/6シルト	礫片微量 土塁積土
9	暗褐色	10YR3/4シルト	礫片含 土塁積土

竖堀101西側

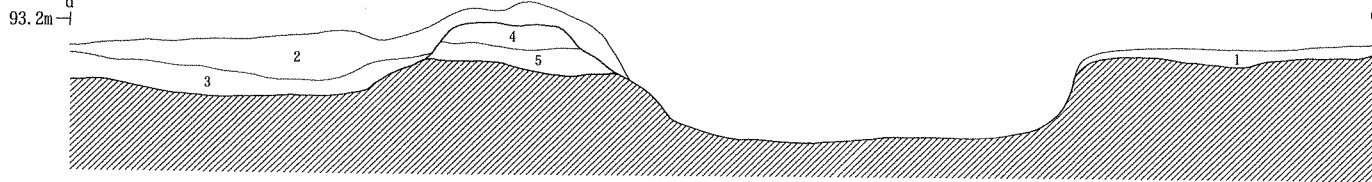
竖堀102東側



層	土色	土質	備考
1	褐色	10YR4/4シルト	自然 風化岩片含 表土
2	褐色	10YR4/4シルト	風化岩片・礫片含
3	黒褐色	10YR2/3シルト	土塁積土
4	褐色	10YR4/4シルト	土塁積土
5	暗褐色	10YR6/8シルト	人為 土塁積土
6	褐色	10YR4/3シルト	岩片含 土塁積土
7	黄褐色	10YR5/8シルト	風化岩片含 土塁積土
8	暗褐色	10YR3/3シルト	風化岩片・礫含 土塁積土
9	黄褐色	2.5Y5/4シルト	土塁積土
10	黄褐色	10YR5/8シルト	土塁積土
11	黒褐色	10YR3/2シルト	風化岩片微量 土塁積土

竖堀102東側

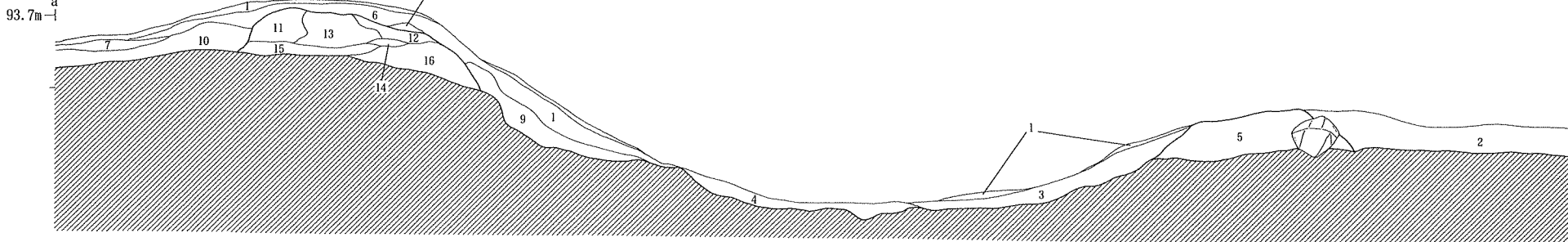
竖堀102西側



層	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	自然 炭化物・風化岩片微量
2	褐色	10YR4/4シルト	礫片~礫含
3	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	上層より礫片含
4	褐色	10YR4/6シルト	風化礫片含 土塁積土
5	褐色	10YR4/4シルト	風化礫片含 土塁積土

竖堀102西側

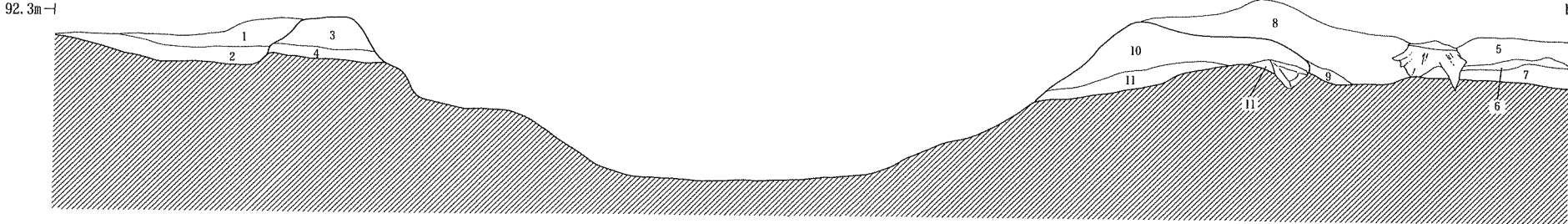
竖堀103北側



層	土色	土質	備考
1			自然 表土
2	褐色	10YR4/4シルト	礫含 土塁積土
3	黄褐色	10YR5/6シルト	礫片含 土塁積土
4	褐色	10YR4/3シルト	礫含 土塁積土
5	褐色	10YR4/6シルト	人為 礫片含 土塁積土
6	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	自然 土塁積土
7	褐色	10YR4/4シルト	土塁積土
8	褐色	10YR4/6シルト	土塁積土
9	褐色	10YR4/3シルト	礫片含 土塁積土
10	暗褐色	10YR3/4シルト	土塁積土
11	黄褐色	10YR5/6シルト	人為 炭化物少量 土塁積土
12	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	土塁積土
13	暗褐色	10YR3/4シルト	角礫含 土塁積土
14	褐色	10YR4/4シルト	礫片含 土塁積土
15	褐色	10YR4/6シルト	土塁積土
16	褐色	10YR4/4シルト	土塁積土

竖堀103北側

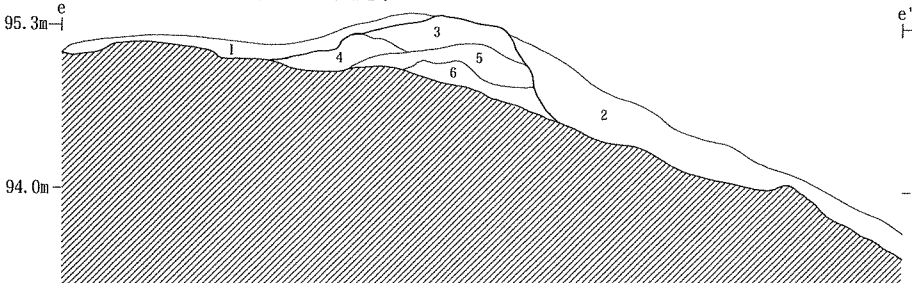
竖堀103南側



層	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/4シルト	自然 礫片~礫含 土塁積土
2	暗褐色	10YR3/3シルト	礫多量 土塁積土
3	褐色	10YR4/4シルト	人為 礫含 土塁積土
4	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	土塁積土
5	暗褐色	10YR3/4シルト	自然 礫片少量
6	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	礫片~礫含
7	黒褐色	10YR2/3シルト	礫片含
8	褐色	10YR4/4シルト	礫片含 土塁積土
9	暗褐色	10YR3/3シルト	礫片含 土塁積土
10	にぶい黄褐色	10YR4/3シルト	人為 礫片~礫含 土塁積土
11	暗褐色	10YR3/4シルト	礫片~礫多量 土塁積土

竖堀103南側

土塁状の高まりをもつ犬走り101



層	土色	土質	備考
1	暗褐色	7.5YR3/4シルト	自然 風化岩片含 表土
2	黄褐色	10YR5/6シルト	人為 風化岩片微量 埋土
3	褐色	10YR4/6シルト	風化岩片含 土塁積土
4	褐色	10YR4/6シルト	風化岩片含 整地
5	明黄褐色	10YR6/6シルト	風化岩片含 土塁積土
6	褐色	10YR4/4シルト	風化岩片少量 土塁積土

土塁状の高まりをもつ犬走り101

第18図 竖堀101・102・103、土塁状の高まりをもつ犬走り101土層断面図

腰郭107 (第14図)

C区北側東斜面、堀切101の土塁状の高まりに接続し、腰郭105・106より4.0m低い南東側、標高82.0～84.0m付近に位置する。幅1.10～4.55m、残存長26.73mで南西にのび、北東端が壊されている。斜面を削りだし、さらに中央部から南東端にかけて肩の部分を盛り土整地し平坦面を作り出している。整地の範囲は残存長7.25m、幅1.50～2.55m、層厚は最大で55cmで、攪乱により整地の北東端、南西端が壊されている。整地は小礫が中量入る褐色のシルト質土の単層である。北東端付近、約1.0m東下に長さ6.70m、幅0.40～1.02mの段があり、また南西端付近にも、約0.25m西上に長さ4.25m、幅0.40～0.65mの段がある。腰郭107は溝跡104を伴う。

腰郭108 (第15図)

C区中央付近南斜面、標高82.0～85.0m付近に位置する。残存長は30.75mで、断面から2時期あると考えられる。古い時期の腰郭は幅0.85～1.70m、長さ30.75mで東西に延びる。斜面を削りだし、西側の肩の部分を盛り土整地し平坦面を作り出し、下の斜面を切岸状にしている。整地は、最大層厚で29cm、黄褐色のロームを基調とし、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。また古い時期の腰郭には溝跡101が伴う。新しい時期の腰郭は溝跡101が機能しなくなった後、古い時期の腰郭の肩の部分を盛り土整地して平坦面を作り出し、その下の斜面を切岸状にしている。整地は最大層厚18cmで、褐色のロームを基調とし、土色・土質・混入物の違いから3層に分かれる。

腰郭109 (第15図)

C区中央北側斜面、標高88.5m付近、北側縦堀103の西側土塁状の高まりのさらに西側に位置し、地山を削り出し平坦面としている。幅1.05～1.53m、残存長約6.90mで東西にのび、中央が少しふくらんでいる。通路102の途中で接続し、西端は攪乱で壊されている。

腰郭110 (第16図)

C区南部の東側斜面、標高94.0～95.0m付近に位置し、地山を削り出し平坦面としている。腰郭110には焼土遺構104が伴う。幅1.65～2.50m、長さ約35.65mで南北にのび、南端は階段状になりながら東側縦堀102の北側の土塁状の高まりに接続する。南端部の堆積土は黒褐色～にぶい黄褐色のシルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから8枚の層に分かれる。

腰郭111 (第15図)

C区中央付近西側斜面、標高91.5～93.0m付近に位置し、斜面を削り出し平坦面としている。土塁状の高まりをもつ犬走り101の屈曲部の約2m下を、幅0.40～1.65m、長さ16.80mで南北に並行して延びる。

腰郭112 (第15図)

C区中央付近南斜面、標高91.0m付近に位置し、斜面を削りだし平坦面としている。幅1.00～1.65m、長さ17.18mで東西にのび、南側縦堀103の東側土塁状の高まりがあるところから0.65m東側で収束している。

腰郭113 (第16図)

C区南端東側斜面、縦堀101の土塁状の高まりの下、標高90.0m付近に位置し、斜面を削り出し平坦

面としている。幅0.65～1.30m、長さ3.85mで南北にのび中央が広がる。

腰郭114 (第16図)

C区南端東側斜面、東側竪堀101・腰郭113の南、標高90.0～90.5m付近に位置し、斜面を削り出して平坦面としている。幅0.65～1.43m、長さ6.15mで南北にのび南側が広がる。

腰郭115 (第16図)

C区南端西側斜面、西側竪堀101に接続し、標高92.5～93.0m付近に位置し、斜面を削り出し平坦面としている。幅0.88～1.90m、長さ8.08mで南北にのび中央が広がる。

堀切101 (第14図)

B区主郭とC区尾根の境、標高79.0～86.5m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根の頂部にほぼ直交する形で堀をつくり両側斜面に堀を延ばし、土塁状の高まりを伴う。残存長は40.50mで、東斜面堀切は断面から2時期あると考えられる。

新しい時期の堀切は上幅4.52m、下幅1.70m、深さ1.84mで沢に向かって下るに従い狭くなり、端は壊されている。堀底は地山岩盤を削って階段状になっている。壁は急に立ち上がり、断面形は箱堀を呈する。堀切の堆積土はシルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから13層に分かれるが、そのうち上部5層は切り出し道路を作る際の人為堆積土である。

東側斜面の古い時期の堀切は、新しい時期の堀切に切られているため、上幅、下幅、深さとも不明である。堀切の堆積土は小岩片が多量入る褐色のシルト質土の単層で自然堆積土である。

また東側斜面堀切は南側に土塁状の高まりを併設するが、北側は壊されており、確認されなかった。この土塁状の高まりは上幅2.12m、基底幅2.88m、高さ0.74mである。積み土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから3層に分かれる。

堀切中央部は上幅5.95m、下幅4.15m、深さ0.55～1.01mで、断面形は箱堀を呈する。

西側斜面堀切は上幅5.56m、下幅3.63m、深さ0.89mで沢に向かって下るに従い狭くなっている。堀底は地山岩盤を削って階段状にしており、壁は急に立ち上がり、断面形は箱堀を呈する。堀切の堆積土は、シルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから5層に分かれる。

また西側斜面堀切は北側と南側に土塁状の高まりを併設する。北側は上幅0.80m、基底幅2.95m、高さ1.45m、積み土は灰黄褐色～暗褐色の砂質シルトで、土色・土質・混入物の違いから5層に分かれる。南側は上幅2.68m、基底幅3.33m、高さ0.30m、積み土はにぶい黄褐色～褐色の砂質シルトで、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。

竪堀101 (第16図)

C区尾根南部、標高92.5～94.5m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根にほぼ直交する形で堀をつくり、両側斜面に堀を延ばし、土塁状の高まりを伴う。長さは12.08mである。

東側竪堀は長さ1.51m、上幅3.00m、下幅2.38m、深さ0.37mで、北側に併設する土塁状の高まりに比べて短い。堀底は地山岩盤を削っており、壁は北側で急に立ち上がる。断面形は皿状を呈する。竪堀の堆積土は確認されなかった。

また東側竪堀は北側に土塁状の高まりを併設し、上幅0.88m、基底幅1.38m、高さ0.34mで、東端

のすぐ下に腰郭113がある。積み土は小礫片が入るにぶい黄褐色のシルト質土の単層である。

西側竪堀は上幅2.17m、下幅1.78m、深さ0.22mで沢に向かって下るに従い狭くなっている。堀底は地山岩盤を削っており、壁は北側ではやや急に立ち上がり、南側では緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。堆積土は、風化岩片が入るにぶい黄褐色のシルト質土の単層である。

また西側竪堀は北側に土塁状の高まりを併設する。上幅0.97m、基底幅1.76m、高さ0.41m、積み土は褐色～暗褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから3層に分かれる。竪堀101の西端は腰郭115に接続している。

竪堀102 (第16図)

C区尾根南部、標高88.0～94.5m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根の頂部にほぼ直交する形で堀をつくり、両側斜面に堀を延ばし、土塁状の高まりを伴う。長さ25.90mである。

東側竪堀は上幅4.36m、下幅2.96m、深さ0.89mで沢に向かって下るに従い狭くなる。堀底は地山岩盤を削って階段状にしている。壁は北側では急に立ち上がり、南側では緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。竪堀の堆積土は、褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。

また東側竪堀は北側に土塁状の高まりを併設する。この高まりは東へ4.50mのびたところで二股に分かれ、北東と東南東にのび、北東にのびた高まりは上幅0.60m、基底幅1.20～2.05m、長さ3.85mで、腰郭110の南端に接続する。東南東にのびた高まりは上幅0.30～0.75m、基底幅1.85m、長さ9.65mである。また二股に分かれない部分の高まりは上幅2.02m、基底幅4.31m、高さ0.87mである。積み土は黄褐色～黒褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから8層に分かれる。

西側竪堀は上幅3.69m、下幅2.91m、深さ0.53mで沢に向かって下るに従い狭くなっている。堀底は地山岩盤を削って階段状にしており、竪堀頂部南東側には幅2.10m、長さ1.21mの段がつく。壁は北側では急に立ち上がり、南側では緩やかに立ち上がる。断面形は箱堀を呈する。竪堀の堆積土は確認されなかった。

また西側竪堀は北側に土塁状の高まりを併設し、上幅0.76m、基底幅1.94m、高さ0.33mである。地山を削りだし、積み土をしている。積み土は褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。北側の土塁状の高まりの頂部は、土塁状の高まりをもつ犬走り101に接続している。

竪堀103 (第15図)

C区尾根中央部、標高82.0～93.0m付近に位置し、地山面で確認された。丘陵の尾根の頂部にほぼ直交する形で堀をつくり、両側斜面に堀を延ばし、土塁状の高まりを伴う。残存長は34.20mで、北端、南端は切り出し道路で壊されている。

北側竪堀は上幅6.62m、下幅2.66m、深さ0.82mで沢に向かって下るに従い狭くなり、端は切り出し道路で壊されている。堀底は地山岩盤を削って階段状になっている。壁は東側では急に立ち上がり、西側では緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。竪堀の堆積土は礫を含み、褐色のシルト質土の単層である。

また北側竪堀は東側と西側に土塁状の高まりを併設する。東側の高まりは上幅1.36m、基底幅2.38

m、高さ0.47mである。積み土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから6層に分かれる。西側の高まりは上幅1.13m、基底幅1.92m、高さ0.30mで、地山を削りだしさらに積み土をしている。積み土は小礫が入る褐色のシルト質土の単層である。通路102の東端に接続している。

南側縦堀は腰郭108・112の西側に位置する。上幅6.15m、下幅2.28m、深さ1.12mで沢に向かって下るに従い狭くなり、途中切り出し道路で壊されている。さらに、南端も炭窯に切られ、切り出し道路によっても壊されている。堀底は地山岩盤を削って階段状になっている。壁は急に立ち上がる場所もあり、断面形は箱堀を呈する。縦堀の堆積土は確認されなかった。

また南側縦堀は東側と西側に土塁状の高まりを併設する。東側の高まりは上幅1.16m、基底幅2.56m、高さ0.63mである。積み土は黄褐色～暗褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。西側の高まりは上幅0.51m、基底幅1.12m、高さ0.39mである。積み土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土で、土色・土質・混入物の違いから2層に分かれる。通路101の北東端に接続する。

土塁状の高まりをもつ犬走り101 (第16図)

C区南、西側斜面、標高94.0～95.0m付近に位置し、丘陵の尾根の頂部にほぼ平行する形で土塁状の高まりをもつ犬走りを作り出している。逆L字状を呈し、総長51.00mで、東西に7.50mのび、そこから南に43.50mのびて西側縦堀102の北側の土塁状の高まりに接続する。途中2ヶ所で土塁が壊されている。上幅0.55m、基底幅1.88m、高さ0.56mで地山を削った上に積み土をしている。土塁状の高まりは、東側では緩やかに立ち上がり、西側では急に立ち上がる。積み土は、明黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから4層に分かれるが、そのうちの1層は整地として、土塁の東側に延びる。また犬走りは、幅1.20～5.32m、総長63.55mである。東西に18.95mのび、そこから南北に44.60mのびて西側縦堀102の北側土塁状の高まりに接続する。幅は曲がり角で最も広く、途中2ヶ所で段がついている。

通路101 (第15・16図)

C区中央から南に延びる尾根の東側斜面、標高91.0～93.0m付近に位置する。総長20.45mで南北方向にのび、地山を削りだし平坦面としている。南側縦堀103の西側土塁状の高まりに平行して、尾根から沢に向かって2.25mのび、そこから逆L字状に曲がり18.20m南へ延びる。幅0.75～1.50mで、南へ下り徐々に細くなる。

通路102 (第15図)

C区中央から西に延びる尾根の北側斜面、標高88.5～92.0m付近に位置する。残存長31.60mで東西方向にのび、地山を削りだし平坦面としている。北側縦堀103の西側土塁状の高まりに接続して西側にのび、途中腰郭109に接続し、西端は切り出し道路で壊されている。幅0.55～1.60mで、西へ下り徐々に細くなる。

橋脚跡101 (第14図)

C区の堀切101中央部堀底、標高87.0m付近に位置し、桁行2間、梁行1間の南北に延びる橋脚跡で

ある。桁行が東側柱列で (4.07m)、柱間寸法は北から (1.67m)・(2.42m)、西側柱列で (3.77m)、柱間寸法は (1.77m)・(2.00m) である。梁行は北妻で (2.30m)、南妻で (1.97m) である。柱穴掘り方の平面形は、長軸26~34cm、短軸20~31cmの隅丸長方形のもの、一辺20~25cmの隅丸方形のもの、長径32~40cm、短径28~34cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは3~31cmで、堆積土は凝灰岩片が少量入る暗褐色の砂質シルトである。

切岸101 (第14図)

B区主郭西側斜面、標高78.5~84.2m付近、西側堀切101の北側土塁状の高まりの4.7m北に位置し、地山面で確認された。主郭の西側斜面を人工的に削平して急勾配にしている。残存長7.80m、幅9.02mで、裾は幅が狭くなる。裾部分は切り出し道路で壊されており本来の形は不明である。

溝跡101 (第15図)

C区腰郭108の西側、標高84.0~84.5m付近に位置し、地山面で確認された。検出長は約13.50mで、東西方向にほぼ直線的に延びる溝跡である。溝跡東半分の南側立ち上がりは確認されなかった。深さ23cm、上幅55~95cm、下幅42~60cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は褐色~灰黄褐色のシルト質土を基調とし、土色・土質・混入物の違いから2枚の層に分かれる。いずれも自然堆積土である。

溝跡102 (第14図)

C区腰郭105の北側、標高88.0m付近に位置し、地山面で確認された。検出長は約4.45mで南北方向にほぼ直線的に延びる溝跡である。上幅65~85cm、下幅15~25cmである。

溝跡103 (第14図)

C区腰郭106の中央、標高87.0m付近に位置し、地山面で確認された。検出長は約2.90mで、南西方向にほぼ直線的に延びる比較的短い溝跡である。上幅25cm、下幅10~15cmである。

溝跡104 (第14図)

C区腰郭107北側、標高83.0m付近に位置し、地山面で確認された。地形に沿ってL字状に曲がる南西方向に延びる溝跡である。検出長は5.70mで、北西に延びる溝は1.15m、南西に延びる溝は4.55mである。深さ3~13cm、上幅が30~40cm、下幅は10~20cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は小礫片が少量入る褐色の砂質シルトの単層で自然堆積土である。

掘立柱建物跡101 (第15図)

C区竪堀103の東に位置し、地山面で確認された。桁行2間、梁行1間の南北棟である。建物総長は、桁行が西側柱列で (3.80m)、柱間寸法は北から (1.99m)・1.82mである。梁行が北妻で (4.20m)、南妻で4.15mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸25cm、短軸18cmの隅丸長方形のもの、一辺22cmの隅丸方形のもの、長径25~27cm、短径20cmの楕円形のもの、径23~25cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは10~30cmで、堆積土は明黄褐色~明褐色のシルト質土である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径13~15cmの円形を呈する。堆積土は褐色のシルト質砂である。

掘立柱建物跡102 (第15図)

C区竪堀103の東に位置し、地山面で確認された。桁行1間、梁行1間の東西棟で、建物総長は桁行

が北側柱列で(5.52m)である。梁行が東妻で(3.30m)、西妻で(3.54m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22cm、短軸20cmの隅丸長方形のもの、長径26~31cm、短径20cmの楕円形のもの、径26cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは12~18cmで、堆積土は褐色のシルト質土である。柱痕跡は1ヶ所で確認され、径12cmの円形を呈する。堆積土は明黄褐色のシルト質土である。

掘立柱建物跡103 (第15図)

C区竪堀103の東に位置し、地山面で確認された。桁行3間、梁行1間の東西棟である。建物総長は、桁行が南側柱列で(6.47m)、柱間寸法は西から(2.13m)・(2.23m)・(2.10m)である。梁行が東妻で(3.70m)、西妻で(3.62m)である。柱穴掘り方の平面形は、一辺23cmの隅丸方形のもの、長径25~34cm、短径19~28cmの楕円形のもの、径28~30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは13~32cmで、堆積土は黄褐色~暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は2ヶ所で確認され、径14~16cmの円形を呈する。堆積土は黄褐色~暗褐色のシルト質土である。

柱穴列跡101 (第14図)

C区腰郭106上に位置し、地山面で確認された。溝跡103と並行して南北に延びる柱穴列跡で、3間の規模である。南北の柱穴列の総長は(6.06m)、柱間寸法は北から(2.20m)・(1.93m)・(1.94m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸29cm、短軸25cmの隅丸長方形のもの、一辺22~29cmの隅丸方形を呈するものがある。柱穴の深さは29~46cmで、堆積土は暗褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡102 (第14図)

C区腰郭105上に位置し、地山面で確認された。溝跡102と並行し南北に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。南北の柱穴列の総長は(3.43m)、柱間寸法は北から(1.67m)・(1.76m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸22~23cm、短軸14~20cmの隅丸長方形を呈する。柱穴の深さは25~30cmで、堆積土は凝灰岩片が入る暗褐色~黒褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡103 (第15図)

C区竪堀103の東に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、4間の規模である。焼土遺構107と重複するが、これより古い。東西の柱穴列の総長は(8.09m)、柱間寸法は西から1.93m・2.22m・2.03m・(1.91m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸28cm、短軸19cmの隅丸長方形のもの、長径27~32cm、短径20~24cmの楕円形を呈するものがある。柱穴の深さは14~32cmで、堆積土は炭化物が少量入る黄褐色~褐色のシルト質砂である。柱痕跡は4ヶ所で確認され、径8~13cmの円形を呈する。堆積土は黄褐色~褐色のシルト質土である。

柱穴列跡104 (第15図)

C区竪堀103付近に位置し、地山面で確認された。柱穴列跡105の西側に並行して南北に延びる柱穴列跡で1間の規模である。南北の柱穴列の総長は2.11mである。柱穴掘り方の平面形は、長軸25~30cm、短軸19~22cmの隅丸長方形を呈する。柱穴の深さは18cmで、堆積土は炭化物が入る黄褐色~褐色のシルト質土である。柱痕跡はすべての柱穴で確認され、径8~10cmの円形を呈する。

柱穴列跡105 (第15図)

C区堅堀103付近に位置し、地山面で確認された。柱穴列跡104の東側に並行し、南北に延びる柱穴列跡で、1間の規模である。南北の柱穴列の総長は(2.08m)である。柱穴掘り方の平面形は、長軸28cm、短軸24cmの隅丸長方形のもの、径40cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは29~35cmで、堆積土は小礫・炭化物が入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

柱穴列跡106 (第15図)

C区堅堀103の東に位置し、地山面で確認された。東西に延びる柱穴列跡で、2間の規模である。東西の柱穴列の総長は(3.41m)、柱間寸法は西から(1.57m)・(1.85m)である。柱穴掘り方の平面形は、長径27~39cm、短径20~34cmの楕円形のもの、径30cmの円形を呈するものがある。柱穴の深さは30~48cmで、堆積土は地山ブロック~岩片が少量入る褐色のシルト質土である。柱痕跡は確認されなかった。

④ 東西丘陵北斜面 (D区)

東西丘陵で発見した遺構は切岸2、土壙跡22である。

切岸203 (第20図)

副郭北東斜面、標高68.3~74.5m付近、切岸204の南東に位置し、地山面で確認された。副郭のまわりの斜面を人工的に削平して急勾配にし、長さ13.60m、幅12.80mのほぼ円形を呈しながら裾は幅が狭くなる。切岸の中央部は切り出し道路で壊されている。

切岸204 (第20図)

副郭北東斜面、標高67.5~74.0m付近、切岸203の北西に位置し、地山面で確認された。副郭のまわりの斜面を人工的に削平して急勾配にし、長さ12.10m、幅11.70mの楕円形を呈しながら裾は幅が狭くなる。切岸の上部・中央部は切り出し道路で壊されている。

⑤ 東西丘陵南斜面 (E区)

東西丘陵南斜面で発見した遺構は切岸4、土壙跡23である。

切岸201 (第20図)

副郭南東斜面、標高69.8~74.8m付近、切岸202の西、切岸103の東に位置し、地山面で確認された。副郭のまわりの斜面を人工的に削平して急勾配にし、長さ8.20m、幅8.15mの楕円形を呈しながら裾は幅が狭くなる。

切岸202 (第20図)

副郭南東斜面、標高70.5~73.5m付近、切岸201の東に位置し、地山面で確認された。副郭のまわりの斜面を人工的に削平して急勾配にし、長さ3.90m、幅6.10mの幅広い楕円形を呈しながら裾は幅が狭くなる。

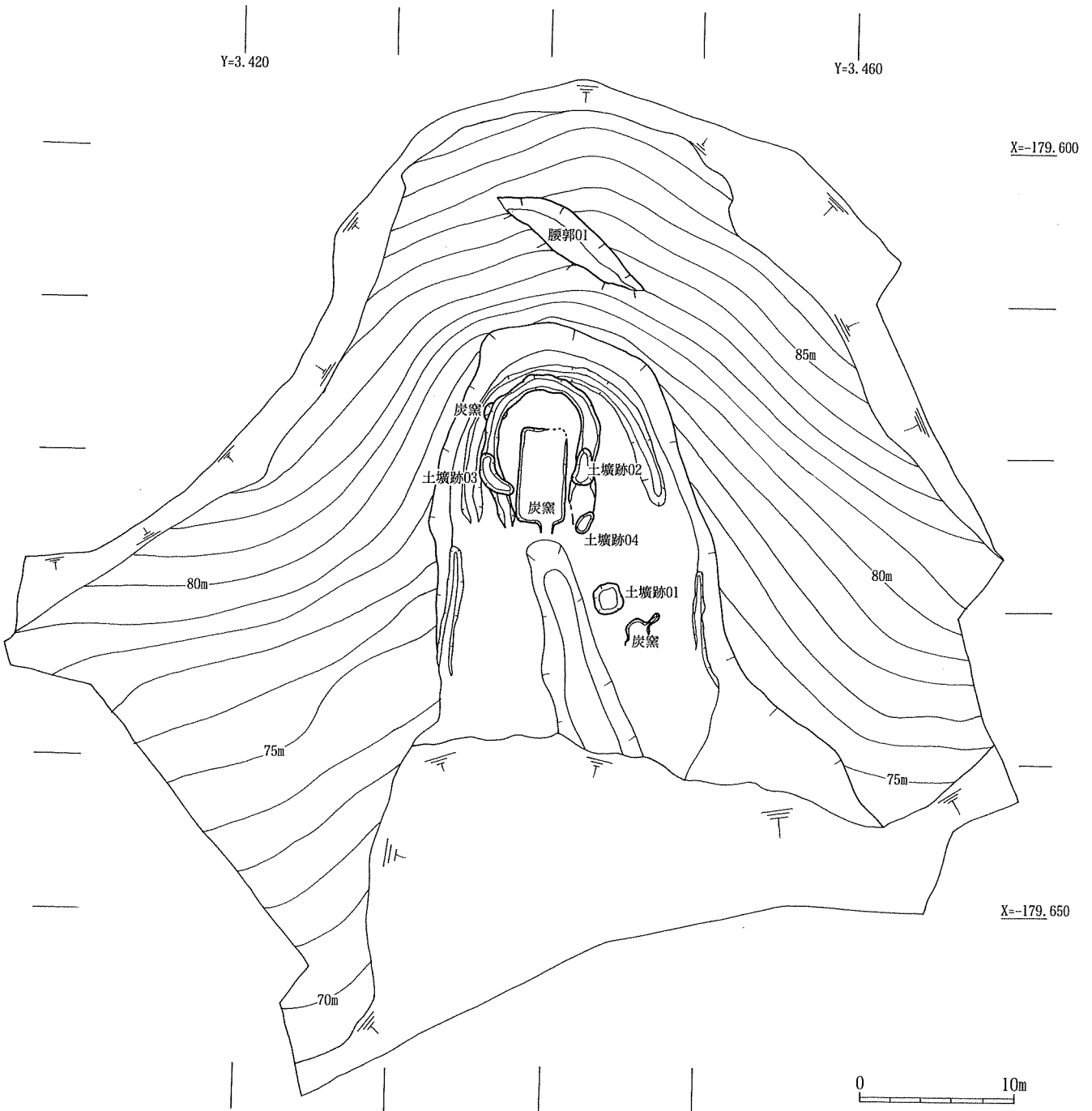
切岸102 (第20図)

B区主郭南東斜面、標高68.0~75.0m付近、切岸103の南西に位置し、地山面で確認された。炭窯に

切られている。主郭南東斜面を人工的に削平して急勾配にし、残存長14.45m、幅10.85mの楕円形を呈しながら裾は幅がやや狭くなる。また南東裾部分は切り出し道路で壊されている。

切岸103 (第20図)

B区主郭東斜面、標高67.5~77.5m付近、切岸201の西、切岸102の北東に位置し、地山面で確認された。主郭東斜面を人工的に削平して急勾配にし、長さ20.50m、幅18.30mの楕円形を呈しながら裾は幅が狭くなる。切岸内は段を作り出している。



第19図 南側丘陵南端部 (H区) 遺構配置図

⑥ 南側丘陵南端部（H区）

丘陵先端部分（H区）は遺構確認・実測・写真撮影・補足調査を行い調査を終了した。丘陵南側の裾部分は重機による表土除去だけとした。南方向に延びる沢に、緩やかな傾斜の平坦面を作り、斜面には地山削りだしの腰郭がある。調査区の頂部及び西・東・南は造成時に削平され壊されている。南側丘陵南端（H区）で発見した遺構は腰郭1、土壇跡4、炭窯跡3がある（第19図）。

腰郭01（第19図）

H区北側斜面中央、標高82.0～85.5m付近に位置する。幅0.40～1.50m、長さ約11.51mで南東方向に延びる。地山を削りだし平坦面としている。

⑦ 土壇跡

北側丘陵（A区）から36基、東西丘陵頂部（B区）から2基、南側丘陵（C区）から3基、東西丘陵北斜面（D区）から22基、東西丘陵南斜面（E区）から23基、E区沢向かいの北斜面（F区）から4基、D区沢向かいの南斜面（G区）から10基、南側丘陵南端（H区）から4基、計104基発見された。

土壇跡01（第19図）

H区南側丘陵南端部に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸192cm、短軸187cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸126cm、短軸119cmの隅丸長方形を呈する。深さは18～44cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面から杭痕などは発見されなかった。堆積土は暗褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。いずれも自然堆積土である。

土壇跡02（第19図）

H区南側丘陵南端部に位置し、地山面で確認された。炭窯と重複し、これよりも新しい。平面形は長軸242cm、短軸143cmの溝状を呈し、底面は長軸197cm、短軸79cmの溝状を呈する。深さは15～40cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、2層に分かれる。

土壇跡03（第19図）

H区南側丘陵南端部に位置し、地山面で確認された。炭窯と重複し、これよりも新しい。平面形は長軸336cm、短軸102cmの溝状を呈し、底面は長軸301cm、短軸74cmの溝状を呈する。深さは13～30cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壇跡04（第19図）

H区南側丘陵南端部に位置し、地山面で確認された。炭窯と重複し、これよりも新しい。平面形は長径158cm、短径81cmの楕円形を呈し、底面は長径152cm、短径72cmの楕円形を呈する。深さは14～18cmで、底面はほぼ平坦である。壁は開きながら立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は確認できなかった。

土壇跡101 (第4図)

B区の主郭上段平場西側に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸118cm、短軸94cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸89cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈する。深さは22～26cmで、壁は開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色のシルト質土の単層である。

土壇跡102 (第20図)

E区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径164cm、短径125cmの楕円形を呈し、底面は長径100cm、短径50cmの楕円形を呈する。深さは31～49cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。堆積土は黒褐色の弱シルトの単層である。

土壇跡103 (第15図)

C区中央の丘陵頂部に位置し、地山面で確認された。平面形は長径90cm、短径57cmの楕円形を呈し、底面は長軸70cm、短軸29cmの隅丸長方形を呈する。深さは13～34cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色の砂質シルトの単層である。

土壇跡104 (第20図)

C区中央の南西斜面中腹に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸130cm、短軸104cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸90cm、短軸61cmの隅丸長方形を呈する。深さは15～22cmで、底面はほぼ平坦である。壁は開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。

土壇跡105 (第20図)

C区中央の南西斜面中腹に位置し、地山面で確認された。平面形は長径120cm、短径90cmの楕円形を呈し、底面は長径95cm、短径70cmの楕円形を呈する。深さは19～41cmで、底面はほぼ平坦である。壁は開きながら立ち上がり、断面形は長径方向で逆台形を呈する。

土壇跡106 (第20図)

F区東側の緩やかな北東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸194cm、短軸94cmの溝状を呈し、底面は長軸150cm、短軸58cmの溝状を呈する。深さは8～28cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向で皿状を呈する。堆積土は褐色のシルト質土の単層である。

土壇跡107 (第20図)

F区東側の緩やかな北東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸163cm、短軸102cmの溝状を呈し、底面は長軸128cm、短軸66cmの溝状を呈する。深さは9～25cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向で皿状を呈する。堆積土は暗褐色のシルト質土の単層である。

土壇跡108 (第20図)

F区東側の緩やかな北東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸325cm、短軸86cmの溝状を呈し、底面は長軸270cm、短軸56cmの溝状を呈する。深さは8～14cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向で皿状を呈する。

土壇跡109 (第20図)

F区中央の緩やかな北東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径154cm、短径118cmの楕円形を呈し、底面は長径105cm、短径82cmの楕円形を呈する。深さは5～28cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は短径方向で皿状を呈する。

土壇跡110 (第14図)

B区の主郭南側の腰郭103に位置し、整地面で確認された。平面形は長径195cm、短径76cmの楕円形を呈し、底面は長径124cm、短径46cmの楕円形を呈する。深さは約22cmで、壁はやや開き気味に立ち上がり、断面形は短径方向でU字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色のシルト質土の単層で、人為的堆積土である。

土壇跡201 (第20図)

A区中央の西斜面裾付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸175cm、短軸120cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸156cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは54～126cmで、底面はほぼ平坦であるが、西側に向かってやや低くなる。北辺では、底面からの立ち上がりが上端より外側に延びオーバーハングし、南辺ではほぼ垂直に立ち上がる。東西辺は底面から垂直に立ち上がり、途中から大きく開く。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。いずれも自然堆積土である。また、底面には6本の杭痕が打ち込みにより附設される。底面中央付近から南半部にかけてみられ、3本が東側長辺の際に、2本が西側長辺の際に、1本が中央付近にある。杭痕は径2～6cmの円形を呈し、深さは5～8cmである。

土壇跡202 (第20図)

A区南端の西斜面中腹に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸183cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸147cm、短軸32cmの隅丸長方形を呈する。深さは45～110cmで、底面はほぼ平坦である。壁は南辺でやや開き気味に立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壇跡203 (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸140cm、短軸100cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸88cm、短軸42cmの隅丸長方形を呈する。深さは87～117cmで、底面はほぼ平坦である。壁は東・西辺でほぼ垂直に立ち上がるが、南・北辺では途中まで垂直に立ち上がり、中程でやや外傾しながら立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、14層に分かれる。

土壇跡204 (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西斜面上に位置し、地山面で確認された。土壇跡205と重複し、これより新しい。平面形は長軸230cm、短軸45cmの溝状を呈し、底面は長軸245cm、短軸4cmの溝状を呈する。深さは51～93cmで、底面は北西端部でやや緩やかに立ち上がるほかはほぼ平坦である。壁は東・西辺ではやや急激に立ち上がり、北端ではほぼ垂直に立ち上がり、南端では底面からの立ち上がりが上端より外側に延びオーバーハングしている。断面形は短軸方向でV字形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色

のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壇跡205 (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西斜面上に位置し、地山面で確認された。土壇跡204と重複し、これより古い。平面形は土壇跡204に西辺が一部壊されているが、長軸189cm、短軸115cmの隅丸長方形を呈する。底面は長軸123cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈する。深さは60～93cmで、底面は西側で全体的に緩く傾斜している。壁はやや急激に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壇跡206 a (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西斜面上に位置し、地山面で確認された。土壇跡206 bと重複し、これより新しい。平面形は長軸77cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸62cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは72～80cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壇跡206 b (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西斜面上に位置し、地山面で確認された。土壇跡206 aと重複し、これより古い。平面形は長軸120cm、短軸98cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸94cm、短軸84cmの隅丸長方形を呈する。深さは36cmで、底面の状態は土壇跡206 aに壊されており不明である。壁は内湾気味にほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土の単層である。

土壇跡207 (第21図)

A区北端の尾根鞍部頂上付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸124cm、短軸82cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸115cm、短軸61cmの隅丸長方形を呈する。深さは70～90cmで、底面はほぼ平坦である。壁は西辺で底面からの立ち上がりが上端より外側に延びオーバーハングしているほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壇跡208 (第21図)

A区北端の尾根鞍部頂上付近に位置し、地山面で確認された。土壇跡209と重複し、これより新しい。平面形は長軸117cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸68cm、短軸33cmの隅丸長方形を呈する。深さは250cmで、底面は北側にステップ状の段が取り付くほかはほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壇跡209 (第21図)

A区北端の尾根鞍部頂上付近に位置し、地山面で確認された。土壇跡208と重複し、これより古い。平面形は長軸240cm以上、短軸57cmの溝状を呈し、底面は長軸200cm以上、短軸33cmの溝状を呈する。深さは20cmほどで、底面はやや西側に傾斜している。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は暗褐色のシルト質土の単層である。また、底面には5本の杭痕が打ち込みにより附設される。長辺に沿って約0.6m間隔で並び、このうち2本に切り合いがみられる。杭痕は径

20cmほどの円形を呈し、深さは約15cmである。

土壌跡210 (第21図)

A区北端の尾根鞍部頂上付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸124cm、短軸92cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸105cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは75cmほどで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。

土壌跡211 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸155cm、短軸102cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸132cm、短軸45cmの隅丸長方形を呈する。深さは85～90cmほどで、底面は南に向かってなだらかに傾斜している。壁は短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、長軸方向ではやや開き気味に立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壌跡212 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸110cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸95cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは40～79cmほどで、底面はほぼ平坦である。壁は短軸方向でやや開き気味に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壌跡213 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸245cm、短軸33cmの溝状を呈する。底面は長軸217cm、短軸15cmの溝状を呈し、南側に向かってやや傾斜している。深さは65～75cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は灰褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壌跡214 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸97cm、短軸58cmの隅丸長方形を呈する。底面は長軸56cm、短軸38cmの隅丸長方形を呈し、西側に向かって傾斜している。深さは48～60cmで、壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色の砂混じりシルトを基調とし、6層に分かれる。

土壌跡215 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長径70cm、短径56cmの不整な楕円形を呈し、底面は長径52cm、短径35cmの楕円形を呈する。深さは58～72cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短径方向で箱形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壌跡216 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長径58cm、短径48cmの楕円形を呈し、底面は長径54cm、短径44cmの楕円形を呈する。深さは52～68cmで、底面はほぼ平坦でやや北に傾

斜している。壁は南側で上端より外側に延びオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短径方向で箱形を呈する。堆積土はにぶい褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。

土壌跡217 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長径85cm、短径54cmの楕円形を呈し、底面は長径63cm、短径50cmの楕円形を呈する。深さは12～38cmで、底面はほぼ平坦でやや東側に傾斜している。壁は底面から開き気味に立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土の単層である。

土壌跡218 (第21図)

A区北端の尾根鞍部上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸328cm、短軸38cmの溝状を呈し、底面は長軸324cm、短軸15cmの溝状を呈する。深さは21～43cmで、底面は緩やかに北側に向かって傾斜している。壁は南端部では上端よりオーバーハングしているほかは、やや開き気味に立ち上がる。断面形は、南端では短軸方向でU・V字形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。

土壌跡219 (第21図)

A区北端の尾根鞍部に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸95cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸76cm、短軸41cmの隅丸長方形を呈する。深さは58～64cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は黒褐色～褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壌跡220 (第21図)

A区北端の尾根鞍部に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸180cm、短軸115cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸147cm、短軸83cmの隅丸長方形を呈する。深さは38～75cmで、底面は北側に緩やかに傾斜している。壁は北辺でやや緩やかに立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壌跡221 (第21図)

A区北端の尾根鞍部東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸332cm、短軸70cmの溝状を呈し、底面は長軸327cm、短軸29cmの溝状を呈する。深さは72～100cmで、底面は両端部が浅く、中央付近に向かって緩やかに傾斜している。壁は南端部で底面が上端より外側にオーバーハングし、ほかはやや開き気味に立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、13層に分かれる。

土壌跡222 (第21図)

A区北端の尾根鞍部東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径130cm、短径105cmの楕円形を呈し、底面は長軸50cm、短軸35cmの隅丸長方形を呈する。深さは75～115cmで、底面は中央部がやや窪んでいる。壁は開き気味に急に立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壌跡223 (第21図)

A区北端の尾根鞍部東斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸142cm、短軸74cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸100cm、短軸21cmの隅丸長方形を呈する。深さは80～115cmで、底面は西側に向かって緩やかに傾斜している。壁は底面からやや急激に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は灰褐色～褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。

土壌跡224 (第21図)

A区北側の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸170cm、短軸82cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸143cm、短軸45cmの隅丸長方形を呈する。深さは51～79cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや急激に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壌跡225 (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の西側斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸108cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸80cm、短軸33cmの隅丸長方形を呈する。深さは42～59cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から急激に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。

土壌跡226 (第21図)

A区北端部の尾根鞍部の東側斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸90cm、短軸65cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸63cm、短軸35cmの隅丸長方形を呈する。深さは79～120cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壌跡227 (第20図)

A区北側の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸157cm、短軸100cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸133cm、短軸56cmの隅丸長方形を呈する。深さは66～104cmで、底面はほぼ平坦で西側に緩やかに傾斜している。壁は底面から急激に立ち上がり、断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。

土壌跡228 (第20図)

A区北側の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸205cm、短軸132cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸134cm、短軸72cmの隅丸長方形を呈する。深さは47～100cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや急激に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壌跡229 (第20図)

A区北側の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸145cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸112cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは35～89cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から急激に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壇跡230 (第20図)

A区北端の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸164cm、短軸79cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸155cm、短軸66cmの隅丸長方形を呈する。深さは64～116cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。底面から杭痕などは発見されなかったが、断面には据え置いた杭痕と考えられる攪乱がみられた。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、15層に分かれる。

土壇跡231 (第20図)

A区北端の東斜面上に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸145cm、短軸77cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸130cm、短軸69cmの隅丸長方形を呈する。深さは55～98cmで、底面は平坦で中央付近がやや窪む。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。また、底面には4本の杭痕が打ち込みにより附設され、4本とも各コーナー付近にある。杭痕は長軸20～31cm、短軸12～20cmの隅丸長方形を呈し、深さは12～16cmである。

土壇跡232 (第21図)

A区北端の尾根鞍部西斜面に位置し、地山面で確認された。土壇跡233と重複し、これより新しい。平面形は長軸147cm、短軸105cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸138cm、短軸65cmの隅丸長方形を呈する。深さは35～91cmで、底面はほぼ平坦である。壁は東・西辺でやや開き気味に立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。

土壇跡233 (第21図)

A区北端の尾根鞍部西斜面に位置し、地山面で確認された。土壇跡232と重複しこれより古い。平面形は長軸167cm、短軸130cmの不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸119cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは61～104cmで、底面は西に向かってやや傾斜する。壁は底面からやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。

土壇跡234 (第20図)

G区東側の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸263cm、短軸42cmの溝状を呈し、底面は長軸295cm、短軸10cmの溝状を呈する。深さは60～73cmで、底面は中央付近が低く、両端に向かって緩やかに傾斜している。底面からの立ち上がりは、長軸両端で上端より外側に延びオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でV字形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。

土壇跡235 (第20図)

A区中央の東側斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸103cm、短軸56cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸90cm、短軸38cmの隅丸長方形を呈する。深さは26～41cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は明黄褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壌跡236 (第20図)

A区中央の東側中腹斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸120cm、短軸63cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸100cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈する。深さは31～47cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壌跡237 (第20図)

G区中央の南西斜面中腹に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸160cm、短軸78cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸145cm、短軸66cmの隅丸長方形を呈する。深さは42～77cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は明褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壌跡238 (第20図)

D区東側の丘陵裾付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸188cm、短軸94cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸178cm、短軸44cmの隅丸長方形を呈する。深さは95～121cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや開きながら急激に立ち上がり、断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、13層に分かれる。また、底面には4本の杭痕が打ち込みにより附設される。1本が南東側短辺の中央に、2本が北西側短辺の両コーナーに、そして1本が中央付近にある。杭痕は径9cmほどの円形を呈し、深さは2～6cmである。

土壌跡239 (第20図)

D区東側の丘陵裾付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸114cm、短軸63cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸108cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈する。深さは16～27cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壌跡240 (第20図)

D区西側の北西斜面中腹に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸186cm、短軸96cmの不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸169cm、短軸47cmの不整な隅丸長方形を呈する。深さは83～97cmで底面はほぼ平坦である。壁は底面から開き気味に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は黄橙色～褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。底面には打ち込みによる杭痕が8本附設され、1本が南東側短辺のコーナーに、2本が北西側短辺のコーナー付近に、5本が中央付近にある。杭痕は径4～8cmの円形を呈し、深さは3～8cmである。

土壌跡241 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸137cm、短軸83cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸137cm、短軸67cmの隅丸長方形を呈する。深さは67～88cmで、底面はほぼ平坦でやや南側に緩やかに傾斜する。壁は南西角付近で上端より外側に延びオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土はにぶい黄橙色～褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。底面には打ち込みによる杭痕が6本附設される。4本が各コーナー付

近に、2本が中央付近にある。杭痕は径4～5cmの円形を呈し、深さは2～5cmである。

土壇跡242 (第20図)

D区中央の北西側斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸151cm、短軸90cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸136cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈する。深さは64～95cmで、底面はほぼ平坦で西側に緩やかに傾斜する。壁は南西角付近で上端より外側に延びオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。また、底面には5本の杭痕が打ち込みにより附設される。4本が各コーナー付近にあり、1本が中央付近にある。杭痕は径5～9cmの円形を呈し、深さは4～8cmである。

土壇跡243 (第20図)

D区中央の北西側斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸192cm、短軸88cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸154cm、短軸20cmの隅丸長方形を呈する。深さは130～162cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、北壁では底面から30cmほど垂直に立ち上がったところで幅30cmほどの段を形成している。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。

土壇跡244 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸147cm、短軸94cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸125cm、短軸78cmの隅丸長方形を呈する。深さは93～132cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、11層に分かれる。また、底面の南西コーナーには1本の杭痕が打ち込みにより附設される。杭痕は径8cmの円形を呈し、深さは10cmである。

土壇跡245 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸156cm、短軸104cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸127cm、短軸60cmの不整な隅丸長方形を呈する。深さは62～112cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～灰黄褐色のシルト質土を基調とし、12層に分かれる。底面には4本の杭痕が打ち込みにより附設され、各コーナー付近にある。杭痕は径9～10cmの円形を呈し、深さは3～6cmである。

土壇跡246 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸167cm、短軸111cmの少し不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸140cm、短軸56cmの隅丸長方形を呈する。深さは63～114cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。また、底面には3本の杭痕が打ち込みにより附設され、1コーナーを除いて各コーナー付近にある。杭痕は径5～6cmの円形を呈し、深さは3～7cmである。

土壇跡247 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径179cm、短径114cmの楕円形を呈

し、底面は長軸133cm、短軸45cmの隅丸長方形を呈する。深さは84～104cmで、底面はほぼ平坦である。壁は開きながら立ち上がり、断面形は短径方向でロート状を呈する。堆積土は黄色～灰黄色のシルト質土を基調とし、8層に分かれる。いずれも自然堆積土である。また、底面南西コーナーには1本の杭痕が打ち込みにより附設される。杭痕は径9cmの円形を呈し、深さは5cmである。

土壌跡248 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径174cm、短径122cmの楕円形を呈し、底面は長軸114cm、短軸64cmの中央がややくびれた隅丸長方形を呈する。深さは96～140cmで、底面はほぼ平坦で北西に向かってやや低くなる。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、13層に分かれる。また、底面南東コーナーには1本の杭痕が打ち込みにより附設される。杭痕は径9cmの円形を呈し、深さは3cmである。

土壌跡249 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸174cm、短軸77cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸173cm、短軸37cmの隅丸長方形を呈する。深さは120～146cmで、底面は両端から中央部にかけてやや高くなる。底面からの立ち上がりは、西辺で上端より外側に延びオーバーハングしているほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。

土壌跡250 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸103cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸92cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは26～67cmで、底面は両端から中央部にかけてやや高くなる。底面からの立ち上がりは、南西隅で上端より外側に延びオーバーハングしているほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は明褐色～褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。

土壌跡251 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸166cm、短軸100cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸144cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは126～156cmで、底面は西辺側に段差12cmのステップが取り付け、東辺に向かって低くなる。壁はやや開きながらほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、12層に分かれる。また、底面には杭痕が4本打ち込みにより附設される。1本は東側短辺のコーナー付近にあり、3本は西側短辺の両コーナーと中央付近にある。杭痕は径3～4cmの円形を呈し、深さは1～4cmである。

土壌跡252 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸133cm、短軸62cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸127cm、短軸54cmのやや不整な隅丸長方形を呈する。深さは12～33cmで、底面はほぼ平坦である。底面からの立ち上がりは、南西辺で一部上端より外側に延びオーバーハング

しているほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土の単層である。

土壇跡253 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸188cm、短軸74cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸166cm、短軸59cmの隅丸長方形を呈する。深さは21～52cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。

土壇跡254 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径130cm、短径70cmの不整な楕円形を呈し、底面は長軸103cm、短軸45cmの隅丸長方形を呈する。深さは46～67cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。

土壇跡255 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸126cm、短軸78cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸83cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈する。深さは30～55cmで、底面はほぼ平坦である。壁は北西辺で開きながら立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。

土壇跡256 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸128cm、短軸95cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸100cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈する。深さは46～94cmで、底面はほぼ平坦で南西方向に向かって低くなる。壁は一部では立ち上がりの途中から大きく開くが、ほかは緩やかに開く。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。また、底面中央付近には杭痕が打ち込みにより1本附設される。杭痕は一辺が12～15cmの方形を呈し、深さは18cmである。

土壇跡257 (第20図)

D区東側の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸155cm、短軸101cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸130cm、短軸40cmの隅丸長方形を呈する。深さは66～86cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや大きく開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は黄褐色～にぶい黄褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。また底面には3本の杭痕が打ち込みにより附設され、北西コーナーを除く各コーナー付近にある。杭痕は径8～9cmの円形を呈し、深さは3～8cmである。

土壇跡258 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は126cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、底面は101cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは28～37cmで、底面は中央部が若干低くなっているほかは平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆

積土は黄褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壇跡259 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸124cm、短軸75cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸108cm、短軸63cmの隅丸長方形を呈する。深さは12～41cmで、底面はほぼ平坦で東側に向かって低くなり、北西隅には比高差約4cmのステップが取り付く。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄橙色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壇跡260 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸124cm、短軸85cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸92cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは15～37cmで、底面は中央部付近がやや窪んでいる。壁はやや開き気味に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、2層に分かれる。

土壇跡261 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸143cm、短軸71cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸134cm、短軸66cmの隅丸長方形を呈する。深さは20～42cmで、底面は南側に向かって低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。また、底面中央付近には杭痕が打ち込みにより1本附設される。杭痕は径12cmの円形を呈し、深さは12cmである。

土壇跡262 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸133cm、短軸71cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸119cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈する。深さは20～40cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は黄褐色～にぶい黄褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壇跡263 (第20図)

E区東側の南西斜面裾に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸120cm、短軸53cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸104cm、短軸41cmの隅丸長方形を呈する。深さは3～29cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壇跡264 (第20図)

E区東側の南西斜面裾に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸147cm、短軸105cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸105cm、短軸84cmの隅丸長方形を呈する。深さは5～41cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。残存状態が極めて悪く、堆積土は確認できなかった。

土壇跡265 (第20図)

D区中央の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径170cm、短径84cmの不整な楕円形

を呈し、底面は長径160cm、短径71cmの不整な楕円形を呈する。深さは17～56cmで、底面は平坦であり北側に向かってやや低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。

土壌跡266 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸145cm、短軸103cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸115cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは66～96cmで、底面はほぼ平坦である。壁は開き気味に立ち上がり、北西辺では途中から大きく開き立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。また、底面の西側短辺の際には、水成堆積の痕跡が径17cmの円形を呈する範囲で1本確認でき、据え置いた杭の痕跡と考えられる。

土壌跡267 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸174cm、短軸92cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸155cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈する。深さは34～69cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北西辺ではやや開き気味に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。また、底面中央付近には杭痕1本が打ち込みにより附設される。杭痕は径20～23cmの不整な円形を呈し、深さは15cmである。

土壌跡268 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸143cm、短軸95cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸133cm、短軸71cmの隅丸長方形を呈する。深さは26～64cmで、底面はほぼ平坦で西側に向かって低くなる。底面からの立ち上がりは、北東隅が上端より外側に延びオーバーハングするほかは開き気味に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、12層に分かれる。底面中央付近には杭痕が1本打ち込みにより附設される。杭痕は径23cmの円形を呈し、深さは23cmである。

土壌跡269 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸165cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈する。深さは12～72cmで、底面はほぼ平坦で東側に向かって低くなる。壁は開きながらほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。底面には杭痕が3本打ち込みにより附設され、1本が東側短辺中央にあり、2本が西側短辺の両コーナーにある。杭痕は径15～23cmの円形を呈し、深さは4～14cmである。杭痕の基底部は3本とも上端より外側に位置し、斜めに据えられている。

土壌跡270 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸143cm、短軸78cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸118cm、短軸54cmの隅丸長方形を呈する。深さは53～79cmで、底面は平坦である。壁は開き気味に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～にぶい褐色のシルト

質土を基調とし、9層に分かれる。

土壇跡271 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸169cm、短軸93cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は長軸155cm、短軸86cmの隅丸長方形を呈する。深さは61～113cmで、底面はほぼ平坦で南西方向に向かって低くなる。壁の立ち上がりは西側両隅で上端より外側に延び、オーバーハングしているほかは開き気味に立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は明褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、11層に分かれる。また、底面には3本の杭痕が打ち込みにより附設される。1本は東側短辺の中央付近にあり、2本は西側短辺の両コーナーにある。杭痕は径6～7cmの円形を呈し、深さは8～12cmである。また、3本の杭痕は中央付近に向かって斜めに据えられている。

土壇跡272 (第20図)

E区東側の斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸171cm、短軸95cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸152cm、短軸75cmの隅丸長方形を呈する。深さは33～69cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は橙色～褐色のシルト質土を基調とし、9層に分かれる。底面には5本の杭痕が打ち込みにより附設される。4本が各コーナー付近にあり、1本が東側短辺の中央付近にある。杭痕は径13～15cmの円形のものが2本、長径19～22cm、短径13～17cmの楕円形を呈するものが3本あり、深さは4～16cmである。底面南側両隅の杭痕は中央付近に向かって斜めに据えられている。

土壇跡273 (第20図)

E区東側の斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸214cm、短軸27cmの溝状を呈し、底面は長軸183cm、短軸19cmの溝状を呈する。深さは11～30cmで、底面は南西側で段状になり、中央付近がやや低くなっている。壁は両端で緩やかに立ち上がり、ほかはほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。底面から杭痕などは発見されなかった。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。

土壇跡274 (第20図)

E区東側の斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸145cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸135cm、短軸68cmの隅丸長方形を呈する。深さは23～54cmで、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。底面の中央付近には打ち込みによる杭痕が1本附設される。杭痕は径14cmの円形を呈し、深さは28cmである。

土壇跡275 (第20図)

E区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸164cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸159cm、短軸72cmの隅丸長方形を呈する。深さは15～46cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色～灰褐色のシルト質土を基調とし、7層に分かれる。また、底面には6本の杭痕が打ち込みにより附設される。3

本が北側長辺の際にあり、もう3本が東側短辺の際にある。杭痕は径3～5cmの円形を呈し、深さは3～8cmである。

土壇跡276 (第20図)

E区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸248cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸241cm、短軸74cmの隅丸長方形を呈する。深さは13～55cmで、底面はほぼ平坦である。壁は北辺両隅で上端より外側に延びオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土はにぶい褐色～灰褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。また、底面には打ち込みによる杭痕が2本一対となり、規則的に5列配置される。杭痕は径4～6cmの円形のものや長径7cm、短径5cmの楕円形を呈するものがあり、深さは5～10cmである。

土壇跡277 (第20図)

E区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸150cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸150cm、短軸65cmの隅丸長方形を呈する。深さは32～73cmで、底面はほぼ平坦で中央付近がやや低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で箱形を呈する。堆積土は暗褐色～黒褐色のシルト質土を基調とし、10層に分かれる。また、底面には5本の杭痕が打ち込みにより附設される。2本が東側短辺の際にあり、3本が西側短辺の際にある。杭痕は径8～10cmの円形を呈し、深さは5～10cmである。西辺の壁際の2本の杭痕は中央付近に向かって斜めに据えられている。

土壇跡278 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸152cm、短軸83cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸145cm、短軸72cmの隅丸長方形を呈する。深さは4～30cmで、底面はほぼ平坦で南側に向かってやや低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。

土壇跡279 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸177cm、短軸125cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸151cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。深さは106～148cmで、底面はほぼ平坦で東に向かって低くなる。底面からの立ち上がりは北辺で大きく開いて立ち上がるほかは、やや開きながら立ち上がる。断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は明褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、14層に分かれる。また、底面には9本の杭痕が打ち込みにより附設される。3本が東側短辺の際にあり、6本が西側短辺の際にある。杭痕は径4～6cmの円形のものや、長径9cm、短径4cmの楕円形を呈するものがあり、深さは3～6cmである。

土壇跡280 (第20図)

E区東側の南西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸127cm、短軸63mの隅丸長方形を呈し、底面は長軸100cm、短軸46cmの隅丸長方形を呈する。深さは24～47cmで、底面はほぼ平坦で東に向かってやや低くなる。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は明褐色～褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。また、底面には7本の杭痕が全体的に不規則に打ち込みにより附設される。杭痕は径4～5cmの円形を呈し、深さは3～8cmである。

土壇跡281 (第20図)

D区西側の北西斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸160cm、短軸86cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸142cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは48～118cm、底面はほぼ平坦で東に向かってやや低くなる。壁は開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向でロート状を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、5層に分かれる。底面の西側短辺際に打ち込みによる杭痕が2本附設される。杭痕は径14cmの円形のものや、長径15cm、短径13cmの楕円形を呈するものがあり、深さは10～15cmである。

土壇跡282 (第20図)

G区東端の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径187cm、短径106cmの不整な楕円形を呈し、底面は長軸158cm、短軸90cmの不整な隅丸長方形を呈する。深さは16～42cmで、底面は北側でやや低くなる。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、3層に分かれる。また、底面の北側長辺の中央際に1本の杭痕が打ち込みにより附設される。杭痕は径15cmの円形を呈し、深さは6cmである。

土壇跡283 (第20図)

G区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸140cm、短軸65cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸130cm、短軸59cmの隅丸長方形を呈する。深さは5～24cmで、底面はほぼ平坦で南に向かってやや低くなる。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、4層に分かれる。また、底面の北側長辺際に3本の杭痕が打ち込みにより附設される。杭痕は長径8～16cm、短径7～10cmの楕円形を呈し、深さは4～6cmである。

土壇跡284 (第20図)

G区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸215cm、短軸86cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸196cm、短軸44cmの隅丸長方形を呈する。深さは78～108cmで、底面はほぼ平坦で西側に向かってやや低くなる。壁は開きながら立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は黄褐色～褐色のシルト質土を基調とし、12層に分かれる。

土壇跡285 (第20図)

G区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径232cm、短径160cmの楕円形を呈し、底面は長軸183cm、短軸47cmの不整な隅丸長方形を呈する。深さは108～198cmで、底面はほぼ平坦で西側に向かってやや低くなる。壁の立ち上がりは西辺で上端より外側に延び、オーバーハングしているほかは、開きながら立ち上がる。断面形は短径方向で逆台形を呈する。堆積土は褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、12層に分かれる。

土壇跡286 (第20図)

G区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸135cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸112cm、短軸40cmの隅丸長方形を呈する。深さは67～92cmで、底面はほぼ平坦で東側に向かってやや低くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は

褐色～暗褐色のシルト質土を基調とし、6層に分かれる。

土壌跡287 (第20図)

G区中央の南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長径220cm、短径98cmの不整な楕円形を呈し、底面は長径194cm、短径86cmの不整な楕円形を呈する。深さは5～30cmで、底面はほぼ平坦で南に向かって低くなる。壁はやや開きながら立ち上がり、断面形は短径方向で皿状を呈する。堆積土は暗褐色のシルト質土の単層である。

土壌跡288 (第20図)

G区中央南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸201cm、短軸104cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸127cm、短軸35cmの隅丸長方形を呈する。深さは150～180cmで、底面はほぼ平坦である。壁は北・東辺はほぼ垂直に立ち上がり、西・南辺は大きく開きながら立ち上がる。断面形は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は褐色のシルト質土を基調とし、15層に分かれる。

土壌跡289 (第20図)

G区西側南斜面に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸225cm、短軸75cmの隅丸長方形を呈する。底面から杭痕などは発見されなかった。

③ 焼土遺構

焼土遺構はA区から1基、B区から1基、C区から6基、F区から2基で計10基検出された。

焼土遺構101 (第20図)

C区竪堀103の東、標高86.6m付近に位置し、地山面で確認された。平面形は径70cmの円形を呈し、深さは2cmである。堆積土は確認されなかった。

焼土遺構102 (第20図)

F区、標高53.5m付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸77cm、短軸73cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸60cm、短軸55cmの隅丸長方形を呈する。深さは9cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。堆積土は確認されなかった。

焼土遺構103 (第20図)

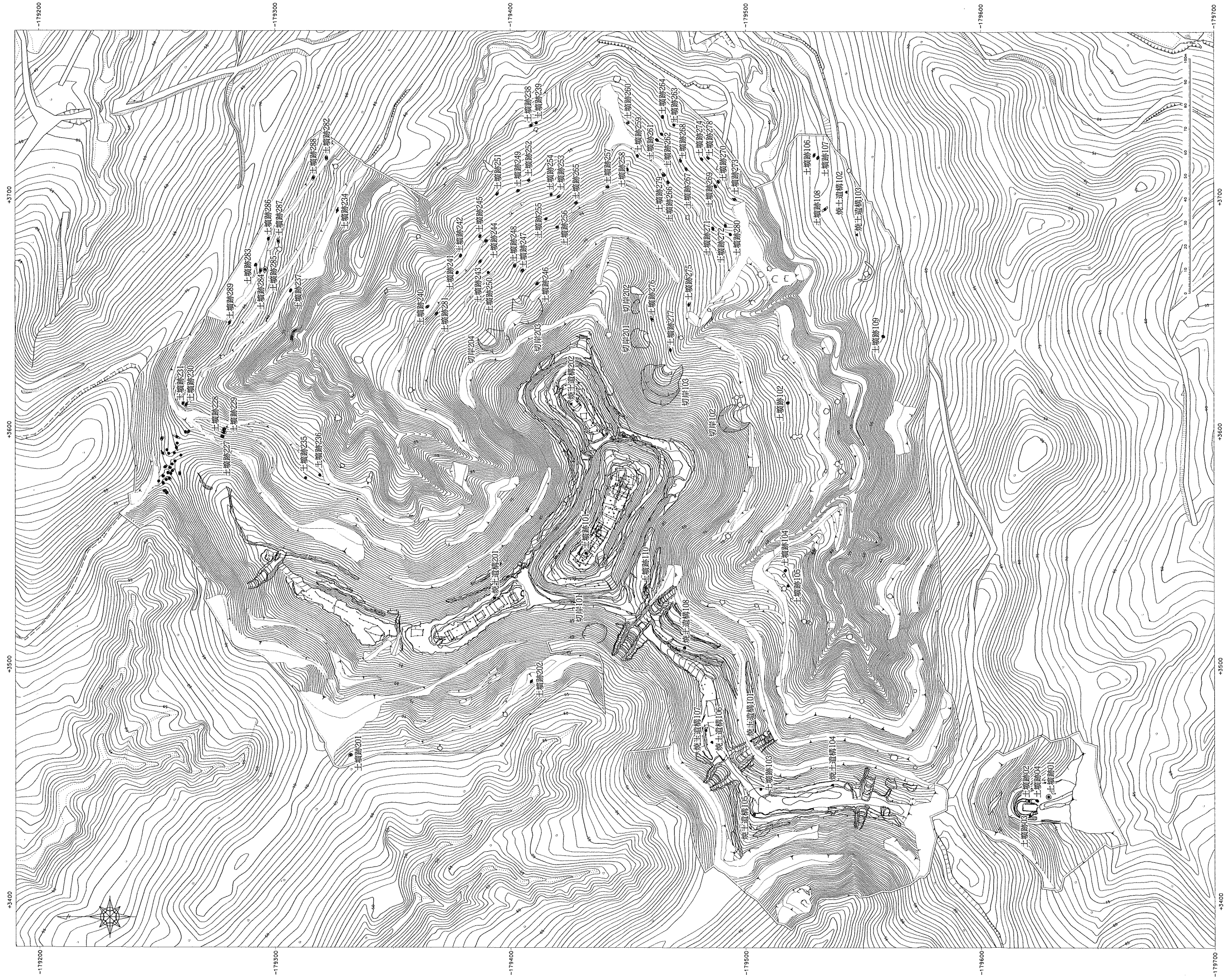
F区、標高54.2m付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長径60cm、短径38cmの楕円形を呈し、深さは4cmである。堆積土は確認されなかった。

焼土遺構104 (第20図)

C区腰郭110、標高94.3m付近に位置し、地山面で確認された。平面形は長軸115cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈し、底面は長軸93cm、短軸62cmの隅丸長方形を呈する。深さは21cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は確認されなかった。

焼土遺構105 (第20図)

C区土塁状の高まりをもつ犬走り101、標高94.3m付近に位置し、地山面で確認された。平面形は一边110cmの隅丸長方形を呈し、底面は一边91cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から急に立ち上がり、断面形は皿状を呈する。



第20図 切岸・土塚・焼土遺構配置図 S=1/1,500